

---

# ハイスクールD×D 正義の味方

ジェイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイスクールD×D 正義の味方

### 【Nコード】

N1611W

### 【作者名】

ジェイ

### 【あらすじ】

誓いをたてた正義の味方、その誓いはまだ破られずに残っていた。そんな正義の味方に転機が訪れる。

彼はそこで何をなすのか。

一話（前書き）

衝動に負けてやってしまった……。

しかし後悔はありません！

だから読んで頂けたら幸いです。

## 一話

あれからどれだけの時が経ったのだろうか……………。

私が、いや、俺が過去の俺を殺そうとし、そして失敗し、そして気付かされてから。

奴（俺）は言った。

「間違えなんかじゃない！」と。

それが他人の理想を模倣したモノだとしても。

ただその理想があまりにも綺麗に見え、それに憧れただけだったとしても、それは間違えではないと。

ふっ、まさか殺そうとした自分に負け尚且つ気付かされるとは何たる皮肉か。

だが、私は救われた。

ただの言葉だ。

屁理屈ととられても可笑しくはない。

戯言と言っても良いだろう。

しかし私は救われた。

私は間違えていなかったと。

それに言ってしまったしな。

「答えは得た。

大丈夫だよ遠坂、俺も頑張っていくから」とな。

我が主の少女。

容姿端麗にして文武両道、才能に溢れたまさに完璧な存在。と見せかけて肝心な所でミスをするどこか抜けた少女。

思えば彼女には生前だけではなく、こうして守護者になってからも世話になったな……………。

私には知る術はないが彼女は元気だろうか。

まあ、彼女なら問題ないであろう。

私が心配するまでもないくらい彼女は強いからな。

ふむ、それにしても

「出て来い。貴様等私に何か用でもあるのか？」

複数の気配がして私はそれに声を掛けた。

しかし不思議なものだ。

ここは「座」。

そして私の世界。

見渡す限り荒野が広がり、そして見渡す限り剣が突き刺さっている。

アンリミテッドフレイドワークス  
『無限の剣製』

私の心象世界でいて大禁忌と呼ばれる大魔術。

普通であればここに来れるものなどまずいない。干渉できるとしても私と契約した世界そのものが、それに近いもの、もしけはそれを超えるものくらいだ。

あの宝石翁なら出来そうで怖くもあるが奴ではないだろう。なにせ気配は複数あるのだから。

そして気配の主が姿を現した。

正確には光の球、まるで魂の様な物であったが、それが五つ私の前に浮いていた。

「もう一度問うぞ。貴様等私に何か用か？」

何者とは聞かない。多分だが私は彼等に会った、いや殺したことがあるからだ。

彼等は

「流石ですね。姿を現せていないにもかかわらず私達がわかるのですか。」

「うむ、我等を滅するだけはある。」

そう、我等、神と魔王をな……。」

そうだ。彼等は、神と魔王だ。

以前『抑止の守護者』として呼ばれた場所は私がいた世界とはかなり違う世界だった。

魔術があり秘匿されていた、それは同じだが違い過ぎるモノがあった。

神がいた。

魔王がいた。

天使がいた。

悪魔がいた。

堕天使がいた。

そしてそれらは争っていた。

人間の争いとは訳が違つ。

まさに星の危機だった。

そして驚くことに神、悪魔、墮天使の三勢力を無視して争う二頭の龍がいたのだ。

龍の力は凄まじく山を消し、大地を割り、地形を変た。

そこで三勢力は一時的に手を結びこの二頭の龍を封印することに成功したのだがこの後がまずかった。

このまま終戦となれば良かった物であろうことが再び争いを始めてしまった。

普段の『抑止の守護者』であれば全てが終わった後の掃除が仕事であつたが、この時は違った。

神々が争うことでこの星は終焉を迎えてしまう。  
それは不味い。故に私を含めた全ての守護者が召喚されこれの抑止に当たった。

そして私に割り振られた役割がこの神と魔王の抹殺。

何故私とその役目を担ったかは私の力にある。

私の力『無限の剣製』

名の通り無限に剣を作り出し内包する。



その中には神話に登場する神殺しや悪魔殺し、龍殺しも存在する。まさに私にうつつつけだったのだ。

そして私はこの任務を達成し、他の守護者も数多くの天使、悪魔、墮天使を殺して三勢力に壊滅的なダメージを与えこれ以上争えない状況にまで追いやり自らの座に戻ったのだ。

しかし何故彼らがここにいる？

ここに来たのは彼等の存在ならば可能であろうことはわかった。

何せ神に魔王だ。

だが理由がわからない。

彼等は何の為にわざわざここまで来た？

「私達はね、君にお願いがあつて来たのですよ。」

ふむ、お願いか。

生前は正義の味方を目指していた身だ。助けになってやりたい所ではあるが……

「内用次第だな。」

ここまで来たのだからわかるだろう？

私は、座から離れられない。

正確には召喚は出来るがそれには莫大な力が必要になる。

それこそ星が行使するほどの、な。」

何故私に願うのかは謎だが、その場合それなりの力が必要だ。

『抑止の守護者』として召喚される時は星の力を。

『聖杯戦争』の召喚では『聖杯』の力を。

何れにせよ莫大な力が必要になる。

彼等ならばその力を用意出来るだろうが、そこまでして私に願うことは何であろうか。

「何、簡単な事だ。貴様には我等の世界に行つて欲しい。

勿論只では言わん。

貴様の願い、我等に出来る限りは叶えよう。」

くく、私に願う癖に私の願いを叶えるか。しかしまだわからない事がある。

「あの世界に行くのは構わないが其処で何をさせたい。

そして私の願いを叶えると言うがそれだけの力があるのなら自分達でやれば良いだろ？」

当然の疑問だろう。其処で何をさせたいのか、まあ私に出来るのは武力行使と、認めたくはないが家事やガラクタ弄りなどこの場の内容からあまり役に立た無さそうなことくらいだ。

そして私の願いを叶えるだけの力があるのなら私に願う必要はない

はずだ。

これにも理由はあるのだろうか聞いておきたいことではある。

「君にはあの世界の者達の力になって欲しいのです。

あの世界は私達を失い非常に不安定になりつつあります。

私達以外にも神や悪魔は存在しますが一柱と言えど神が失われるのはそれだけ世界が不安定になるのです。

そしてそれは魔王も同じ。

元を辿れば似た存在ですから。」

成る程、世界は危険を排除したがまた違う危険を呼び寄せてしまったと言っことか。

「それに我等で出来るなら初めからそうする。

しかし我等には肉体が既がない。

貴様のように受肉すればと思うかもしれないがそれには力が足りない。仮にも神と魔王だからな。

だが貴様ならば我等の力で可能だ。

貴様は英雄と言えどその神聖度は低い故どうとでもなる。

そのくせその力は絶大で高位な者にも比毛をとらない。

我等を滅したのがその証拠だ。」

ふむ、状況は理解した。

確かに私は英雄だが神聖度は低いので受肉に必要な力は少なくてすむ。しかし彼等は神と魔王。

神聖度だけで言えばどの英雄よりも高い。  
いや、もしかしたら全ての英雄を足しても彼等には及ばないであろう。

そして私は彼等を殺すだけの力があつた。

成る程、確かにこれ以上ない人選だ。

だがひとつ問題がある。それは

「それはわかつた。しかし問題がある。私はこの`座`より動けん。仮にサーヴァントとして召喚しても何時までも現界出来るものではない。」

どうするつもりだ？まゝ`座`より解放してくれるなら願つてもないがな。」

言外に無理だろ？と言つように聞いてみると驚きの答えが帰つてきた。

「貴様は何を言っている？

ここより解放するのは当然であろう？」

今なんと言つた？解放するのは当然？

ふむ、どうやら霊体でも耳は悪くなるらしい。  
新たな発見だな。

しかし聞き間違えたままにするのは良くない。今一度聞こうか。

「今座より解放すると聞こえたが私の聞き間違えか？  
くくく、それとも神や魔王も冗談を言うのかな？」

「聞き間違えではありませんよ。  
私達は君をここより解放します。」

ちなみに私達だって冗談くらいいいいますよ？  
例えば、人間滅ぼしちゃいます？とか」

どうやら聞き間違えでは無かったらしい。  
そして貴様等の冗談は洒落にならんわ！  
何が「「ねー」」だ！争っていた癖に仲が良いではないか！

い、いや、落ち着け私。  
私を座より解放すると言うのだから願ったりではないか。

「話は理解したがどのように私を解放する？  
生半可なことでは不可能だぞ。」

「問題ない。確かに貴様がいなくなれば世界は貴様を逃がさない様に動くであろう。ならば代わりがいれば良い。」

代わりだと？まさか！！

「貴様等が座に入ると言うのか！？」

それがどういふことか「わかっていますよ」「……………ならば何故だ？何故そこまでする？」

私の問いに彼等は突然語り始めた。

「我等とて初めから争うつもりは無かった。むしろ手を取り合い世界を良きモノにして行こうとしていたくらいだ。」

「しかし互いの意見は違い、それに加えて墮天使の介入もあり闘うしかなくなってしまったのです。」

「そしてその戦争を危険とした星により私達守護者が派遣され貴様等を私が殺した……………」。

結論付ける様に私が言葉を続けるが話はまだ終わらなかった。

「そう、我等は貴様に滅せられた。だが我等は感謝している。星を滅ぼさずにすんだのだからな。言わば自業自得だったのだ。」

「ですがそれでも私達はあの世界に何かしたかった。例えこの身が永遠に縛られようとも……………」。

私達にはあの世界にしてあげられることはこれくらいしかありませんから。

だからお願いします。私達の代わりになって欲しいとは言いません！何かを押しつけるつもりもありません！

君の好きな様に生きて頂いて構いません！

少しで良いんです……………。あの世界に力を貸して頂けませんか？

錬鉄の英雄、いや、正義の味方！エミヤシロウ！！」

驚いた。

私の真名を知っていることもだが神も魔王も世界を真に思っていること……。

くくく、そんな想いを聞かされては

「了解した。貴様等、いや、貴方達の願い、私に出来る限りで叶えよう……」

正義の味方としては断る理由がない！

「ありがたい。

ならば貴様の願いを言え。

それが我等から貴様に与える対価だ。

何が欲しい？力か？金か？名声か？女か？」

何故だろうか……、先ほどと違い一気に俗物の様になったな。しかし私の願いは彼等と『契約』で叶えられる。

「別にいらん。私の願いは既に叶えられたも同然だ。

まあくれると言っのなら貰っておくが、そちらで適当に考えてくれると助かる。」

私の言葉に驚いた様子が伝わってきた。

む？光の球なのに何故その様子がわかるのかだと？

見ればわかる。

何せ彼等の頭上？に？や？がリアルに見えているのだからな。

……………不気味だな。果てしなく不気味だ。

むしろおかしい！

無駄な所に力を使いすぎだと私は思うのだが……………。

何か集まって相談しはじめた、のか？



五つの光球が寄り集まって上下に跳ねたり左右に揺れたりして、拳  
句には回転までしはじめた。

生前、色々と見てきたが神と魔王の魂らしきものが踊る？のは始め  
て見た。

……………ふむ。私への贈り物が決まるまでこれを眺めていよう。

非常に不気味ではあるが私の為にしてくれていることだ。彼等の想  
い？を無下にはできない。

サーカスか何かかと思っていれば大丈夫だ。……………多分……………  
……………。

\*

「はあはあはあ。

き、決まり、ました、よ」

彼等は肩で息をしていた。

知らなかった。霊体でも疲れるのだな。

確かにあの動きは疲れるだろう。飛び回り、跳ね回り、ぶつかり合  
い、拮抗し、弾け飛び、そしてそれを繰り返す。

しかもその速さは私の技の一つ『赤原獵犬』にも比毛をとらないほどだ。

きつと意見のぶつかり合いをしていたのだろうか確かに疲れるだろう。

生身の肉体なら、だが。

彼等は私により肉体を失ったが故に座まで来て私と『契約』をした。つまり彼等は霊体、魂とさえ言えるはずだ。

それが疲れる？

彼等は本当に死んだのか？とさえ思ってしまう私はおかしいのだろうか。

まあ彼等は特別と思うことにしよう。でなければ私の精神に異常をきたしそつだ。

「き、貴様には、はあはあ、じ、神器ごほっごほっ！神器を、あ、与える。」

未だに誰だかわからんが大丈夫か？

……それにしても神器か。

以前あの世界に呼び出された時に与えられた知識では確か神が産み出した奇跡のひとつで人間に宿る規格外の力だったか？  
私達の世界で言う宝具の様な物だったはずだ。

ランクは低いと言えどこの身は英霊、人間はおろか神や魔王すら殺すほどの力を宿す存在。

さらに私には宝具と呼んでも差し支えがない魔術がある。

それに神器まで与えるとは。

しかし神器には色々なものがあつたはず。いったい何を宛がうつもりなのだろうか。

「我らが貴様に与える神器、それは龍だ。」

「龍？曖昧な言い方だな。  
神器ではなかったのか？」

「神器であり龍であると言っことはです。普通、龍系神器は過去に存在した龍が封印され宿るものですが今から君に与えるのは完全なオリジナル。私達が作り上げた龍です。生のある神器で今はまだ生まれていません。君に宿ることで成長を始めます。」

そしてこの生きる神器の最大の特徴が『輪廻の円環』、片方が亡くなっても片方が生きている限り死ぬことはありません。

後は神器が強力なものになるか脆弱なままかは君次第ですよ」

とんでもない能力だな……………。  
つまり私はほぼ死ぬことはないと言っわけだ。

「ただ気をつけよ。貴様と神器の龍が同じに滅せられると当然貴様は死ぬ。」

そして片方が滅せられ復活するまでタイムラグがある。貴様の力量ならばおよそ10分、龍は生まれたばかりならば数秒だけが育てば育つほど時間は長くなる。この神器の特徴に頼り満身すれば貴様は死ぬぞ？」

「忠告感謝しよう。」

ただその条件は私の得意とする所。

生き残るだけなら何とでもなるさ。」

そう、生き残るだけなら。

この身は非才な身なれど鍛え上げた体、戦略、戦術を駆使すればある程度、それこそ宝具にすらどうにかする自信がある。

対軍宝具のような広域殲滅攻撃は正直厳しいがな。

「さて、説明することも無くなりましたし、そろそろ君に神器を宿しましょうか。

神よ、お願いします。」

「うむ、では始めるか。」

そうして1つの光球が私に近づいてきた。

それにしてもこの偉そうな方が神だったのか。

どれが誰だかわからなかったがコレだけは違うと思っていた。

むしろあの丁寧な方が神と思っていたのだがな。

姿を見ればわかるだろうが生憎と以前は話をせず遠距離より宝具の

雨を降らせ一気に殲滅したので会話ではわからなかった。

私に近づいてきた神がさらに光を発して。

「うむ、では受け取れ。」

名前は貴様がつけよ、貴様が親だ。」

私は光に包まれた。

何かが体に入ってくるのを感じる。

しかし不快感はなく、むしろ心地が良い。

体に、魂に馴染む様にそれは広がっていき、私の中に別の何かが生まれたような、そんな感覚がある。

そして私は神器を手に入れた。

名前はまだ決まっていなかったがこの神器（龍）を見て決めよう。

この子に相応しい名を。

\*

「神器も馴染んだようですね。」

それではそろそろ行って貰いましょうか。」

タイミングを見計らった様に魔王？は言った。

どうやら私が座より離れる時が来たらしい。

「貴様を送り体を与える。しかし我等に出来るのはそこまで。肉体の構成は貴様がしろ。」

「それはどのようにすればいい？」

剣などはなれているが生憎自分自身はしたことがないのでね。」

「難しいことはないです。ただ自分を想像すれば良いのです。」

想像する、か。

私は闘いるとき、常に最強の自分を想像してきた。

そういうことは私には当たり前のことだった。」

そして私の最強とは

「了解した。なら、さっさと始めよう。」

「うむ、では想像しろ。他は我等の仕事だ」

この世界、『無限の剣製』だ！

ゆえに私は唱える。最強の自分を作り出す言霊を！

「I am bone of my sword（体は剣で出来ている）」

私の周囲が光だし

「Steel is my body, and fire is my blood（血潮は鉄で、心は硝子）」  
小さな光が踊り始める。

「I have created over a thousand blades（幾たびの戦場を越えて不敗）」  
それはやがて大きくなり

「Unknown to Death（ただ一度の敗走もなく）」

私の体を覆うように集まっていく。



「Nor known to Life (ただ一度の理解もされな  
い)」

光は徐々に体に入り込み

「Have withstood pain to create  
many weapons (彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に  
酔う)」

完全に私の体に溶け込んだ。

「Yet, those hands will never h  
old anything (故に、生涯に意味はなく)」

次の瞬間、内側から力を感じ

「So as I pray, unlimited blade  
works (その体は、きつと剣で出来ていた)」

私を中心に光の奔流が生まれた。

「うまくいったようですね。  
では私達とはお別れです。」

魔王が別れの言葉を言い

「あの世界に力を貸してくれ。」

そして神が続く。

もう私はあの世界に行くことになる。

だから私を座より解放してくれた彼等には少々サービスをしよう。

「力を貸すのは良いが」

最後にこの言葉を

「私が救ってしまっても構わんだろ？」

少々悪戯っぽい表情で言っただけだ。

神と魔王が笑った、そんな気がした。

そして私は座より離れ、  
あの世界に向かったのだった。

## 一話（後書き）

いかがでしたか？

資料集めなんかで結構時間を使ったわりには微妙では？と私は思っ  
てしまいました……………。

感想何かを頂けたら嬉しいです。

私は良いことも悪いことも全てを受け止める！

ただちょっと手加減して下さいと嬉しいです。

二話（前書き）

はい！続きです！

今回はシロウがあの世界に降り立ったはなしです！

## 二話

ここは何処だろうか？

この地に降り立った私の最初の感想だ。

周囲は木々に囲まれていて何処かの森だと言うことしかわからなかった。

とりあえず私は自分の状態を調べることにした。

「トレース・オン  
解析開始」

肉体年齢、27歳。

身体能力、英霊時と同等

神器、反応あり、龍発現可能。

魔術回路、127本正常稼働。ただし神器発現時魔術回路27本に低下。

魔力量、英霊時より増加、ただし神器発現時は英礼時と同等。

固有結界、アンリミテッド・ブレイド・ワークス  
“無限の剣製”発動可能

全て遠き理想郷、アヴァロン  
正常に稼働中

肉体、完全に受肉

ふむ、何故『全て遠き理想郷』が私にあるのだろうか。あれはセイバーに返したはずだ。

現に英霊なつてからはまったく投影出来なかったはずだ。

まああるのならあるで助かるがね。

後は神器以外はおおむね変わらないようだ。ただし神器の龍を発現させない場合は私にその龍の魔術回路と魔力量が上乘せられるらしい。

まだ生まれたばかりで私の魔力量を超えろとは未恐ろしいな…。

魔術回路にしても100本か……。

うん、この子はしっかり育てよう。

間違っても悪龍にはしないようにしなくては。

よし、自分の状態は理解した。

次は現在地の確認だ。

私は木に登り周囲の確認した。

しばらく森が続いていたが拓けた所に城が建っていた。

他にはそれらしい建物は無さそうなので私は城に向かう事にした。

\*

「その人、止まって下さい!!」城の前に来ると門番らしき女性に声をかけられた。

別に争うつもりは無かったので言われた通りにすると女性は質問してきた。

「ここは大神オーディン様の城です!貴方がどのようにここまで来たかは知りませんが立ち去って下さい!」

大神オーディンだと!?!北欧神話の神ではないか!

と言うことはここはヴァルハラ、詳しくはやはりわからんが北欧地方になるのか。

む?何か門番らしき女性が慌てだした、念話か何かか?  
そして女性は私に近づいてきて突然頭を下げた。

「失礼しました!貴方は勇者アインヘリヤルでしたか!

オーディン様が是非お連れしると仰られています。  
ご同行願えますか?」

アインヘリヤル?確か北欧では勇者のことだったな。  
英雄ならわかるが勇者か。

おそらくオーディンの差し金だろう。大神オーディンは未来を見通



すと言われている。私がここに来たことももしかしたら知っていたかもしれん。

まあせつかくの誘いだし、断る理由はないので

「構わん、案内お願いします。」

「ではご案内いたします。

中はとても広いのではぐれない様子を付けて下さい。」

「了解した。」

歩き出す女性の後を私は歩き出した。

巨大な門をくぐり中に入るとまずその広さに驚かされた。

城にはアインツベルンのでなれていたがここヴァルハラのはそれを遥かに凌駕する。

流星は大神と言ったところだろうか。

そして5分ほど歩くとひときわ大きな扉の前で案内してくれた女性が歩みを止めた。

「こちらになります。」

ではお入り下さい。オーデイン様がお待ちです。」

「そうか、案内感謝する。」  
私は彼女に礼を言い、扉に手をかけた。

ここに大神オーデインがいるのか。さて、どのような人物なのだろうか。

若干緊張しながら扉を開くと

「ひよひよひよひよ！ほれほれ、待たんか。」

「きゃああああ！オーデイン様ああああ、お止め下さいいいいー！」

「オーデイン様！もうすぐ客人がいらつしやるのですからお止め、なんじゃ？お主も交ざりたいのかの？」ち、違！「それいい！」「き、きゃああああ！」

.....パタン。

うん、きっと見間違えた。

案内してくれた女性が怪訝そうな顔をしているがそれを気にする余裕はない。

私は意を決して再び扉を開くと

「ええのおく、ええのおく！やはり若いおなごはええのおく！」

「い、いやああああああ！」

オーデイン様！何処をお触りに！」

「尻じゃが？」

「尻じゃが？ではありません！？」

ひゃっ！！ま、またさわ、きやあああああああ！」

.....  
パタン

どうしたことだろうか.....。

受肉したことにより私の目は悪くなってしまったようだ。

ハハハハハ、まさか大神オーデインたる者が女性を追い回している訳がないだろう？

「あの、いかなさいました？」

私が考え事をしていると案内してくれた女性が話しかけてきた。

「いやなに、中に女性を追い回す老人がいた様な気がただけだ。」

「ははは、そんな訳がないだろうにな。」

私の言葉に女性は頭を抱え「またですか……」と言った。そして

「すみませんが中に入ってそれを止めて頂けませんか？」

私の様な新米ヴァルキリーにはあの方を止められないので……。」

私の目は狂っていないようだ。

信じがたいがああ好色老人がオーディンらしい。

「はあ」

私はため息をつき女性に言う。

「了解した。あれを止めれば良いのだから？」

「お、お願いします！」

すみません、お客人にこの様なことをお願いしてしまうとは……。」

「なに、君に落ち度があったわけではないさ。」

それに私は困っている人は放っておけない質でね、君が気にする必要はない。」

そう言ってから気がついた。

「そう言えば君の名前を聞いていなかったな。」

良ければ教えてくれないか？」

案内をしてくれた人にいつまでも君では失礼だろ？」

「あ、申し遅れました！わ、私はロスヴァイセと申します！貴方のお名前をお聞きしても？」

「ロスヴァイセか。良い名前だ、君に良く似合っている。

私はエミヤシロウ。エミヤでもシロウでも好きなほうで呼んでくれて構わない。」

「そ、そんな似合っているだなんて／＼／

で、ではシロウ様と呼ばせてもらいますね。」

「様はやめてくれ。そのような呼ばれ方はなれていないのでね。シロウで構わない。」

私がそう言つとロスヴァイセの雰囲気が変わった。

「い、良いのですか!？」

わ、私何かで良いんですか？私は新米ですよ！

仕事が無くて門番をさせられていたヴァルキリーなんですよ!？それでも良いんですか？」

な、何だ？呼び捨てで良いと言っただけで何故ここまでまくし立てるような言い方で私に迫る？

ロスヴァイセの顔が赤く鼻息が荒いのはなぜだ？

「別に構わんだろ。」

しかし名前の呼び捨てを許可したくらいで何故そんなに興奮している？

私としては呼び捨ての方が呼ばれなれているからそうして欲しいだけなんだが？」

私がそう言つと先ほどまでの興奮はなりを潜め、今度は背景にズンと付きそくなほど落ち込み。

「ふ、ふふふ、そうですよね。」

私なんかの勇者様にはなつてくれる訳ないですよ？

私は何を期待しているのでしょうか……。」

等々膝をつき泣きそうになってしまった。

流石に少女を泣かせて喜ぶ趣味はない。しかし、理由がわからないので訳を聞くことにした。

「いったいどういうことだ？」

君は何故そこまで喜び落ち込んだ？

訳を話してくれないかね？」

「……ご存知ないのですか？」

ヴァルキリーに敬称無しに名前を許すことはそのヴァルキリーの勇者になると言うことになるんです。

ちなみにこれは告白プロポーズと同義ですので、ヴァルキリーにとっての憧れなんですよ。」

……………何でぞ。

思わず昔の口癖がでてしまったのは仕方がないと思う。  
それほどに私は驚かされた。

しかし知らなかったとは言え彼女に期待をさせてしまったのは事実。  
何かしらのフォローをいれなければ彼女に悪い。

「知らなかったとは言えすまない。

まだ私は君を良く知らない。

だからロスヴァイセの勇者になることは私にはできない。

なに安心すると良い。君は若いし、何より美しい。

私などよりも良き人に巡り会えるさ。

それとも君は誰でも良いのかね？

違うだろ。

そんなに慌てて自分の伴侶を見つける必要はないさ。

いつとは流石に言えないがいずれロスヴァイセにも相応しい人が見  
つかる。

何せ君はこんなにも魅力的なのだから。」

そう言っつて私はロスヴァイセの頭を撫でた。

顔が赤かったのは何故だろう？

少しの間撫でているとロスヴァイセが「はっ！」と言い

「と、取り乱してしまい失礼しました！

そそそそそそですよね！？慌てなくても大丈夫ですよ？

あ、ありがとうございます。私、頑張つて良い人を見つけようと思  
います！」

そう言つて彼女は満面の笑顔を浮かべた。

ほら、やはり魅力的じゃないか。

彼女に思われる男はさぞかし幸せなのだろう。

私がそんなことを思っていると。

『『きやあああああああ！！』』

『ひよひよひよひよ！』

と、扉の奥から悲鳴と笑い声が聞こえてきた。

「「……………」」

あれを忘れていた。

どうやらロスヴァイセも忘れていたようだ。



「「はあ」「

私達は同時にため息を吐いた。暖かい空気が台無しではあるが仕方がない。とりあえず

「……………あれを止めてくる。」

「……………お願いします。」

私は扉を開いて

「翁よ、そこまでにしておけ。女性を困らせるものではない。もし止めないのなら……………」

そう言うって私は一瞬で背後に20本あまりの剣を投影させ

「私とこの剣群がお相手しよう!」

驚き目を見開く翁に告げた。

S i d e o u t

ロスヴァイセSide

私は目の前の光景に驚愕しました。

そしてそれは私だけでなく先ほどまで襲われて（セクハラ）いた先輩達もでした。

何せ彼、シロウさんが広間に入ってから彼の背後に突然剣群が現れそれがオーデイン様を磔にしたのですから。

しかもその剣も一本一本が凄まじい力を放っていました。

何かの神器かと思いましたがそれはあり得ない。

オーデイン様は見た目はお爺ちゃんですが腐っても神。

それも北欧を束ねる大神なのですから『神殺し』でなくてはその様なことは不可能です。

しかし『神殺し』にあの剣群を生み出すものなど聞いたことはありませんし『魔剣創造』や『聖剣創造』とも違うようです。

何せあの剣群には魔剣、聖剣など様々な剣があったのですから。

確かに止めてくれと頼んだのは私ですが、まさかここまで凄いとは思いませんでした。

ああ、どうしたのでしょうか。先ほどからシロウさんを見ると凄くドキドキしています。

顔も熱いです。

最初見たときはなんて無愛想な顔をする人だろうと思いましたが、

話してみるとそんなことはなく、とても紳士的な人だとわかりました。

そしてその鋭い鷹のような瞳は意志の強さを感じさせます。

先ほど私の勘違いで取り乱した時も満更でもありませんでしたし、シロウさんが知らなかったと聞いた時は何故か本当に悲しかった。

彼が私をフォローしてくれた時に魅力的と言って頭を撫でてくれた時、凄く心が暖かくなりました。

そして彼の強さを知ってしまった。

容姿は特別かつこいいと言うわけではありませんが整っています。身長も高く体つきもがっしりとしていて白い短髪に色黒の肌はむしろ男らしさを感じさせます。

性格も若干皮肉屋な面があるようですが優しく紳士的です。

そしてオーデイン様を無傷で抑え込む力。

この人はなんて理想的な勇者なのだろうか。

そう思ってしまった。

そして私は決めました。彼に相応しいヴァルキリーになること。

シロウさんはああ言ってくれましたが、どうやら私はシロウさんを本当の勇者様したいようです。

どれくらい先になるかはわかりませんが彼から私に告白してくれるようなヴァルキリーになると、そう心に誓いました。

私が決意をしているとシロウさんが口を開きました。

「ふむ、任務完了だ。

後は好きにしまえ。被害を受けたのは君達なのだからな。」

と先輩達に向かって言いました。

しかし先輩達はオーデイン様に目を向けずシロウさんに駆け寄り

「私の勇者様になって下さい！」「」

と、いきなり告白をしたのです。

確かあの二人もまだ自分の勇者がいなかったはずです。

そこにシロウさんの様な強い人が現れたのですから無理はありません。

しかし私だって負けません！

困っているシロウさんには悪いですが私も駆け寄り

「私、絶対良いヴァルキリーになります。約束です、シロウ！」

先輩達が驚いた表情をしたなかシロウは一瞬驚きながらも直ぐに微笑み

「ああ、君は良い女ヴァルキリーになるだろう。

その時を楽しみにしている。」

と言ってくれました。

私は自分でもわかるくらいの笑顔で

「はい!!」

と答えたのでした。

ちなみに余談ですが

「おお、い、もうやらんから助けてくれんかのお？」

皆オーディン様のことは忘れていたのでした。

## 二話（後書き）

如何でしたか？

自分なりにはそこそこ出来たと思ったのですが……

まあ感想待ってます。

### 三話（前書き）

始まりの龍が中々纏まらなかったのでもこちらを更新です。

言い忘れていましたが現在の時間軸は原作開始数年前です。

### 三話

ロスヴァイセからの告白を受け、驚きはしたものの彼女の意思は確かに受け取った。

私にあの様な事を言うのは理解出来ないがそれでも彼女の意思は無下には出来ないし、彼女の気持ちがわからないほど私は鈍感ではないつもりだ。

しかし今の私にロスヴァイセの本当の気持ちを受け取ることは出来ない。

この身はまだこの世界で何もなしていない。

彼等神と魔王は私に好きに生きろと言ったが、それでも何もしていないまま他の事を出来るほど私は器用には生きられない。

何よりもロスヴァイセは私にとって眩し過ぎた。

彼女はまだ10代半ばの少女だ。そんな成長仕切っていない無垢な彼女が私のような者として汚れて仕舞うのでは、とってしまったのだ。

私は錬鉄の英雄と呼ばれたことがある。



英雄と言えは聞こえは良いが、英雄とは要は大量殺人者だ。

これはどの英雄にも言えることで、自分の大切な者、譲れないことなど理由は様々だが皆その理由の為に人を殺してきた。それは反英雄でさえ一緒である。

何をなしたか、それにより英雄か反英雄に別れるのだ。

まあ中にはアンリ・マユの様に信仰のみで反英雄になった例外などもいるが概ね同じだ。

私も全てを救う正義の味方に憧れ、目指していた。

しかしその目標は変質していき、全てを救うことからより多くの9を救う為に、本当に守らなくてはいけない1を切り捨ててしまった。

ただ泣いている人を救いたかった、せめて自分の目の届く範囲だけでも守りたかった、それだけだったはずなのに。

そして世界との契約により私は英霊となり掃除屋として殺し回り全てが嫌になった。

だが過去の自分を殺そうとして逆に気付かされた。

そして我が主だった少女との約束もあり、再び正義の味方を目指しているなかこの世界に降り立ったのだ。

私はこの世界で何もなしていない、依然大量殺人者のままだ。まだ何も救っていない、誰かの笑顔のために動いていない。そんな私が彼女といれる訳がない。

この様に思うと言うことはロスヴァイセは私の1になりつつあるらしい。

不思議なものだ、まだ彼女と出会って1日も経っていないのにな。だが私は彼女に惹かれてるらしい。

だから私がこの世界で何かをなし、ロスヴァイセが彼女の言うヴァルキリーになったときにまだ私を思ってくれていたらその時は

っと、年甲斐もなく何を私は考えているのだろうか。

こんな男ではなかったはずなのだな。

まあ今から考えても仕方ない。その時がくればその時に考えよう。

とりあえず今は

「ちよっ！や、やめいごぶっ！？わしは一応お主らのあるぶっ！  
わ、悪かったからもう蹴らなぎやあああああああ！！」

何故が集まってきたヴァルキリー達にたこ殴りにあっている老人を  
救うとしようか……………。

\*

「うむ、助かったぞい。  
変な所を見せてしまったのお。すまんかった。」

今私に頭を下げた顔がボコボコでいたるところに傷がある老人、大  
神オーディンが私に言う。

「なに、気にするな。  
彼女達の気持ちもわからなくはないが些かやり過ぎだったのでね。  
それを止めたにすぎないさ。」

私の言葉に大神オーディンは「そう言ってくれると助かるわい」と  
言った。

「それにしても大神オーデインが私に何用だ？  
特に貴方が興味をなすことをした覚えはないのだから。」

そう、私は大神オーデインが私をここに招いた理由をまだ聞いていない。

「大した事ではないわい、過去にキリストの神と冥界の四大魔王を殺した男に会ってみたくてのお。」

この発言に周囲の空気が変わった。

待機していたと思われるヴァルキリー達が一斉に私を囲み警戒していた。

ロスヴァイセすら怯えた表情をしていた。

大方私が大神オーデインを殺すとも思ったのだろうか検討違いも甚だしい。

大神オーデインはこの様子を黙って見据えていた。どうやら私の対応を見て私の人物像を見るようだ。

しかし槍や剣を向けられる事に喜ぶ趣味はないので誤解を解かなくては。

「安心したまえ、私に大神オーデインを害するつもりはない。」

すると1人のヴァルキリーが前に出てきて

「その証拠はあるのか？」

と言ってきた。

「証拠などないが私はこれでも正義の味方を目指す身でね。

何かを守るため、救うために闘うことはあっても殺すためだけに闘うことは間違ってもない！」

私は目に力を込めてそう言い放った。

数秒の間であったがその女性は私の目をじっと見つめた後

「失礼しました。

貴方は真に勇者であったようです。」

と言って下がっていった。それを合図に周りのヴァルキリー達も警戒をとき下がっていった。

それを見ていた大神オーディンは笑いながら

「ほっほっほっ、どうやらお主はヴァルキリー達に勇者と認められ

たよつじやの。

それにしてもまさかブリュンヒルデにも認められるとはのお。  
あやつが認めた者は大概の者が勇者と認めるのじゃよ。

良かったの、これでアースガルズでお主はそうそう危険はないぞい。

「

ほっほっほっ、と笑いながら大神オーディンは言った。

「それはありがたいな。

それよりその勇者とは何とかならんのか？

その様に呼ばれるとこそばゆいのだがね。」

「それは諦めい、ここヴァルハラでは勇者と英雄は同義語での。

それにブリュンヒルデが認めたのじゃ、皆がお主を勇者と呼ぶのお」

そうか、諦めるしかないのか……………。

なら仕方ないか、あまり一カ所にとどまり続けるつもりはまだ無いし、長引いてもいずれなれるだろう。

「それにしてもお主は正義の味方を目指しておるのかのお？

ほっほっほっ、まさかこの時代にその様なことを考える男がいるとはのお」

突然笑いながら大神オーディンは言った。

これに私は少しムツとしながら

「……何かおかしいかね？」

と言つと

「いや、すまんすまん。

別にお主の夢を笑つたわけではない。

まだ人間も捨てたものではないと思ひ嬉しくなつたのじゃ。」

そういうことか。ならばその期待に応えられるようにしたいところだが。

「私が人間と言えるのかね？」

私は確かに人間ではあつたが今は英霊が肉体を得た存在だぞ。

そして神に与えられた神器により半永久的に死なぬ身だ。

そんな存在が人間なはずがない。」

「ならお主は何なのじゃ？化け物とでもいつつもりかの？」

「それは違つと言わせて貰う。

化け物とは理性を持って人を殺す存在だ。

過去の私は正にそれだったが今の私はそんなものになるつもりはない！」

「ならお主は真に人間じゃよ。

死なぬから何じゃ？人外の力をもつから何じゃ？」

その者が何者かを決めるのはその者の心じゃよ。  
お主は人間じゃ、わしが認める。

それに勇者は人間からしか選ばれんし神器も人間の血がなくては宿らん。

それが人間ではなく何だと言っのじゃよ。」

そうか、私は人間で良いのか……………。  
くく、私は救われてばかりだな。

「大神オーデインよ、感謝する……………」

「気にするでないわい、わしは事実を言ったにすぎんのだからのお。

それはそうとお主の神器は何じゃ？  
見せてくれんかのお？」

そういえば私もまだ見たことが無かった。  
良い機会だ、大神オーデインの要望に応えらとしよう。

「了解した、少々待ってくれ。  
私もまだ神器を発現させたことが無くてね。」

そう言って私は己の内側に意識を向けた。

確かに感じる。私以外の力を、存在を。私はそれに意識を向け一言  
呟いた



トレス・オン  
「神器起動」

と。

すると途端に私の目の前が光に溢れた。

私の中からその存在が無くなるのを感じるが依然と繋がりを感じられた。

光が収まるとそこには龍がいた。

大きさは50センチほどの小さな龍だ。

まず目を惹くのはその体の色。白のようではあるが光輝くそれは白銀。

見た目は西洋の龍のようであった。

まだ子供故威圧感はないが力強さはあり、何か神聖さを感じさせる。

白銀の子龍はパタパタと可愛らしく羽を飛ばたかせじっと私を見ていた。

まるで、貴方が私の主か？ と問う用に。

その様子にわたしはある光景を思い出していた。

あの日、私が聖杯戦争に参加した夜。

死にかけていた私を救った彼女を。

色が違う、姿が違う。なのにあの日の彼女の様な神々しさがこの子龍にはあった。

「セイバー……………」

そう私は呟いた。

まるで彼女の生まれ変わりの様なこの子龍に。

未練がましいとは私も思うが彼女に見えたのだ。故に

「君の名前だ『アルトリア・トラユン白銀たる騎士王の龍セイバー』。  
今日から君はセイバーだ。」

そう言つと子龍、セイバーは

「きゅー！」

と鳴きながら私に飛び付いてきて体を擦り付けてきた。

はは、確かにこの子に彼女を見たがまだまだ子供と言つことか。  
どうやら私を認めてくれたようで体全てを使い甘えてきた。  
私もそれを受け止めセイバーを撫でていると

「ほう、その龍がお主の神器かのお？  
生きる神器とは珍しい。」

大事に育てるのじゃな。その子龍は良き龍になる。  
と大神オーデインは口を開く。

それに私は

「言われるまでもない。  
それにセイバーは私の、正義の味方の相棒だぞ？  
良き龍に育ててみせるぞ。」



### 三話（後書き）

如何でした？

今回はシロウの神器が判明しました！

何となくわかった人もいたと思いますが彼の相棒はセイバーだろう  
と思いましたがこの様にしました。

ちなみに凜は士郎の相棒だと私は思っております。

### 三・五話（前書き）

今回は凄く短いです。

気分は短編！

内容は読んでのお楽しみ。

ただギャグ要素はありません。エロもないよ

### 三・五話

私が大神オーデインの邂逅し、相棒にセイバーと名付けてから約1年の時間が過ぎた。

その1年間で私は世界を周り私に出来る限りの事をやってきたつもりだ。

誘拐犯や強盗を捕まえたことがあった。

車にひかれそうだった人を助けたこともあった。

迷子の子供の親と一緒に探したこともあった。

そう、何でもしてきた。

その度に笑顔になってくれる人達がいる。それが私にとって何よりもの報酬だった。

小さな1だった。

以前は大きな9の為に切り捨てた1の中でもさらに小さな1。

でもそれはとても大切なものであった。尊いものだったのだ。

ここ1年の旅でそれが良くわかった。

だからここから始めよう。小さな1を取りこぼさないように、少しづつこの手を広げていこう。

私の手は小さいから全てを救うことは出来ない。  
大切な1を切り捨てなくては多くの9を救えなかった。

きっとそれは今も変わらないだろう。

だが今の私は1人ではない。私の神器、『アルトリア・ドラゴーン白銀たる騎士王の籠』セイバー、彼女がいるのだ。

始めの頃はまだ幼いゆえに大したことは出来なかった（私の心の癒しには大活躍だった。）が、体が大きくなるにつれてそれは変わっていった。

まず流石は龍と言うべきか力が非常に強い。

半年ほど前、体が1mを超えたあたりな話だ。

以前からセイバーは何かを見つけると私の腕をその小さな手で掴み連れて行くこうとしていたのだがその日は違った。  
あるうことか私の腕を掴んだまま空を飛んだのだ。

そしてその日からセイバーは成長するたびに力が強くなっていき、  
今では私など簡単に押し負けてしまうだろう。

次にセイバーは人語を話せる様になったのだ。

まだ話し方は拙いし、所々きゅくと鳴くが話せるようになったのは大きい。

話し始める前から何となくではあるが意志の疎通は出来ていた。しかし話せる様になったことでこれらがスムーズになった。さらに言えば私達は神器と宿主の関係上、心で繋がっている。故に魔力を使わなくとも念話で会話が出来る様になった。これにより離れていても会話ができ、互いの状況が的確にわかるようになった。

まだまだ年齢で言えば1歳なのでこれから成長していくのだろう。それが今の私の楽しみの1つだったりする。

私はセイバーを見上げた。見るではない、見上げたのだ。

今の彼女は体長3mほどで体は相変わらずの白銀。  
以前より角も爪も伸びてきて、翼も大きくなり姿だけならもう子龍  
とは呼べないだろう。

セイバーは気持ち良さそうに日の光を浴びていたが私の視線に気付いたようで

「きゅ？シロウどしたの？」

と可愛らしく頭を傾げながら聞いてきた。

はは、体は大きくなってきたがまだまだ子供だな。

だが彼女となら



「なあセイバー」

「きゅ〜？なにシロウ？」

全てを救える

「これからも頑張っていこうか。」

「きゅ〜！ねえシロウシロウ！今日も良いことするんでしょ？  
今日は何処に行くの？」

「そうだな、今日は」

正義の味方になれる気がする。

### 三・五話（後書き）

どうでしたか？短かったですでしょ？

## 四話（前書き）

さてさて今回はだれが出るのでしょうか！

答えは本編で！

## 四話

「むぐむぐ、ん。なあ、セイバー？」

「きゅ〜？シロウ何？あつ！これも美味しい！」

「あむ、私はいつまで食べれば良いのかね？」

「きゅ〜！まだまだ足りない！もっと食べて！」

「……………しかし私はもう食べたくないのだが？」

私とセイバーは食事をとっていた。

正確には私が食事を、だが……………。

では何故私とセイバーと表現したか、それは

「きゅうううう！なら私が発現してもいいの？」

「こんなんじゃ全然足りないよ？」

でも私が未発現時にシロウが食べれば私も食べた感覚があるんだもん！！

だから食べて！私はまだ満足してないのおおおおお！！」

と、言った理由からだ。



になる。

個体としてのセイバーは現在3m半ば、生半可な量では満足出来ない。それこそ牛一頭分が必要だ。

食事の度にそんな量は用意出来るはずもなく、仕方がないのでこのように私を通して擬似的に食事を楽しんでいるのだ。

本来なら神器である彼女には食事は必要ないはずなのだがな………。

セイバーにとつての食事は趣向品、酒やタバコに近いため、彼女に合わせる必要は正直ないし、はつきり言ってしまうえば食事自体必要ない。だが私の為に動いてくれるセイバーにはこれくらいしかしてあげられなかった。故にこうして食べ続けているのだが

「私の作った物を気に入ってくれるのは嬉しいのだが、少しは手加減してくれないか？

食べ過ぎて気持ち悪くなってしまっただね。少々動けそうもないのだよ。」

仮に誰かに襲われたら動けずに殺られてしまう。

死因が食べ過ぎで動けない所を、などと情けない理由など私は嫌だ。

「少しくらい文句を言っても良からう？

ちなみにここは森の中だったりする。つまりは野宿だ。理由として

は近くに民家がないからである。

流石に街中などの人の目がある所で先ほどの会話は出来ないが人の目の無い場所であればいつもこんな感じである。仮に誰かが近くにいたとしても念のために認識障害の結界を張っているため一般人には見つかる心配はないだろう。

まあ一般人にはだが、ね。

「隠れてないで出てきたらどうだ？」

なに、私からは危害をくわえるつもりはないから安心したまえ」  
気配のする方向に声をかけると草むらから少女が出てきた。

黒い少女だ。肌は白いのに長い髪も身に付けているゴシック調の服も黒い。

何故こんな森の中に？と思わなくもないがこれはまだ良かった。問題は少女の異常さだった。

近くに来るまで私どころかセイバーまで気が付かなかったくせに、姿を現して瞬間に感じたその異常なまでの力、威圧感、存在感。今まで出会ったものの中でもここまでの者はいなかった。

幸い敵意はないようだがいったい何しにきたのだろうか。

黒い少女は何をするでもなくジーと私を、正確には私の前にある料

理を見ている。

お腹がすいているのだろうか？  
そんなことを考えていると

くく

可愛らしい音が聞こえた。

「……………／／／」

「……………食べるか？」

「……………」  
「コクッ」

一緒に食事することになった。

\*

私は黒い少女が黙々と食べている姿を見ていた。

セイバーが文句を言っているがもう食べられないのだから仕方がない。

それはそうと黒い少女の名前だが、オーフィスと言っらしい。  
食べ始める前に

「オーフィス、我の名前。」



覚えても覚えなくてもどちらでも良い。」

と言って食べ始めた。

黒い少女、オフィスが名乗ったので私も名乗る事にした。

「オフィスカ、覚えた。

私はエミヤシロウ。エミヤでもシロウでも好きに呼んでくれ。」

オフィスは一回頷いてまた食事を再開させる。

しばらく彼女の食事風景を観察していたがただ黙々と食べているようにしか見えなかった。

しかしずっと見ていると時折ピクリと体が動いた事に気がついた。

何か苦手な物でもあったのだろうか？しかしオフィスは食べ続けている。

その後も同じことを繰り返していたのだが気がつくともオフィスは既に食事を終えて私を見ていた。

「ずっと我を見ていた。何？」

どうやら気づかれていたらしい。別にだからどうと言うわけでは無いのだがついでに先ほどのことを聞いてみよう。

「たいしたことでは無い。私は私が作ったものを食べる人を観察するのが好きなのだ。

ただ少し気になることがあってね、君は時折体が微動していたよう

だがどうかしたのか？ もしや口に合わないものでもあったのかね？」

料理には自信がありそこらのレストランよりできると自負している。もし不味いと言われたらかなりショックである。しかしこの考えは杞憂であった。

「美味だった。体が動いたのは勝手に反応しただけ。我は満足した。」

「それは何よりだ。」

それにしてもオーフィス、君は良く食べるな。その体の何処に入るのかね？」

「我は人ではないからこの程度問題ない。」

「……なら君は何なのかね？」

「我は龍。『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴンオーフィス。」

シロウこそ何？

人間なのに人間では無いみたい。それに龍の力を感じる。」

「君の言う龍の力とはこれのことか？」

そう言ってセイバーを発現させた。

突如現れた白銀の龍、セイバーにオーフィスは表情は変わらないが

「…………驚いた。それは神器？  
それなら龍の力はわかった。でもシロウの存在の理由にはならない。  
本当にシロウは何？」

「私か？私はただの正義の味方だ。」

オーフィスは驚いた様に見開き、そして次には不敵な笑みを浮かべた。

「くくく、正義の味方か。」

今の世にその様な名乗りを聞くことになるとは思わなかった。

くくく、ならば正義の味方。我を殺す？」

「私がオーフィスを殺すだと？」

冗談も休み休み言いたまえ。私にそのような力があるわけではない

「

刹那オーフィスの姿が消え

がぎいいいいいいん！

かん高い音が鳴り響き

スバアアアアアアア！！

私とオーフィスを中心に突風が発生する。

私の手には使いなれた夫婦剣『干将・莫耶』が握られている。それを交差させオーフィスの手刀を受け止めている。

音は受け止めた時のもので突風は受け止めたさいの衝撃の余波だろう。

受け止めることは出来たが正直危なかった。速さはランサーを超えカモバーサーカーを遥かに超える一撃。セイバーがいなかったと思うとゾツとする。

以前の私なら反応は出来ても力負けしていただろう。

しかしセイバーが体に宿っていたことで彼女の膨大な魔力を使い擬似的なブースト効果を作りだした。そして魔術回路も増えたことでより精密に、より強く強化をかけることができたのである。

もしこれが無かった場合私は撃ち出された弾丸の如く吹き飛んでいただろう。

「ふう、やれやれいきなり何をする。

下手をしたら今ので私は死んでいたかもしれないのだが？」

呆れたように、何でも無いように、だが皮肉を込めて言った。

「嘘をつこうとしたから試した。

シロウに力が無いなんて嘘。今の一撃、普通なら生きてない。」

「嘘はついていないのだがね。確かに私は君の一撃を止めた。しかしそれが「君を殺せるにはならないだろ？」

「それも嘘。

シロウは我を殺せる力を持っているはず。

なあ、神と魔王殺しの『守護者』！」

その言葉と同時にオーフィスがさらに手刀を振るう。

何とか受けるがこのままでは不味い！

「君は、何処、で、それを！」

くっ！まだ腕の痺れが取れていないと言っに！

「我はあの闘いを見ていた。

先ほどシロウの魔力を感じた。

神と魔王を殺した剣と同じ魔力を。」

「成る程、な！それならば私をつ！知っていたとしてもおかしくはない、なっ！

っ！！しかし私にオーフィスを殺すつもりは無いつ！」

いちいち鋭い攻撃だ。捌くだけでも一苦労だと言っにその上会話だと？冗談にしてはきつすぎるわ！

「何故？我は人間で言っつと悪になる。」

「我は『渦の団』のトップだぞ？」

「『渦の団』？何だ、それは。っ！！」

「我の力を求めた者達の集団。テロリスト達。」

「テロリストなら確かにっ！放っておけないが、オフィスは今、  
我の力を求め」と言っただけなっ！  
ならば君は何をした！」

「我は何もしていない。力を貸しただけ。」

「ならっ！！」

私とオフィスはピタリと動きを止めた。

「やはり私にオフィスを殺す理由はない。」

彼女の手は私の喉元に突き立てられた状態で止まっている

「何故とめた？」

彼女の背後には無数の剣が浮いていた。

「君は請われたから力を貸したにすぎない。

駆逐すべきは君ではなくそのテロリスト達だ。  
だから私は君を殺さない。」

「そう、なら良い。」

その一言で突然の戦闘は終わりを告げた。

\*

「シロウ、我と来ないか？」

あの闘いの後、お茶を飲んでいるときに突然オフィスの言っただこ  
とである。

突然の戦闘に突然の勧誘、彼女は突然だらけだ。

「君はいきなり何を言っているんだ……。  
突然すぎて話が理解出来ないのだが。」

するとオフィスは私を指差し

「料理、美味。」

次に現在飲んでいるカップを指差し  
「お茶、美味。」

最後にまた私を指差し

「シロウ、強い。  
だから欲しい。」

はっきり言おう、意味がわからん。

料理とお茶はまあわからなくもない。

彼女はそれだけ気に入ってくれたのだろう。むしろ誉められたように嬉しくもある。

しかし強いからと言うのは何だ？ オフィスは私に何をさせたい？

「君は私を従者にでもしたいのかね？」

それに強いと言うが君こそ充分以上に強いだろ。

君は私に何を求めているのだね？」

「我に食事を作り、お茶を入れ、我と闘う。暇つぶしに最適だ。」

最後の1つが非常に気になる。闘う？暇つぶし？意味がわからない！  
！わかりたくない！

「……………それは何と言うのだね？」



オフィスは一瞬考えると

「……………闘う執事？」と言った。  
だが私の答えは直ぐに出た。

「断固お断りするっ！！！」

執事というだけ良い思い出がないと言っに、金の悪魔とか赤い悪魔とかガントとか……………。

それに闘うだと？何とだ？

決まっている、オフィスだ。

そんなもの身がもたん。もう彼女と闘うのはこりこりだ。

「そう、残念。」

あまり残念そうでは無い様子で残念がるオフィス。

……………仕方がない。まったく、私は甘いな。

「断るが、食事とお茶はいつでも招待しよう。  
戦闘はお断りだがね。」

最後が重要である。後は別に構わんだろ。

「わかった。それで妥協しよう。  
ならシロウ、お前は普段何処にいる？」

「今の私はただの旅人だ。ゆえに定位置にはいない。」

「だと何処にいるのかわからない。

……やはり連れて行く？」

「まてまてまて！」

私は付いていくつもりは無いと言うに！

私の携帯電話の番号を教える！それで我慢してくれ！」

実は私は携帯電話を持っていたりする。しかも世界中の何処にいても通じる優れたものだ。

ヴァルハラを出る前にオーディンがくれたのだ。

当初私はいらなかったのだがほとんど無理矢理持たされたのだ。

ヴァルキリー達に……。

それで持っている訳だが、アドレス帳を見て驚いた。

オーディンのアドレスが登録されていた。

今時は神も携帯電話を持つ時代らしい。

そして何故かロスヴァイセを筆頭に数十名のアドレスまで登録されていた。(ほとんどわからん)その中にブリュンヒルデの名があったときは更に驚いたが後日彼女から電話が入りオーディンについて相談を受けて納得してしまった。

彼女は苦勞人らしい。今度じっくり話してみたいものだ。

ともかく私は携帯電話を持っているので連絡をくれれば場所くらい直ぐに教えられる。

む、しかし彼女は龍だ。携帯電話どころか電話すら持っていないかめし

「わかった。シロウ赤外線通信の用意しろ。」

持っているのか……

ふむ、この時代の龍は神同様に携帯電話を持っているらしい。

さらには使いこなしているというオマケつきだ。

私より使いこなしていたのが悔しかったことは内密にしてほしい。

「そら、送ったぞ。」

「きた、我のも送る。」

「よし、来たぞ。登録完了だ。」

ではオフィス、いつでも連絡をくれて構わない。」

「わかった。暇になれば連絡する。」

こうして私のアドレス帳にオフィスの名前が追加されたのであった。

余談ではあるがオフィスからのメールはほぼ毎日。お茶を飲むために2週に一回は私の元に来ていたのであった。

オフィスは暇人なのだな……………

そう思ったのだった。

## 四話（後書き）

皆携帯電話を持ってるんだあゝ

でもさ、シロウとオフィスが赤外線通信してる所想像するとさ

シユールだよね！ぶぶぶっ！

## 五話（前書き）

な、何とか完成〜。

今回はとある方が出してくれた案を使わせて頂きました。

結構ぐだつてないか心配ですがとりあえず本編どうぞ〜！

## 五話

「シロウ！助けて下さい！」

ロスヴァイセからこのような電話が来たのは約二時間前の話である。

彼女の周囲は非常に騒がしく上手く聞き取れ無かったが助けを求めているだけはわかった。

助けを求める人がいる以上、私は何処にでも行く。幸いな事に当日はアイスランドにいたのでヴァルハラとはそう離れていなかった。

そして現在、私はセイバーの背に乗り移動中でもまもなく到着しようとしていた。(セイバーの速度は飛行機も驚愕である。私はよくたえられると自身に感動してしまった。)

ただ嫌な予感しかしないのは何故だろう。

電話越しに聞こえた女性達の悲鳴や老人の笑い声からおおよその検討はつくがあまり考えたく無かった。

きつとろくでもないことだから……………。

「きゅ！シロウ見えて来た！」

どうやら到着したようだ。

「わかった。とりあえず城に向かってくれ。」

「了解！きゅー！！」

\*

城の門に到着すると待機していたヴァルキリーに直ぐに案内された。以前と同じルートを通り、同じ場所まで行く。

本当に嫌な予感が当たりそうで憂鬱になるが助けを求められた以上行かない訳にはいかず、覚悟を決めて中に入るために扉を開けると

「ぬうううう！わしは大神オーディンじゃぞ！？お主等の主じゃぞ！？」

「ちよいとくらいええじゃろうが！！」

「どこがちよつとですか！事ある毎に私達ヴァルキリーにセクハラするわ、城を抜け出して下界の風俗にいくわ、あげくのはてには娘の私にもセクハラする始末！いい加減我慢の限界です！」

それにロスヴァイセが不憫過ぎます！

父様の不始末の後処理は彼女がしているのですよ？

ああ、こんなことならロスヴァイセを父様の秘書に任命するんじゃない



無かった……。

ロスヴァイセ、ごめんなさい……。」「

「そんな！ブリュンヒルデ様のせいではありません！むしろ拾った頂けて感謝しているくらいです！

悪いのは全てオーディン様です！

うううう、シロウ……早く来てください。このままでは私達は大  
神オーディン様を倒さなければいけません……。」「

「何でじゃ！？わし何でここまで言われてるんじゃ！？」

「自業自得です！」×全ヴァルキリー。

……来るんじゃ無かった。

私の素直な感想だ。助けを求めてきた時はセクハラを受けていて、  
てつきり現在進行形でセクハラされているのかと思った。

それも嫌ではあるが、まさか倒してしまいそうだから助けると言わ  
れるとは思わなかった。

今現在の状況だがオーディンがヴァルキリー達に囲まれていて、代  
表でブリュンヒルデが前に出てオーディンと言い合いをしている。

時折被害を受けた（全員？）者が間に入り、ブリュンヒルデの援護

をしている。

そして質の悪いことにオーディンは開き直っているのだから言い合いは悪化、一触即発だ。

私の意見というか一般的にみればどう見てもオーディンが悪く、自業自得である。

いつそのこと好きなようにすれば？と思わなくもないがそうしないために私が呼ばれたようである。

「はあ」

一度ため息を吐き、前を見据え、未だに言い争っているオーディンとヴァルキリー達に向かって歩き出す。

トレース・オン  
「投影開始」

作り出すのは《マグダラの聖蓋布》。

見た目はただの赤い布だが男性にとつて究極の拘束道具、如何なる存在であれ男である限りこれからは逃れられない。

ただ女性には丈夫な布でしか無いがな。

そして《マグダラの聖蓋布》を何に使うなど決まっている。

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

私が言霊を唱えると赤い布は指向性を持ちオーディンに向かい

「ぬうう！な、なんじゃコレは！？」

瞬く間にオーデインを赤いミノムシにした。

慌てふためくオーデインと突然の出来事に硬直しているヴァルキリ  
ー達をよそに、私は床を強く蹴り大きく跳躍しオーデインの横に着  
地した。

「…………シロウノエミヤ（様）（殿）！」「…………」

皆が私の名を呼ぶ。……………様は止めてくれと言つに。

「ぬううう、エミヤ殿！これはどういったことかのお？」

「どうも何も見たままだが？」

私は求めに応じただけにすぎん。」

「ぐううう！誰がこんな厄介な奴を呼びよつたんじゃ…………。  
う、動けん。だ、誰ぞ助けてくれんかのー？」

厄介とは酷い言いぐさだ。まあ確かに私の様な者は敵からすれば厄  
介であろう。

それにしても私を呼んだ者達に助けを求めた所で結果は

「……」

誰も助ける筈がない。

「ちよっ！何で誰も助けてくれんのかの！？  
ブ、ブリュンヒルデ？」

「拒否します！」

「わ、わしの娘なのに……………。  
ならロスヴァイセよ！お主はわしの秘書じゃろ？何とかしてくれん  
かのお？」

「嫌です！何でシロウを呼んだ私がオーディン様を助けるんですか  
！反省して下さい！！！」

「くっ！お主が呼んだのか……………！！  
な、なら」

この後もヴァルキリー達に助けを求めていたが皆の口からするのは  
拒否の言葉。誰からも助けて貰えなくあわれにすら思えてくる。

そしてオーディンは形振りかまっていられなくなったのか

「エミヤ殿？これを外してくれんかの？」  
私にまで頼み始めた。

私としてはそれでも一行に構わないが

「彼女達に聞きたまえ。私は彼女達に頼まれここにいるのでね。」

「ではお主からも頼んでくれんかのお？」

ふむ、それくらいなら構わんだろ。

「君達、オーディンはこう言っているがどうするかね？」

私個人としてはどうでも良いので解放しても構わないのだが」

「嫌です！」

「拒否します！」

「一生そのままで」

「むしろ私を縛って！」

即答だった。

何か最後の方に聞こえた気がするが私には聞こえない、わからない、理解不能だ。

「だ、そうだが。どうする？」

「むぐぐぐぐぐ、ならびつすねば良いのじゃー！びつすねば解放してく  
れるー！」

このオーデインの間に応えたのはオーデインの娘でありヴァルキリ  
ー筆頭のブリュンヒルデであった。

「簡単です。セクハラしない、城を勝手に脱け出さない、これを守  
つて頂きます。」

成る程、これで今までの事を許されるなら破格の条件だ。  
オーデインもそう思ったのだろう、直ぐに

「よ、よし！わかったぞい。約束する！」  
と、応えたのだが

「信用出来ません！」  
そこまで甘くは無かった。

部下に信用されない神、娘に信用されない親、自業自得とはいえ憐  
れである。

流石にオーデインも硬直している。

しかし、それならばどうするつもりなのだろうか。

条件をだした手前このままと言うわけでは無いだろう。

制約キアスでもかけるのだろうか。

しかし神に制約がどこまで通じるかは問題である。  
だが

「故に」

彼女達が考えていない筈が無かった。

「 オーディン様性格矯正計画を始動します！」

簡単そうで非常に難しいことであった。

そして私の経験上、必ずと言って良いほどに

「 幸いな事にシロウ殿もいらっしゃる。 オーディン様、いえ父様、  
覚悟してください！」

巻き込まれるのだ。 幸運値Eは伊達では無かった。

\*  
あれから2週間ほどが経ってヴァルキリー達による『オーディン様  
性格矯正計画』はある意味順調であり、ある意味失敗であった。  
そしてオーディンだが

「……………」

完全に衰弱している。

大人しくなったにはなったがこれでは意味がないと思うのは私だけ  
でないだろう。

今まで何をしてきたかと言うと、まず1つ目だが必要な時を除き『  
マグダラの聖蓋布』による拘束。 必要な時と言っても風呂やトイレ  
くらいである。

必要最低限として手だけ（肘から先）は解放しているがかなり辛い  
ことは伺える。

頼まれたとはいえこの状態にした私が言うのも何だが初めてこのオ  
ーディンを見たときヒ ゴンを思い出し思わず笑ってしまった。

次に二つ目だがオーデインが女性を見てもあまり反応しない様にするために何故かヴァルキリー達は薄着で生活しはじめた。具体的には水着にエプロンという非常にマニアックな服装だ。正面からだと裸エプロンにしか見えず、後ろからだと体のラインがはつきりとわかるため目のやり場に困る。

オーデインは始めの内は拘束されながらも笑いながら器用に跳ね回り飛び付こうとしていたが疲れたのか次第にその動きも無くなり反応しなくなった。

ふむ、皆私のことを忘れているのだろうか……。私とて男だ。そしていくら英霊だったとしても今は肉体がある。つまり人間としての機能は普通に存在する。食欲然り、睡眠欲然り、性欲然りだ。

理性で押さえ付けていたし、頻繁にセイバーが話しかけてくれたお陰で何事も無かったが私のことも考えて欲しいものだ。

そしてさらに3つ目だがこれは酷かった。誰が考えたかわからんが、オーデインをこの状態でオカマバーに放り込んだのだ。(連れて行くのは私の仕事だった……………。)

私は店の外で待機していたが、オーデインの悲鳴が聞こえる度に罪悪感にかられた。そして時間になり迎えに行くと顔中にキスマークをつけたオーデインがいた。

彼は神話体系の違う神ではあるがご冥福を御祈りする。

死んでません。

後に聞いたことだが彼女達曰く



「女性に興味を無くさせる為にオカマでなれさせてみました。らしい。本当に御愁傷様である。」

以上ではあるがはつきり言おう、逆効果だ。

何度も忠告したのだが大抵が大丈夫と言って聞かなかったのだ。

一部不安そうな者がいたので彼女達に聞いた所大丈夫と言った者達は皆未婚や恋人なしで男心がよくわかっていない連中らしい。ブリュンヒルデなんかも以前は自分の勇者がいたらしいが遙か昔のことであり今ではフリーのヴァルキリーでどこか勘違いしているようである。

そして現在のオーディンの諸行もあり冷静さを失っているようだ。

ここに来た時同様嫌な予感がしてならない。何事も無ければ良いのだが

「……………ああ、潤い、女体、若いおなご……………乳、尻……………」

オーディンを見るとそれは無いと確信してしまう。

そしてその時間近に迫っていたのだった。







何となくであるが納得したようである。

「では、これで失礼」

「ひよひよひよひよひよ！まてまてえええええい！」

「「「「ぎゃあああああああああああああああー！」「」「」

「「「「……………」

「……………本当にすみません。」

「……………構わんさ。では止めてくる。」

「……………お願いします。」

「……………ああ。」

おいーそれくらいに「

この後1日かけ何とかオーディンを止めることに成功したのであった。

余談ではあるがその後のオーディンは完全にはセクハラは無くなり  
はしなかったが以前よりその頻度は減り、オカマバーの影響が風俗  
に行く回数も格段に減ったらしい。

……ある意味《オーディン様性格矯正計画》は成功であった。

世の中、何が効を征するのかわからないものである。

## 五話（後書き）

如何でした？

私的にはオーデインはイツセー並の変態です。下手したらそれ以上の……。

まあともかく楽しんで頂けましたか？

感想待ってまゝす！

## 六話（前書き）

今のうちに言っておきます。  
イッセー、いじめね



## 六話

「セイバー、そろそろ降りよう。ここから先は人目が気になる。」

あの《オーデイン様性格矯正計画》から1年が経った。そして私がこの世界に来て、セイバーが生まれて約2年と半年ほどが経つ。

この1年でさらなる変化がある。私はあまり無いがセイバーの変化は凄まじい。

まず体長が6mほどになった。1年と少しで倍近く成長したのだ。以前より認識障害の魔術をかけることで発現しても特に問題が無かったが、成長と共に力も増大した事により私の魔術では効果が薄くなくなってしまった。

所詮私には魔術の才能が無い。故に永くは続かないだろう事は予想していたが、思っていたより大分早かった。

しかしこれを解決したのはセイバー自身であった。

私達はオーデインの件以降も半年ほどヴァルハラに滞在していた。理由はヴァルキリー達に頼まれたからだ。

あの時は計画終了直後であったため彼女達も不安であったようだ。これに了承したのだがオーデインが落ち着くまでにかかったのが半年であった。

そしてこの半年間ヴァルハラ内で生活していたためセイバーをほぼ

発現していたのだが何故かセイバーはヴァルキリー達、特にブリュンヒルデやロスヴァイセに魔術を習っていたのだ。

私の知らぬ間にセイバーは簡単な魔術ならばある程度出来る様になつていて認識阻害程度自分で出来る様になつた。

私も術式が違い魔力回数を使用しないこちらの魔術ならと思いつつてみたのだが、どうも私はこういつた才能はないらしく精々火球を飛ばせるようになった程度であつた。

セイバーは龍ではあるが私と違い才能があつたようで嫉妬しなかつたと言えは嘘になるがそれ以上に誇らしかつたものである。

そしてヴァルキリー達に教わつた副作用ではあるが

「きゅー！シロウ、わかりました。

ではこの辺りで私はシロウの中に戻ります。」

話し方が敬語になつたのだ。

彼女達ヴァルキリーはほぼ敬語で話す。どうやらそれがうつつたよつだ。

敬語になつたことでますます《騎士王》のセイバーに近づいてきた

と思った。

まあここ一年での変化はこんなものである。ヴァルハラでの半年以外は以前と変わらず人助けをしていた。

そして今日向かっているのは教会である。なんでもその教会には《聖女》と呼ばれている少女がいるらしい。

1ヶ月ほど前、ある村で火事があり中に男性が一人取り残されていた事があった。

その場に居合わせた私は男性を助けるために中に突入し、なんとか生きたまま救出することに成功したのだ。

しかしその男性は酷い火傷を負っていて村の診療所では手に負えないとのこと。で応急措置だけ済ませ近くの街の病院へ搬送されたのだ。

その男性には妻と息子がいて私はそれを放って置くことが出来ず、せめて新しい家が建つまではと村で復興の手伝いをしていた。

そして20日ほど経った頃だろうか、突如火傷を負った男性が村に帰ってきたのだ。

普通あれほどの火傷を負えばこんな短期間で治る筈がない。それに痕が残る筈である。

しかし男性は見た目健康で火傷の痕すら無かった。村人や男性の家

族も驚いていたが直ぐに笑顔に変わり男性の帰還を喜んでいた。

その日男性の無事と帰還を祝して宴が行われ私も招待された。せっかくの好意を無下にする訳にもいかず参加することにした。

その際男性と話す機会があり気になっていた火傷のことを聞いたのだ。

彼曰く「聖女様が癒してくださった」らしい。

《聖女》の事を詳しく聞くとその者はどんな傷でも癒せる力を持った少女らしく普段は教会でシスターとして生活しているようだが、彼が病院に搬送された十数日後、たまたまその病院に来た《聖女》により様々な怪我人が治療されたらしいのだ。

彼もその一人であり治療を受けると暖かい光に包まれ瞬く間に火傷が治ったそうで、《聖女》にお礼を言い村に帰って来たようだ。

その話を聞き《聖女》に興味を持ち始めた。

私とは違い人々を癒すことで救う少女、なんと素晴らしいのだろうか。

正に《聖女》であった。

正に《正義の味方》である。

私は《聖女》に会ってみたくなり男性に彼女がいる教会を聞くと快

く教えてくれた。その際「《聖女》様に会いに行かれるなら僕が村に無事についたことを知らせて欲しい」と伝言を頼まれたので、それを了承した。

そして数日後に私は村を出て教会に向かい、もうすぐで到着する所まで来ていた。

さて、《聖女》と呼ばれる少女はどの様な者なのだろうか。

私は徐々に気分が高揚しているのを自覚した。

\*

地上に降り歩き出すことはや一時間、ようやくお目当ての教会に到着した。

《聖女》がいるにしては特別大きな教会では無いが作りはしっかりとっていて巡礼者も多いようである。中に入ると祈りを捧げる人々がいた。

私は信者ではないので祈りを捧げるわけでも無く、ただ周囲の様子を伺いながら手の空いていそうなシスターを探していると後ろから声をかけられた。

「あの、この教会に何か御用ですか？  
見たところ巡礼の方では無いようですし。」

タイミングの良いことに一人のシスターであった。金髪の小柄で可愛らしい少女である。

せっかくなので彼女に《聖女》について聞いて見ることにした。

「この教会に《聖女》と呼ばれる少女がいると聞いてね。興味を持ったので不躰だとは思うが一度会って話をしたかったのでこうして巡礼者でも無いがここまで来たのだよ。

失礼だが《聖女》のもとまで案内してくれないか？」

少女は少し顔を赤くして

「すみません、多分それ私のことだと思います。」

本当にタイミングの良いことだ。

\*

「アーシア・アルジエントです。アーシアって呼んでください。」

「アーシアか、良い名前だな。

私はエミヤシロウ、エミヤでもシロウでも好きに呼んでくれて構わない。」

「ありがとうございます！」

ではシロウさんと呼ばせて頂きますね。」

あの後私は《聖女》に案内され裏庭のベンチに座り自己紹介をした。先の会話でもわかる通り彼女の名前はアーシア・アルジエントと言っらしい。

「それで私とお話したいとの事ですがいったいどの様な事を？」

「なに、人々の傷を癒し救うと聞いたのでそのことと、君にある者から伝言があるのでそれを伝えに来たのだよ。」

「伝言ですか？」

「ああ、君はつい最近病院で大火傷を負った男性を治療したのは覚えてるかな？」

「はい」

「実はあの男性を火事から助けてのは私でね、あの後も村に残り復興の手伝いをしていたのだが無事に彼は村に戻ってきたよ。」

「本当ですか！」

「ああ、彼はありがとう、と言っていた。君のお陰でまた元気に過ごせるともな。」

「良かったです。それに貴方があの方を火事から救ってくださったのですね。」

これも主のお導きです！ああ主よ

「

そう言つてアーシアは神に祈りを捧げる。かなり信心深い娘なのだろう、彼女の周囲が光つたような幻覚が見えそうである。

それにとっても優しい少女のようだ。義務感で人を癒すのでは無く、真に心から人を癒したいと思つているようだ。

そのことは先の言葉からも十分に察することができた。

「アーシア、そろそろ良いかな？」

君の癒しの力について聞きたいのだが」

「はっ！すみません！私御祈りすると長くて……………」。

えと、私の力についてですね。この力は私が子供の時からあつた物です。詳しくはわからないですけど《神器》と言つらしくて主の奇跡の1つらしいです。」

《神器》が彼女に宿っているのか。それならば彼女の力も納得がい

く。  
人の力では考えられない規格外の力、物によっては神すら殺す。  
幸い彼女のは人を癒す事に特化しているようだ。

「そうか、聞かせてくれて感謝する。」



それと1つ聞きたいのだが」

「何でしょうか？」

「君は今、幸せか？」

特異な力を持つものは排斥される。

私もそうだった様に。

それが例え癒しの力であろうとも人は自分達に無いものを恐る物である。

しかし彼女は笑顔で言う。

「はい！私の力で助かる人がいる、それはとても幸せなことだと思います。

ただ皆さん優しくしてくれますが、お友達がいなのは少し寂しいですけど………」

そして少し影のある表情で答えた。

やはり多少ではあるが力の影響が出ているようである。

ならば私が彼女を

そこまで考えて人の気配に気がついた。いや、これは人ではない。多分ではあるが魔族、いや悪魔か。

「アーシア、少し下がってくれ。  
どうやら招かざる客がいるようだ。」

「は、はい」

アーシアは頭に？を浮かべながら私の言う通りにしてくれた。

しばらく待っているとローブを着てフードで顔を隠した者が現れた。  
体格を見るに男であることがわかる。

しかし歩き方がおかしい。良く見ると胸元に大きな傷がある。

致命傷では無いようだがあの傷は不味い。しかしここは教会であり、  
彼は悪魔だ。下手に治療するのはそれこそ不味い。

どうにかして彼を別の場所に移動させ治療しようとしたのだが

「くっ！」「どぞっ

彼はそこで倒れてしまった。

それを見たアーシアは止める間もなく彼、悪魔に駆け寄り

「大丈夫ですか！？」

ああ酷い傷……。待っててください、今治します！  
そう言って治療しようとしたのだが

「アーシア待て！」

私はそれを止めた。

「何ですか！？この人はこんなに酷い怪我をしてるんですよ！」

「彼は悪魔だぞ？それでも治すのか？」

アーシアは驚いて彼をみる。

「ううううう……」

しかし辛そうな彼を見てアーシアは決意の籠った目で言う。

「それでもです！この人が誰であろうとも怪我人には違いありません！

私の力はこういった人を癒すためにあるんですから」

そうしてアーシアは治療を始めた。

この事が原因で後の悲劇に繋がるとも知らずに

\*

あの後治療を終え悪魔は礼を言い去っていった。

そして私もそろそろ教会を出ようと言い、アーシアが途中まで送ると言ったので門まで送ってもらうことにして現在門まで来たのだが何故かそこには教会関係者と思われる集団がいた。そして彼等が私とアーシアに気がつくとも事もあろうに

「来たぞ！《魔女》が来た！」

そう言ったのだ。

《魔女》？《聖女》ではなく？

は！？まさか

「貴様は悪魔を癒したようだな！悪魔を癒すのは《魔女》の証！  
今まで我らを、主を騙しおって！！

今すぐここから去れ！ここは貴様の様な《魔女》がいて良い場所ではない！」

アーシアは何を言われたのかわからず硬直している。

くっ！！抜かった！あの時誰かに見られていることに気が付かなか  
った！

普段の私であれば いや、止めておこう。今はアーシアの弁  
護することだけを考えるべきだ。

「少々待って貰おう」

「旅の方は黙っていらえますかな！これは我々の問題です！」

……………とりつく暇も無かった。

そして彼等の言葉は止まらなかった。

一つ一つが心を抉るナイフの様な言葉の暴力。  
しかしアーシアは目に涙を浮かべながらもジッと耐えている。

見ていられなかった。そして段々と腹がたってきた！

今まで散々《聖女》と持て囃していたくせに悪魔を治療しただけで  
《魔女》だと？あげくには悪魔に魂を売った売女ときた。

「……………ふざけるのも大概にしるよ。」

私の言葉に集団が凍りつく。

私の殺気に倒れる者まで出てきたがこんな者達を気にする義務はない！

「貴様等は今まで何を見てきた！この少女の何を見てきたのだ！  
散々彼女を利用したくせに都合が悪くなれば捨てるのか！  
それが神を敬う教会の、聖職者のやるこ」

「待つてください！」

私の言葉は事もあるうにアーシアによって止められた。  
アーシアは私の服の裾をギュッと握りながら俯き言つ。

「きつと私がいけないんです。」

私の祈りが足りないから、私が主を本当に思っていないから。

主を思えるだけで幸せだったのに、主に頂いた力で人々を癒せるだけで幸せだったのに、寂しいと思ってしまうのが、友達が欲しいと、家族が欲しいと思ったのがいけなかったんです……………」  
「だから主に見捨てられた」アーシアはそう言った。

それは違う！と言おうとして止めた。

アーシアが神に見捨てられる筈がない。彼女ほど敬虔深い信者はそうはいないだろう。

しかし神はこの世界にはもういない。他ならぬ私の手によって。

だから私にはそれを言う資格はない。

直接では無いにしろ彼女の人生を狂わせた一端は私にもあるのだから。

私には彼女の独白を聞くことしか出来なかった。

そして

「アーシア・アルジェント！ここから去れ！

そして旅の方よ、貴方もここから出ていってください。

《魔女》を庇う者を教会に通す訳にはいきません！どうかお帰りを

」

私達は教会より追い出されたのだった。

\*

「シロウさんすみません。私のせいでシロウさんまで追い出されて……。」

何処か目的地があるでもなくたださまよっているところとアジアが私に謝ってきた。

「気にするな、元々私は信者では無く君に興味をがあり教会を訪れたにすぎないのでね。」

「でもっ!!」

「良いんだ。」

そうして私はアジアの頭を撫でた。

さらさらしていて滑らかな髪はまるで上質な絹のようでありとても触り心地の良いものであった。

悲痛な表情を浮かべていたアジアは私が撫で始めると顔を赤くして俯いてしまった。

それに苦笑しながら気になっていた事を聞いた。

「それはそうとアーシア、君はこの後どうするつもりだ？」

そう、今後の事である。アーシアの話を書く限りでは彼女は元々孤児であり教会に拾われ今にいたるそうだ。

よって彼女には両親が居らず行く当ても無いらしいのだ。

「……………わかりません。私はどうすれば良いのでしょうか……………。  
行く当てもありません。頼れる人もいません。

私は一人です……………」

そうしてアーシアは再び俯いてしまう。

だがな、アーシア

「……………そんな悲しいことを言わないでくれないか。

君は一人ではない。今は私がここに、君の隣にいるだろう。

私では頼り無いかもしれないが、私で良ければいくらでも力を貸すぞ。」

「そんな！ただでさえ私のせいで教会を追い出されたのにこれ以上迷惑はかけられません！！

どうしてシロウさんはそこまでしてくれるんですか!？」

「……………私はね、《正義の味方》を目指しているんだ。

笑ってしまうだろう？こんな無骨な男がいい歳で《正義の味方》だ。



しかし私は本気で目指しているのだよ。  
そのせいか困っている人は見過ごせなくてね。  
そして私は以前、救えない人がいた。  
救えた筈なのに救わなかった人がいたんだ。  
もうあんな思いはしたくないし、させたくない。  
これは私の我が侘だ。  
だけど私に君を救わせてくれないか？」

「でも、私は、私は……………！」

「君は寂しいと言った。友が、家族が欲しいと言った。

私で良ければ私が友に、家族になろう。」

私の偽らざる気持ちだ。仮に拒否されても私は構わない。  
彼女の意思を尊重する。

「でも、私達は血が繋がっていません……………」

「家族に血の繋がりなど関係ない。心で繋がる者をそう呼ぶのだよ。」

以前の私がそうであったように

「……………私達は今日あったばかりです。何でそんな私と友達になってくれるんですか？」

「友とはなろうと努力するものでも時間をかけるものでもない。気づけばなっていた、それが友だ。時間など関係ないし自分がそう思えば友と呼んで良いのだよ。」

生前の私にもそう呼べる人がいたのだから。

「……私は《聖女》じゃないですよ？」

段々と涙声になりながらもアーシアの問いは止まらない。

「《聖女》で無いからなんだと言うのだね？そんな者、この世界には沢山いる。」

《聖女》と呼ばれる者が稀有であるのだから。

「わ、私は《魔女》ですよ？」

シ、シロウさんは《正義の味方》なんですよね？」

「君が《魔女》の筈ないだろう。

例えば君が《魔女》であろうとも関係ない。

むしろ《魔女》すらを護る《正義の味方》になってやるさ。」

等々アーシアは泣き始め、その可愛らしい顔を涙で染めていった。

「わた、しは、ひっく、私は」

「もう良い。

アーシア、君の願いを言うんだ。

誰も君を責めない、責めさせない。

君は好きに生きて良いんだ。」

私のその言葉にアーシアは今まで溜め込んできたであろう感情を爆発させた。

「……………もう寂しいのは、一人は嫌です！

と、お友達が欲しいです！

か、かぞ、ひつく、家族がほ、欲しいです！

……………シロウさん、私の、家族になってくれますか？」

「ああ、こんな私だがよろしく頼む。

今日から私は君の友であり、父であり、兄でもある。

君に本当に大切な人が出来るまで私が君の傍にしよう。

もう私達は家族なのだから」

そうしてアーシアは

「はいっ！シロウお兄様！！」

私の家族になった。

この時のアーシアの笑顔を私はずっと忘れないだろう。

私に抱きついた彼女の顔は涙でくしゃくしゃだったが、この日見た彼女の表情で一番輝いていた心からの笑顔だったのだから。

## 六話（後書き）

と言うわけでアーシアちゃんはシロウの妹になりました！

ただヒロインと言うわけではありません！

……………と思います。

七話（前書き）

連・続・投・稿！

ただし短いです！

後少しで原作！頑張りますぞ！

## 七話

「日本へ行くこと」

こうなったのはある事がきっかけだった。

アーシアだ。

アーシアと家族として過ごす様になりはや4ヶ月、様々な地に赴き人々の手助けをしてきた。

アーシアも率先して手伝ってくれた。時には無茶なことまでしようとしていたので

「無理してする必要は無い」と伝えると

「お兄様が正義の味方なら私もそれに恥じないようになりたいんです！」

と言って引かなかった。

だがそれで彼女が怪我をしたら本末転倒なので

「その気持ちは嬉しいのだが、明らかにアーシアに力仕事は不向きだ。だからアーシアには私の出来ないことや手の回らないことをして欲しい。」

そうすれば助けてあげられる人が増えるだろ？」

そう言うとアーシアは元気に頷き、それ以降は無茶はしなくなり、アーシアに出来ることをするようになった。

そうして過ごしてきたわけだが私はあることに気がついた。

まず1つはアーシアが純粹すぎる。それは良いことなのだが別の見方をすると人を信じすぎる。

この世界には善人ばかりではなく平気で人を騙したり殺す者達がいる。

だからと言って人を疑えと言つつもりはないがせめて人並みの警戒心を持って欲しかった。

そして2つ目にアーシアは社会の仕組みがあまりわかっていない。

今まで《聖女》として人々を癒す生活をしていたのだから仕方ないかもしれないが、これからはそうもいかない。

故にアーシアを学校に通わせようということになったのだ。

学校で一般的な勉学や社会の仕組みを学び、様々な人が集まることで様々な人格を見ることが出来る。

そして何よりアーシアに同年代の友達が出来ると思ったからだ。

この事をアーシアに話すと大変喜んでくれたが同時に心配された。

何にかと言つとお金についてだ。

しかしお金の心配はいらなかった。

何故かと言つと、旅に出る前にオーディンに大金が入った通帳を持たされたのだ。日本円にして五千万ほどだ。

こんなに貰えないと初めは拒否したのだがオーディンが脅し始めた



のだ。

ヴァルキリー達を。

「この金が足りないならわしが使うぞ。風俗で！  
ひよひよひよひよひよひよ！毎日朝から晩まで梯子じゃあああああ  
あ！！」

これを聞いたヴァルキリー達に頼むから貰ってくれと言われ、半ば  
仕方なく頂くことにしたのだ。

そして行く先々で日雇いで働いたり、助けた人にお礼で貰った（無理矢理）でお金にはあまり困っていなかった。

その説明をするとアーシアは申し訳なさそうにしながらも

「すみません。でも、ありがとございます！」  
と最後には笑顔で言ってくれた。

それから何処に行くかという話になったのだが、ここでセイバーの  
登場だ。

セイバー曰く

「きゅー、シロウ！私は日本が良いです！

日本は料理がとても美味しく世界各地の料理が集まると聞きます！だから日本です、きゅー！」

だそうだ。

それを聞いたアーシアも日本に興味を持ち行きたいと言い始めたのだ。

確かに日本なら治安も悪くないので悪くないし私も久々に日本に帰るのも悪くないと思ったので学校は日本ので決めた。

ちなみにアーシアとセイバーを会わせてみた所、アーシアは非常に驚いていた。

《神器》を私も持っていたこともそうだが、その力が《龍》であったことに。

それもそうだろう、《神器》を見せると言って呼び出すと6mほどの白銀の《龍》が現れたのだから。

しかもまだ2歳半でまだまだ成長する可能性があると言うとアーシアは驚いていた。

驚いていたのだが

「凄いです！セイバーちゃんはまだ大きくなるんですね！」

何処かずれた驚き方であった。

その後二人？は直ぐに仲良くなった。

セイバーはアーシアになつき、アーシアもセイバーを友達のように接していた。

さらに余談ではあるがアーシアがセイバーの背に初めて乗った時に初めは楽しそうにしていたが最終的に目を回していた事は言うまでもない。

正直私もきついで対策を考えなくてはいけない、そう思ったのだった。

\*

「お嬢ちゃん、君ってシスターさん？何処に行くのかなあ、かなあなああん？

俺？ぼくちん日本に行くでやんすよ！

もうね、面倒でダルくてちょおおい楽しみなのですよ！」

日本に向かうために空港に行く途中に突然おかしな言動の者に話しかけられた。そちらを見ると白髪の神父服をきた少年がいた。

「君は何か私達に用かね？

初めて会ったと思うのだが？」

「んー？んー！お兄さん強いねえ！人間？人間なの？うわあ〜お、まじ人間じゃん！おーいおいおい、ぼくちんより強い人間久々に見ましたよー、こりゃ弟子入りか？弟子入りしちゃうの？やっぱりやーよ！俺様師匠持たないも〜ん。ぎちぎちな訓練糞喰らえッス！俺って自由な神父でしょ？ふりいいいいいだむ！」

「……………」

意味がわからない。言葉は通じているのか今更ながら気になり始めた。

「あ！今意味がわからないとか思ったつしよ！さーせんね、ワタクシこんなんでごめんちゃ！

でもでもわかってるんだな〜、あれつしよ？俺の用ざんしよ？

ざ〜んねん！ぼくちんの用はお兄さんにはありやーしませんぜ！用があるのはその君！シスター服を着ちやうその娘つ子よ〜。

何でこんな所にいるのかいな？

お兄さんと一緒に駆け落ちすか？逃避行すか？もしやもしやハネムーン？

うわほお〜い、違うぜ間違いだぜ実は知ってるんだぜ〜い！

君って元《聖女》の娘ですよねえ、ううう聞くも涙語るも涙！でも俺様泣けないの〜〜〜！」

「……………」

さらに意味がわからない。途中何故お前が知っていると思わなくも

無かったが教会関係者が知っていてもおかしくは無い。

それよりも教会の者が今更アーシアにどのような用があるのかが気になる。

「いい加減してくれないかね。私達も暇では無いのでな。」

「おゝとっ！ダメダメ、聞いてくれないとぼくちん泣いちゃうわよ  
くん。」

「っ！かお兄さんちよいと邪魔？みたいなー？」

「いやあああん、ウソウソそんな目で見ないで！アタイあんたを殺したくなっちゃう！」

アーシアが私を護ろうとサツと前に出た。

「あれ？お嬢ちゃん護っちゃう？お兄さん護られちゃう？」

「へいへいへい！お兄さんカツコ悪いんじゃないのかにゃー？」

「美少女に護られるなんてちょおおおおおお羨ましいのですけど  
どおおおお！」

「って、待つて待つてお待ちくださいな！」

「話す話します話させていただきますぜ！」

相手にしてられないと判断し、さっさと行こうと歩き出した私達を

少年言語不能神父が止めに入った。

「……………小僧、話なら早くしろ。これ以上無駄話が続くなら次は無視させて貰う。」

「へいへいほい！実はですね、ワタクシも教会追い出されちゃったんすよ！

んで今墮天使様の所にいたりいなかったりしちゃったりしてるんでえお嬢ちゃんもどう？ってお話しようん！わかった？わかんなかったらごめんあそばせ！

てなことで俺様日本にG O ッス！気が向いたら来て。向かなくても来て！

じゃ、ばいなら〜」

手紙の様な物を私達に渡し少年言語不能神父は去っていった。

「……………何だ、あれは？」

「……………わからないです」

とりあえずわかった事は彼も教会から追い出され、今は墮天使に使えていると言うことだけであった。

「はああ」「」

物凄く疲れたことは言うまでもない。

嵐が（少年言語不能神父） 去った後私達は無事に飛行機に乗り日本  
に向かったのであった。

願わくば日本でアジアが幸せに過ごせますように。

## 七話（後書き）

……………どうでした？

わかったと思います。少年神父はフリードです。彼の言語まじでむずいっす！



## 七・五話（前書き）

今回も短いっす？

日本についてからのちょっとしたお話しです

## 七・五話

行き交う人々。

辺りを埋め尽くすビルなどの建物。

スーツ姿で世話しなく動く者。

制服を着た学校帰りと思われる少年少女。

買い物中である主婦達。

周囲には日本語で書かれた看板や電光掲示板。

車の排気音などと混じり聞こえてくる会話は日本語。

そう、私達は日本に来ていた。

先ほどからアジアが物珍しそうに周囲を見渡している。

私も懐かしい風景に心を踊らせていた。

セイバーに至っては花より団子、風景より食事である。先ほどから私に念話で

『シロウ！早く日本食を！ああ、スシ、テンプラ、サシミ、きゅう  
……………』

今日もセイバーは元気である。

それはそうとあの少年言語不能神父から渡された手紙には彼等の集まる教会の住所と地図が記されていた。

アーシアも少なからず興味があるようで行ってみたいらしくとりあえずその地域に行く事にした。

現地に着くと私はまず宿の手配をすることにした。

多分この地の学校に通わせる様になると思うのでアパートでも借りるつもりであるがひとまず拠点となる所を探さなくてはいけない。

即入居可能な場所などそう無いし、少なくとも年単位で住むのだから良い所を選びたいと思うのが人情であろう。

「アーシア、私は当分の間の拠点となる宿を探しに行くが君はどうするかね？」

「え、えと、私は教えて頂いた教会に行ってみようと思います。」

「そうか、なら今が14時だから  
にまたここ駅前に集合だ。」

よし、18時

ここに住むかもしれないから良く町並みを見てくると良い。」

そう言うってからアーシアにおこずかいとして5千円を渡す。

「あ、ありがとうございます！」

「後このブレスレットを持っていきたまえ。これは魔術がかけられていて困った時にこれに念じれば私と念話が出来るようになる。」

そしてブレスレットもアーシアに渡した。

このブレスレットはブリュンヒルデに頼み送って貰ったものだ。オーディンに頼んでも良かったのだがあの老人は些か不安なため信用できるブリュンヒルデに頼んだのだ。

後日ロスヴァイセから電話がきて

「シロウ！何で私に言ってくれなかったんですか！」

と文句を言われたのは記憶に新しい。

「お兄様ありがとうございます！じゃあさっそく試してみますね。」

アーシアはブレスレットをつけ御祈りするように念じ始める

「お兄様？聞こえますか？」

「ああ、聞こえる。使い方はわかったか？」

「あ！本当に通じてます！」

そう言ってアーシアは念じるのを止める

「お兄様、重ね重ねありがとうございます。」

ふふ、これでいつでもお話し出来ちゃいます！」

無邪気な、それでいて綺麗な笑顔をアーシアは浮かべた。

この笑顔を見る度に思う

必ずこの1を護り抜こうと

零れ落とさないようにしよう

「ああ、そうだな。」

困ったことが無くとも連絡してくれ。アーシアとの会話は私も楽しいからな。

さて、私はそろそろ行く。

アーシア、日本は安全とはいえ人がいる限り危険なこともある。だから気をつけたまえ」

私の広げられる手は狭く小さいかもしれない  
護れない、救えないものもあるかもしれない  
だけど

「はい！行ってきます！」

私は独りではないのだから

「ふむ、`行ってらっしゃい`」

絶対にこの1を護り抜こう

そう改めて心に誓ったのだった。

七・五話（後書き）

微妙？普通？どっちですかね？

八話（前書き）

投稿！

少し話が進みます。

## 八話

ホテルグレモリー、世界各地に展開するグレモリーグループの直営ホテルだ。

豪華な造りのわりには値段はリーズナブルで場所も駅から近かった。他にも時間が許す限り探し回ったがここが一番良かったので当分の拠点にしようと思う。

それはそうとグレモリー……

何処かで聞いた事があったような気がするのだが何処だったろうか。聞いた話ではあるがグレモリーグループは海外の企業で様々な分野に精通している大企業である。

それだけのものであるなら聞いたことがあっても不思議では無いのだが、何か引つかかる。

まあ思い出さないということは大したことでは無いのだろう。

そろそろアジアとの約束の時間になることだし考えるのは後でも構わないだろう。



『きゅー！シロウ、アーシアと合流したらラーメンを食べましょう！  
駅前に良い香りがするラーメン屋がありました！』

やれやれ、セイバーもこう言っているしさっさと行くとするか。

私は荷物を置き必要な物だけを持ち部屋を出た。

\*

「アーシア！すまない、待ったか？」

駅前に行くと既にアーシアは到着していた。

くっ、不覚！女性を待たせてしまうとは！

「いえ、私もついさつき着いたばかりです。

お兄様、何処か良い場所がありましたか？」

「ああ、あそこに見えるホテルがそうだ。

あそこなら駅に近いし色々と便利だろ？当分の間はあそこを拠点にしよつと思っただが」

ホテルを指差しながら説明をするとアーシアは心配そうな表情を作った。

「あのホテルですか……………」

凄く立派なホテルですけど高かったのではありませんか？

ただでさえ学校などでお金がかかりますのに申し訳ないです。

別に私は野宿でも大丈夫ですよ？」

私に気を使ってくれているのだろうが野宿など日本の都市で出来るわけないし、させるわけがない。

以前は旅の途中だった事もあり、やむなく野宿をしたこともあるが近いうちに住居を確保しなくてはいけないのだからあまり目立つことはしたくない。

「アーシアが気にすることは無いさ。

何処に泊まってもあまり値段は変わらないし、むしろ安い方だったからな。

それより先ほどからセイバーがあそこのラーメン屋に行きたいというさくてね。

夕飯はラーメンで良いかね？」

「くすっ、わかりました。気にしないようにします。」

それと私もラーメンが食べてみたいです！お兄様、行きましょう。」

アーシアは私の手を引きながら歩きだした。それから直ぐに振り返り

「お兄様、ありがとうございます！」

笑顔を浮かべた。

やはりこの娘の笑顔は良いな

もしこの笑顔を壊す者がいたら私は絶対にその者を許さないだろう。

例え何であらうともな。

ちなみにラーメンは非常に美味しかった。

匂いで料理の良し悪しがわかるとは、セイバーの嗅覚恐るべし……………

\*

食事を終えホテルに戻った私達は今日のお互いの報告をし合った。そうは言っても私は宿探しをしていただけなので、あそこに何があった、そこには何があるなど特別な事は無かったのだがな

「アーシア、君は教会に行ってきたのだから？」

「どうだったかね？」

「え、えーと。」

「い、良い所でした！墮天使様にもお会いしましたがとても優しい方でしたし！」

「他の方々も訳あって教会から離れていますがとても良い人達でした。」

「

嘘だな。

笑ってはいるが何処か無理しているように見える。

「聞き出そうかと思ったがアーシアの自主性を尊重しよう」と聞き出すことはしなかった。

「そ、それで御祈りのために教会に通おうと思うのですが表立って

出来ないようです。夜に行うそうなんです。

……帰りが遅くなるかもしれませんが良いですか？」

「……帰りが遅くなるのはあまり良くは無いが私も人のことは言えんか……。」

ふむ、無理や危ないことはしない。困ったことがあれば直ぐに私に相談する。

これを守ってくれば私は何も言わない。」

出来れば止めて欲しいがアーシアがやりたいことであるなら仕方ない。

先ほどの教会の話も気にはなるがアーシアから言ってくれるまで待つことにしよう。

「あ、ありがとうございます！」

そういえばですけど今日道に迷ってしまった

アーシアは礼を言い今日あった出来事を話してくれる。

先ほどの無理な笑顔ではなく本当の笑顔で。

そして夜の10時くらいにアーシアは御祈りに行くと言って教会に向かった。

後に私はアーシアに許可を出したことを後悔するのだが、今の私にそれを知る術は無かったのだった。

Side out

アーシアSide

どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう！

お兄様に嘘をついてしまった！

あんなに私を心配してくれているのに！

墮天使様が優しい方だったのは本当です。本当ですが凄く怖い方もありました。

人をまるで虫でも見るような冷たい視線に冷たい笑み。  
何故か私には優しくかったです。が神父様には非常にきつく当たっていました。

神父様たちも怖い方ばかりでしたし。

本当はあそこには行きたく無かった。

でも

「貴女の手を私にかけてちょうだい。

もし断るならそうね。あの男、貴女のお兄さんかしら？  
あれを殺してしまいませんか」

そんな事を言われたら言うことを聞くしかないじゃないですか……

……

お兄様と出会って救われてまだ半年ですが私はお兄様が大好きです。

いつも護ってくれる、教えてくれる、助けてくれる私の《正義の味方》

だからこそお兄様には言えない。

お兄様が強いのは何となくわかります。

でもあくまで人間ではの話し、墮天使様に勝てる訳がないです。

それにあちらには神父様、エクソシストもいます。

エクソシスト、悪魔殺しを行う戦闘集団。

そんな方々に襲われたらお兄様が死んでしまう！そんなのは絶対に嫌です！

だから、今度は私がお兄様を護ります！

幸い墮天使様は私が言うことを聞けばお兄様には何もしないとおっしゃいました。

だから私は教会に行きます。夜のお外は怖いですけどお兄様が居なくなるよりは全然良いです。

何をするのはわかりませんが絶対にお兄様を死なせたりしません！

アーシア side out



## 八話（後書き）

ちよこつと進みました。

次回はいよいよあいつの登場！

の予定です！

## 九話（前書き）

重！書いてて思いましたが重！  
シロウ間に合うか？

さあイツセー！男を魅せる！

では本編行ってみましょう！

## 九話

### 墮天使

それは天使であつた者が墮ちた時になるもの。  
最初の墮天使だが一説によれば人間に知識を与えた天使が神によつて罰を受け墮ちたと言われている。  
他にも神の次に力を持っていた存在、大天使ルシフェルが神に異論を唱え自ら墮ちたものともされている。

この世界ではどのような歴史的背景があるかはわからないが共通しているのはどちらも禁忌を犯したということだ。

その禁忌とは今は亡き神が定めた物か、それとも天使達の総意によるものかはわからない。だがわかることもある。

墮天使とは天使としての道を外れた者達であると言つことである。

道を外れた、つまりは己の欲望に負けた者。

一度欲望を知つてしまえば次から次へと欲が生まれてくる。下手に力があれば無理矢理にでも欲を叶えようと動くだろう。

私も動くべきなのかもしれない。

チラッと食事をとるアーシアを見た。

日に日にやつれていくアーシア。

何があったのかはわからないが確実に例の教会、墮天使が関わっているのだろう。

アーシアが教会に通うと言った時、`墮天使`と言った時に不安を覚えなくは無かったが、私は何処かで樂觀視していた。それと言うのも原因は座に現れた神と魔王にある。

彼等は争い合いながらも真に世界を考えていた。

だから天使であろうと悪魔であろうと、そして墮天使であろうとそれは同じと考えていた。

いや、実際に墮天使の上層部はそうなのかもしれない。

だが下の者は？

例えば天使であれば己の欲望に負けた場合、上記のように墮天する。だが墮天使ならばどうだろうか。

これも上記で述べたが既に欲に負けた者達ならばさらなる欲のために動くだろう。

つまり樂觀視は出来ないのだ。

アーシアは何も言わない。もしかしたら何か弱味を握られているかもしれない。

推測にしか過ぎないがほぼ確実だろう。

それに昨夜、というよりはほぼ朝方であろうか。帰宅したアーシアは酷く衰弱していて落ち込んでいたように見えた。それなのに私には笑顔を見せてくれる。

もう教会には行かせられない。

これではいつかアーシアが壊れてしまう。それも遠くない未来に

「アーシア」

食べ終わるのを見計らって声をかける。  
はい？と小首を傾げるアーシアに私は

「もう教会に行くのは止めたまえ。」

そう告げた。

驚愕。それがアーシアの状態を示すのに一番最適であろう。  
一度体を震わせ目を見開くアーシアに続けて告げる。

「君が神を敬うその心はわかる。君ほどの信者であるのなら祈りを捧げたいというのもわかる。  
だがそれは教会で無くては出来ないことなのか？」

教会に行く度にやつれていくアーシアを見るのは正直辛いものがあ

る。

アーシア……話してくれないか。  
君が何を抱えているのかを」

「……………」

アーシアは俯き黙ってしまった。

この様な顔を見たくはないが私にも譲れない時があるのだ。

しばらく沈黙が空間を支配するがこの沈黙を破ったのはアーシアだった。

「……………すよ。」

「アーシア？」

「言えないです！」

痛みに耐える様に、悲しみを抑えるような悲痛な叫びが響く。

「言えるわけないです！たとえお兄様でも……………いいえ、お兄様だからこそ言えないんです……………。  
大丈夫です。私は大丈夫ですから……………。」

それっきりアーシアは黙りこんでしまった。

だが代々のことはわかった。

私がアーシアの足枷になってしまったらしい。

許せん……………。

アーシアがじゃない。

墮天使……………も勿論許せなくはあるが何よりも自分が許せない。

アーシアの足枷になってしまった自分が。

足枷になるような弱いと思わせてしまった自分がこの上無く許せない。

自分を殴りたい衝動にかられるが、それはアーシアに余計な心配をかけてしまうだろう。  
だからそれに耐える。

それよりも今は教会に行かせない様にすることが先だ。

と言っても大した考えがあるわけではないので

「アーシア、頼むから今夜はここにいてくれないか？私ともあるう者が情けないことに寂しいらしくてね。」

「ここ最近あまり話していないだろう。だからアーシアと話したいのだがどうかね？」

と素直な気持ちを少し誇張して伝えた。

「アーシアは私らしくない言動に驚き、そして迷い、最後には笑いながら」

「ふふ、わかりました。今夜は行きません。」

でもお兄様がお話したいって言ったんですから途中で寝ないでくださいよ？」

と言ってくれた。

良かった、これで今夜も行くと言い出したら無理矢理にでも止めていただろう。

たとえ手荒なことをしてでも行かせる訳にはいかない。

それほどにアーシアは衰弱していたのだから。

「わかった。アーシアが寝るまで会話を楽しもう。」

聞いたかセイバー。今夜は久々にアーシアとたくさん話せるぞ！」

「きゅー！はい凄く楽しみです！」



アーシア、今日は寝かせませんから覚悟してくださいね？」

本当に嬉しそうに伝えるセイバーに

「はい！たくさん話しちゃいますよ。」

こちらも嬉しそうに応えた。

この日の夜、久々に3人（二人と一体）で他愛もない話で盛り上り夜遅くまで話していた。

その時に明日は一緒に買い物に行こうと約束をしてから眠りにつきこの日は何事もなく過ぎていったのだった。

\*

翌日、朝食をとり10時くらいにホテルを出た。

今日の買い物目的は服である。

私にしてもアーシアにしても現在持っている服は少ない。

私はともかくアーシアは女の子である。お洒落に興味が無い筈もなく今まで我慢していたことは容易に想像できた。

そしてアーシアに似合いそうな物は一通り買い（下着類は流石にア

「シーア一人に行かせたが）、ついでに私も適当に買って気がつく  
と昼近くになっていた。

何を食べようかと考えながらブラブラしていると

「イツセーさん？」

どうやらアーシアが知り合いを見つけたらしい。

アーシアの視線を追ってみるとそこには一人の少年がいた。年齢は  
アーシアと同じくらいの日本人の少年だ。

するとその少年もコチラに気付いたようで

「おーアーシアじゃん！こんな所でどうしたんだ？」

と言って近づいてきた。

この少年凄いな。

この歳で外国語をここまで流暢に話すとは中々出来ることでは無い  
だろう。（シロウとアーシアは外国語で会話しています。セイバ  
ーは神器なので悪魔と同じ世界共通言語です）

楽しそうに話す二人を見てると少年はふと私を見て

「それはそうとアーシア、この人はだれ？」

と尋ねてきた。

私としたことが自己紹介を忘れていたようだ。

「これは失礼した。私はエミヤシロウ、アーシアの家族だ。まあ血は繋がっていないがね」

「え！？もしかしてお兄さん？

は、ははははは初めまして！俺兵藤一誠です！みんなからはイツセーって呼ばれてます。

アーシアとはこの前道に迷ってたのを助けた時に知り合いました！

よよよよよろしく、おお、お願いします！」

随分と緊張している。はて？何故彼は緊張しているのだろうか？

「そこまで畏まらなくても構わんよ。

それにしても君がイツセー君か。話しはアーシアから聞いているよ。この前道に迷っているときに助けてくれた親切な人がいた、とね。

私からも礼を言う、ありがとう。」

「イツセーさん！私も改めてお礼をします。ありがとうございます

！」

二人揃って頭を下げる。

「そ、そんな！シロウさん、頭を上げてください！  
お、おい、アーシアも頭を上げろって！  
俺は当然の事をしただけだし！」

当然の事か。

その当然の事を出来るのがどれだけ難しいことか。  
アーシアは良き少年に巡り合えたようである。

「しかしそれでは私の気がすまない。何かお礼をさせてくれないか  
？」

「いや、お礼なんていいですって！」

「そう言うわけにはいかない。

ふむ、イツセイ君。君はお昼は食べたかね？」

「いえ、まだですけど……………」。

「ならお昼を奢らせて貰おう。

アーシア！」

「はい、何ですか？」

「彼を食事に連れて行ってくれ。」

「はい！わかりました！」

お兄様はどうされます？」

「私が居ては彼が気を使うだろ？」

二人で行きたまえ。私は適当に何処かで食べるぞ。」

「わかりました。それじゃあイツセーさん行きましょうか。」

「いや、でも」

「良いから行きたまえ。」

「そうだ、イツセー君お昼代だ。」

「そう言うてからイツセー君に一万円を渡す。」

「ですからお礼なんかいいですって！」

「それにこんなに渡されても困りますよ！」

「イツセー君、人の好意は素直に受け取りたまえ。」

「それに多くは無いら。君には頼みたいこともあるしな。」

「頼みたいことですか？」

「ああ。アーシアに日本の遊びを教えてあげて欲しい。アーシアの生い立ちは聞いているかな？」

「ええ、一応ですが」

「ならわかるだろ？」

そう言っているとイッセー君は少しの間悩み

「……………わかりました。それじゃあお言葉に甘えてご馳走になります！

後アーシアに全力で日本の遊びを教えます！」

笑顔で応えてくれた。

「よろしく頼む。

じゃあアーシア、イッセー君楽しんでくると良い。

私は多分ホテルにいる。それでは失礼する。」

「お兄様、行ってきます！」

「シロウさん！アーシアは任せてください！  
じゃあアーシア何を食べようか？」

「そうですね。あっ！それじゃあ私は

」

遠ざかって行く仲良さげに話す二人の声を背に私も歩き出す。

「さて、セイバーは何が食べたい？」

『きゅ〜〜〜そうですね。』

『そっだ！あれが食べたいです！コンビニなる物のおにぎりを！』

「……………随分とマニアックかつメジャーな物を選ぶなあ。

『まあ良いか、何味のが良いのかな。』

『シヤケと明太子と

』

こうして私達は別れ、別々にお昼をとったのだった。

\*

「遅いな……………」

ホテルの部屋で一人そう呟いた。

何がと言うまでもないがアジアである。

遊んでいるのなら遅くなるのもわからなくもないが既に外は暗くなり街灯がつきはじめている。

アジアなら連絡くらい寄越すだろうか……………」

いや、だが遊びに夢中になり忘れているだけかもしれない。

心配しすぎだろうか？

しかし墮天使のこともある故にしすぎと言うことは無いだろう。

ふむ、一度連絡をとってみるか？

だが邪魔してしまつては悪いし……………」

『……………お兄様』

む？アジアから念話が入った。



『アーシア、どうした？遅くなるのか？』

『……………』

『アーシア？どうかしたのか？』

『……………ごめんなさい。』

ごめんなさいだと？いったい何がだ？

『はは、私、帰れそうにないです。』

つつつつ！！まさか！？

『アーシア！今何処にいる！？』

『……………私、お兄様と会えて幸せでした。この半年間家族になれて本当に幸せだったんです。本当ですよ？』

私の問いには応えずアーシアは淡々と言葉を放つ

『アーシア！いいから何処にいるか教えるんだ！！』

必死に呼び掛けるが

『お兄様はいつもしかめっ面で、だけど優しく、それでいて不器用で。

なのに何でも出来て、自慢のお兄様です。

私はそんなお兄様が大好きです。

短い間でしたがお兄様は私の本当のお父様でお兄様でした。』

アーシアの独白は止まらない。

『頼む、アーシア！応えてくれ！』

『……本当の、ひっく、家族……なれてと、思えて、ぐすつ、ああ、家族って良いなあって、思ったんです。』

「くっ！」

独白に涙声が混じり始めて私はいてもたつてもいられなくなった！

慌てて部屋をでて走り始める。

途中ですれ違う人に怪訝そうに見られるが人目を気にする余裕は無い！

『う、ううう、お、お兄様のお陰で、お友達、がで、出来まし、ぐす、  
それにす、好きな人がひつく、出来たかも、しれないんです。お兄様なら……もう、おわかりに……なられているんじゃないですか？』

くっ！走るのがまどろっこしい！多分アジアは教会だ！だが私は教会が何処にあるのかわからない。正確には住所はわかるが場所が一致しない。

仕方ない、この辺りを一望出来る場所は………あそこかっ！！

『紹介したかった、です。  
もつと、一緒に、い、いたかったです。  
お、おに、い様とみ、な、さんでご飯を、た、食べ、食べたかったです。』

よし、着いた！教会は何処だ！？  
くっ！教会が二カ所ある！どちらだ？  
アジアの気配がするのは！？  
くそ！念話のラインを探るしかないか！？

『でも、それは無理みたいです。』

いつの間にかアーシアは泣き止んでいた。どっちだ？どっちにいるんだ！

『お兄様、短い間でしたがありがとうございました。』

さようならお兄様。』

くそくそくそくそ！まだか！まだ見つからない！

『さようなら、正義の味方』

つつつ！見つけた！あちらの古びたぼうか！！

『アーシアは本当に幸せでした。』

「来い！セイバーあああああああああああああ！……！！」

「きゆうううううううううう！！……！！」

どおおおおおおおおおおおん！！

今までの発現と違い、まばゆいばかりの光と轟音が轟き、光が晴れるとそこには光輝く白銀の龍、《白銀の騎士王たる龍》セイバーが現れた。

『最後になりますがお兄様、生きてください。  
そして私の様な人を幸せにしてください。  
お兄様は私の自慢の、正義の味方、なんですから!』

そうしてアーシアからの念話がきれた。

S i d e o u t

アーシア S i d e

今日は本当に楽しかった。

午前中はお兄様と買い物に行きました。

ふふ、お兄様ったら私のお洋服ばかりで自分のほとんど買わない  
んですよ？

たくさん買って頂いて嬉しいですけど少しは自分のためにお金を使  
ってください。

お買い物が終わってブラブラしているとイツセーさんに会いました。

イツセーさんが悪魔と聞いたときは驚きましたがイツセーさんはイ  
ツセーさんです。真っ直ぐで良い悪魔さんです!

イツセーさんの食事はハンバーガーを食べました。

注文が上手く出来ずに結局イツセーさんが替わりにしてくれました。  
今度来たときは絶対注文してみせます！

ゲームセンターに行きました。  
中は薄暗いのにピカピカ光っていて凄い音でしたが楽しかった。  
イツセーさんはゲームがとても上手でお人形さんをとってもらっちゃいました。

ゲームセンターを出て散歩で公園まできてお話をしました。

なんとイツセーさんがお友達になってくれたんです！

初めての同年代のお友達でした。

嬉しかった。涙がでてしまうほどに嬉しかった。

お兄様と家族になれた時と同じくらい嬉しかったです。

本当に楽しかった、嬉しかった。生きてて良かったと心から主に感謝しました。

でも楽しい時間はここまででした。

墮天使様、レイナー様が私をむかえに来ました。

恐い……………。

恐いですけど私はレイナー様についていきます。

イツセーさんは行かせないように言ってくれましたがいいんです。

私が行けばそれで収まるのだから。

誰にも傷ついて欲しくないから。

だから私はついて行きました。

あっ！イツセーさんにとつてもらった人形、落としちゃいました！  
せっかくイツセーさんにとつてもらったのに……………。

残念ですが仕方ないです。後でとりに行きましょう。

教会に着くと私は意識が遠くなりました。

気がつくと体の自由が効きません。

よくみると私は張り付けにされていました。そこから先はめまぐる  
し早さで進んでいきます。

大きな音が聞こえました。

人の叫び声が聞こえます。

何が起きているのかわからないですけど何故か少し嬉しいです。何  
故でしょうか？

イツセイさんが助けにきてくれました！凄く嬉しいです！

でもちょっと遅かったみたいです。

くっ！体が痛い……

この時に直感でわかりました。

ああ、私は死ぬんだと。

まだ死にたくない。まだお兄様と過ごしたい！イツセイさんと遊びに行きたい！もっとイツセイさんを知りたい！

……でも無理みたいです。

そうだ、お兄様にまだお礼とお別れを言ってませんでした！

体が痛むなかお兄様に念話を送ります。

最初は普通に、段々と慌てぎみに、最後には焦りが伝わってきました。

お兄様、探してくれてるのでしょいか？

ふふ、やっぱりアーシアは幸せです。

お兄様に私の気持ちを伝えて念話をきります。



その直後に何か私から抜けていきます。すると痛みが無くなり拘束も解けました。

でも、ははは、意識が遠くなりました。

かろうじてわかるのは私がイツセイさんに抱き抱えられてイツセイさんが泣いているところ。

イツセイさん、泣かないでください。私はイツセイさんが笑ってる所が好きなんですよ？

でも私のために泣いてくれる……………。

今まで生きてて良かった。

きつと…………次に目を…………覚ませば…………

ここで私の意識は無くなったのです。

アーシア side out



この後もしばらくイツセー君の独り言の様な叫びが続く。

……イツセー君、ありがとう。

まだ会って間もないアーシアのために泣いてくれて。

アーシア、君は良き友を持ったな。

もしやアーシアが好きになったかもしれないと言っるのは彼かな？

彼なら君を幸せに出来たかもしれないな。

君をもっと笑顔に出来たかもしれないな。

君をもっと

……許せん。

私はまるで虫けらを見るような目でイツセー君をみる黒髪の少女、  
墮天使を睨み付けた。

「……女、貴様がアーシアを殺したのか？」

「あら？貴方いたの？確かアーシアのお兄様だったかしら。」

まったくもって白々しい。最初からわかっていた癖に良く言う！



ただ一言だ。だがその一言で

「何か言ったの？もしかして恐くなった？でも許してあげ「行け…  
…」はっ？何言って……………え？」

全てが始まり

「え？きやあああああああああああああああああ！

わ、わた、私の美しい羽が！何で？どうしてっ！

あいつはただの人間じゃ！

え！嘘でしょ？な、何よその剣は！？何でそんなに魔剣や聖剣があるの！？

い、いや！やだ！」

全てが終わる！

「さあ、ご覧の通り、貴様が挑むのは無限の剣。剣戟の極地！  
恐れずしてかかってこい！！」

「い、嫌よ！私はまだ死にたくない！

まだアザゼル様に愛されてないの！シエム八ザ様に誉められて無いの！

だから、ね？こ、殺さないで！」

こいつ、アーシアを殺しておいて良く言う。  
まだ愛されてない？誉められて無い？

そんなものためにアーシアは！

「ならば！その夢を抱いて溺死しろ！！」

私は手を振り上げ

「ひっ！いい、嫌、たすけ」

ソドバレル  
フルオーブン  
「全投影、連続層写！！」

手を降り下げようとして

「待ってください！！」

剣群を放つのをとめた。

「……………イツセー君、何故止める？」

「……………俺に、俺にやらせてください！

一発で良いんです！一発でかいのをぶちこまなきゃ俺は気がすまない！！」

力強く言い放つ。



イツセイ君が立っていた。

「シロウさん、俺、行きます！」

そして一気に駆け出した。

「くっ！馬鹿にするなあああああ！！下級悪魔がこの私に勝てると思うな！」

いつの間にか羽が治っていた墮天使が吠える。

『Boost!!』

イツセイ君の籠手から再び音声が流れ、彼に流れる力が増した！だがまだ墮天使には届いていないだろう。先ほどの力の爆発は何だったと思ってしまうほどの弱々しさだが

『Boost!!』

再び音声が流れる。そしてまた力が増した！それも先ほどよりも多い！

「へえ！ただの《龍の手》だと思ったけど違うみたいね。でも！」



堕天使が光の槍を形成してイツセイ君に投げつける。

不味い！

そう思った時には

「ぐっ!？」

イツセイ君の太ももに突き刺さっていた！

「ぐああああああああ!?!」

絶叫をあげるイツセイ君。それもそうだろう。きっと彼はろくに戦闘経験がある訳では無い。

それは動きを見れば直ぐにわかる。

だがな！

「ぬがああああああああ!」

その程度で挫けるような思いなら私がこの場を譲るわけがないだろうが!!

ぐしゅり!

イツセイ君が少しづつ槍を引き抜き始め

「こんなのアーシアが受けた苦しみに比べたら何だっただんだ!!」

せつかくシロウさんに譲って貰ったんだ!!」

負ける訳には!いかねえんだよおおおおおおお!!」

そして一気に引き抜いた!

今まで蓋をしていたものを引き抜いたせいか血が溢れんばかりに流れ出す。

イツセー君は痛みのみあまり膝をついた。顔は涙と涎でぐしゃぐしゃだが

「ぐううう、うおおおおお!!」

目は死んでいない!

「へえ、大した物ね。でも所詮そこまで!いずれ貴方は死ぬわよ?」

「……………からなんだよ。

だから何だっただよおおお!!」

それがどうした!死にそうだから何だ!

こんな程度でダメエをぶつ飛ばせるなら!」

ぶるぶる震えながらではあるが少しづつ立ち上がり

「安いもんだろうがあああああ！！」

完全に立ち上がる。

先ほどから流れ『Boost!』という音声によりイツセイ君の  
ちからはさぞかし増しているだろう。

単純な魔力だけならば既にその墮天使を越えているだろう。  
だがまだ、まだ何かが足りない。  
まだ中にとどまっている状態だ。

「……………アシア、絶対あいつをぶっ飛ばしてやるから！だから  
見ててくれよ！」

シロウさん、次で決めます。俺の全てを込めます。  
もしかしたら俺は死ぬかもしれない。だから！  
見届けてください！俺の全力をつ！！！！！」

『Explosion!!』

先ほどの淡々とした機械音と同じ音声。だがその時はとても力強か  
った。そして籠手が、籠手に埋まっている宝玉がまばゆいばかりの  
光を放つ。

そして彼の力は

「あ、あり得ないわ！何で？さつきまであんなに弱かったのに！な、何でよ、私の力を超えてるじゃない！

お、おかしいわよ、この力は中級、いや上級悪魔のそれ……………」

爆発的にはね上がった！

一歩一歩を踏みしめるように歩くイツセー君。歩く度に足から血があふれ、口からも血が流れる。それでも止まる事なく歩き続ける。

「嘘よ！こんなの嘘！私は究極の治癒を手に入れたの！至高の存在に至ったのよ！？アザゼル様に愛される資格を得たのよ！貴方のような下級悪魔に！」

墮天使が再び槍を形成して投げつけるが無造作に放ったイツセー君の横凧ぎの拳により難なく消し飛ぶ。

「い、いや…！」

劣勢と悟るや否や一目散に逃げ出す墮天使だが

「逃がすかよ！」

素早く動いたイツセー君に腕を掴まれ

「吹っ飛べ！くそ天使がああああああああああ！」



## 九話（後書き）

どうでした？長くなりそうだったんでとりあえず一区切り。

次回は一卷エピローグみたいな流れっす！

代々よめた人もいますと思いますがまあそれは次回で！

感想など待ってるんでよろしく願います！

ちなみに、原作の言葉をちよいと使っただけな部分がありますが手抜きじゃないとすよ？ほ、本当ですよ！？

## 十話（前書き）

も、もうすぐで一巻終了です。

今回はイッセーの戦闘の後のお話です！

## 十話

アーシア

私がこの世界に来て出来た、家族、

私にとって友であり妹であり娘であった少女

彼女の笑みは幸せがいかなるものなのかを物語っているように無邪気で、奇麗で、見ていると嬉しくなる、そんな笑顔であった。

アーシアは今眠っている。

安らかな寝顔

苦しみなどなくただ安心したような微笑みを浮かべている。

起きているんじゃないか？と思われるような表情ではあるがアーシアが目を覚ます事はない。

私が間に合わなかったからだ。

私が教会に行かせてしまったからだ！

私が……私はっ！

私はまた1を護れなかった！！

直接的な原因である墮天使は気絶している。死んではいないことは



見てわかった。

この墮天使を倒したのは今私に支えられ立っている兵藤一誠、アシアの友達であるイツセー君だ。

真っ直ぐな少年だ。

真っ直ぐで心が強い少年だ。

彼もまたその身に《神器》を宿していてその力は異常の一言につきる。

はつきり言ってしまうえば彼自身の力は大したことない。

特別鍛えていたようにも何か武をたしなんでいたわけにも思えない。

だがこの《神器》は大したことない筈の力を爆発的に増加させた。時間にして10秒。

10秒毎に彼の力は増していき最終的には墮天使を一撃にて沈める力を発した。

墮天使を倒しはしたが無傷とはいかず非常に危険な状態である。

話の流れで彼が悪魔であることはわかっている。

そして彼が受けたのは光の槍

悪魔にとっての致命的な弱点を受けてしまった。

その光は毒のように彼を蝕み、いずれ死に誘うだろう。

だが彼は死なせない。

アーシアの友達を死なせてたまるか！

アーシアを護れなかった私が出るせめてものこと。

以前の私には出来なかったことだが今の私にはその術がある。

「トレス・オン  
投影開始」

かつて私がああ戦争に生き抜き、パートナーであった騎士王に返した鞘

「《全て遠き理想郷<sup>アサアロン</sup>》！！」

私はイツセー君を寝かせ《全て遠き理想郷》を彼にのせた。

本来の使用用途とはまるで違つがこの鞘は所持者を何からも護り抜く例え死であろうともな。

みるみる内にイツセー君の傷は塞がっていき今は傷どころか痕すらわからない。

服の破れと血でここを怪我をした程度にしかわからないだろう。

「シロウさん、もう大丈夫です。ありがとうございました。」

そう言つて立ち上がる彼を見ながら私は《全て遠き理想郷》を戻す。

そしてイツセー君が体の調子確かめるようにストレッチをしていると背後から気配がして声がかかった。

「イツセー君、墮天使を倒したのかい？」

振り向くとそこにはイツセー君同様いたるところボロボロになった少年がいた。

「おせーよ色男」

イツセー君が返事を返したところを見るに彼も悪魔で仲間なのだろう。

そして仲間は彼一人ではないようだ。

「イツセー、良くやったわ。」

ふふふ、墮天使を中級とはいえ倒すなんてやるじゃない。」

さらに後から3人の少女が現れた。

声を発したのは紅髪の少女

続くように黒髪でその髪を後で纏めた少女と小柄で白髪の少女が現れた。

彼等は互いの状態を話し合ってからふと私を見て

「それでイツセー。彼は誰なのかしら？見たところ人間の様だけど。それに今更だけど龍までいるわね。」

龍使い（ドラゴンライダー）？」

「龍のことは俺もわかんないですけどこの人はアーシアのお兄さんでエミヤシロウさんです。」

その、アーシアを助けに来てくれたんです。」

「……………そう、あの娘のお兄様なのね……………」

周囲の空気が沈んでいく。

皆やるせなさを感じているのだろう。

何よりアーシアの家族である私がこの場にいるのだ、仕方ないと言えは仕方ない。

「ミスターシロウ、ごめんなさい。

私達が間に合わなかったばかりに貴方のご家族を死なせてしまいました。」

私はリアス・グレモリー

ここにいる悪魔の主です。」

この紅髪の少女が主人か。確かに気品はあるし力もある。

彼女なら先ほどの墮天使も簡単に葬ることが出来るだろう。

「気にするな、とは言えないがあまり気に病まないでくれ。

私はむしろ感謝している。アーシアを救えなかったのは事実だが君達はアーシアのために闘ってくれた。」

アーシアのためでは無かったとはしても結果的にそうなったのだから言わせてくれ。

ありがとう」

「そう言っ頂けると助かりますわ。

それでご相談なのですけどその娘、アーシアを転生、生き返らしたくはありませんか？」

「「！！！！！！」」

私とイツセイ君は驚愕した。

生き返るだと！まさかそんなことが可能なのか！？

「それは本当かね？本当なら願ったりもないが……………」

「ええ、本当です。ただそれにはやる必要があります。

この話をする前にそちらを先に済ませて構いませんか？」

「構わん。どうかアーシアを頼む。」

わかりました、そう言っリアス君は気絶している墮天使向かって歩きだした。

そして

バシャアア！

魔力で生み出したであろう水を墮天使にぶっかけた。

咳き込み目覚めた墮天使と何か会話をしているようだ。

しかし会話の最中に乱入者が現れる。

「おやおや〜ん？もしかして大ピンチってやつ？」

あの少年言語不能神父が現れたのだ。

こちらも会話を始める。

「またもや意味不明な言葉の羅列を並べているがかるうじて逃げようとしてるのはわかった。だがな」

「みんな齒磨けよ！ばいちゃ！」

「逃がすわけなからう！」

「セイバーアアアア！」

「きゆうううう！！」

セイバーが神速の動きで近づきその腕を一閃！

ズバアアア！！

「な、なん！がああああああああ！？」

周囲の物もろとも神父を切り裂く。

体を切り裂かれ吹き飛ばされながらも神父は空中で体制を立て直し  
両の足で確りと着地した。

「ぐううううう！いてえ、いてえよおおおお　　つ殺す！！  
テメエ何俺様に傷つけてんの？マジ殺しますわ、死刑ですよ！斬つ  
て斬って斬りまくって最後に頭を踏み潰してやるあああああああ  
あああ！」

激昂し向かってくるが

「遅いな」

既に私は貴様の後ろにいるのだよ！！

「っ！！うっぜえ！」

ガギンツ！！

手に持った干将・莫耶で斬りつけようとしたが神父は懐から黒鍵の  
ような剣を取り出し咄嗟に防がれた。

「ほう。小僧、その歳で良くそこまでの力をつけたな。

今まで何人をその手にかけた？」

ぎりぎりとはげり合いをしながら神父に尋ねる。全力では無いと  
はいえ本気で打ち込んだ。それをこの歳の、まだ少年に止められと  
は思わなかった。





つばぜり合いの状態から神父が力を込めた事により弾かれ私と神父の間に距離が出来た。

「ひゃっはああああ！距離がひらきましたよお？」

さあお待ちかね、フリード君のショータイム開幕だああああああ  
！」

一気に距離をつめ上段からの袈裟斬りを放った。

速い、確かに先ほどより速いがそれでも

「遅い」

上段から迫る光の剣を左手の干将で滑らせるようにいなす、そして右手の莫耶の束尻を体制を崩した神父の顎に叩き込む。

「があっ！！！！！」

ぺっ、くそがああああああああ！！」

がむしゃらな横薙ぎの一閃。

それを殴った勢いを利用して回転し下から斬り上げた干将・莫耶の両剣で弾き飛ばす。

「動きが単調、さらには握りが甘い」

カランと床に神父の剣が落ちる音が聞こえる。

「ちい！これでもくらえや！」

ドンドンドンドン！

神父が銃らしき物を取り出し数発発砲する。  
瞬時に弾目掛けて両腕を交差させ

キーンキーンキーンキーン！

振り抜き弾を弾く。その際干将・莫耶を手放す。

「思考が浅慮」

発砲直後の隙を見逃さず懐に入り込み肘を鳩尾に叩き込む。

「がはっ!？」

くっそ！何なんだよ！当たれこらあ！」

「当たれと言われて当たる馬鹿がいるのかね？」

銃口が私に向くが刹那に掬い上げるように手首を掴み上げた。

ドンドンドン！

上を向いた銃口は勿論上に弾を発射した。

私は手首を掴んだままその場で神父に背を向け腰を落とし、その落とした腰に神父を乗せる様にして

「せいっ!！」

渾身の力で投げ飛ばした。

神父はまたもや空中で体制を立て直し地面に着地するが

「小僧、しゃがんだほうが良いぞ？」

さもなくば」

「はあ？あんた何言っちゃっぐああああああああ！？」

「私の剣で斬られる、と言おうとしたのだが遅かったようだ」

銃弾を弾いた際に放った干将・莫耶が神父を切り裂いた。

これは干将・莫耶が互いに惹かれ合う性質を利用したある種のトラップみたいなもの。少しでもタイミングがずれれば意味は無いが上手くいったようである。

「ぐっ、あああ！！いてえ……………ざけんな！

何なんだよテメエは！強そうとは思ってたけど強すぎんだろ！！」

「私か？

私は正義の味方だ。」

神父の問いに簡潔に答えた。

それにしても私は自分で思っていたより頭にきていたらしい。墮天使はイツセー君に譲ってしまった故に当たり所が無かったが

「はあ？正義の味方あ？

ひやははははは、あんたばっかじゃねーの！！

今時正義の味方なんて流行らないでござるよ〜！！」

「ふむ、私を笑うのは構わないが」

丁度良い所にいたな！

「対価は支払って貰うぞ！」

今の私は短気だからな！

「ああ、安心すると良い。殺しはしないさ、何せ私は正義の味方だからな！」

S i d e o u t

イ ッ セー S i d e

………強い、圧倒的だ。

相手はあのクソ神父のフリードだぞ？

俺と木場、小猫ちゃん3人を相手に立ち回るやつだぞ？

シロウさんは何者何だ？

さっきは自分で《正義の味方》って言ってたけどそれと関係あるのか？

あ、またフリードの奴飛ばされた！

「なあ、木場あ」

「何だい？」

「シロウさんって人間だよな？」

「その筈だよ。悪魔の力を感じないし天使の力も感じない、ましてや墮天使も、ね。」

だよね〜人間だよね〜。まあフリードも十分人外だと思うけど

「なあ木場あ」

「何となく言いたいことはわかるよ。多分僕じゃあ彼には勝てないと思う。」

「お前も無理か！」

「僕もまだまだってことだよ。」

というより彼が異常なんだと思うよ？

人間にして悪魔を超える身体能力にあの戦闘技術。多分まだ何か隠しているだろうし、彼の龍もいる。勝てる人がどれだけいるのかって話だね。」

シロウさんって人間なんだろうか。

これじゃあ本当にスーパーヒーロー、《正義の味方》じゃん。

つーかまだ何かあんのかよ！

あ、でも考えて見ればどこからともなく剣を出してたし、クソ墮天使の時もたくさんの剣を出してたな。どんくらい強いかは良くわかんないし、あの時は必死だったから気にならなかったけどもしあの剣群が襲ってきたらと思うと  
無理無理無理無  
理無理無理！！！！！！

絶対死ぬって！

しかもまだ龍もいるとかどんだけ反則なわけ！？

いや、まてまて。きつと悪魔にはシロウさんより強い人だっている筈だ。木場は悪魔以上とか言ってたけど部長や朱乃さんなら知っているかもしれない。

俺は部長達を見てみた。

「「……………」」

部長達は目を見開き固まっていた。

あら？こんな部長達を初めて見た。驚く部長達も可愛いです！

じゃなくて！！

「部長！あ、あのあの！」

「は！？な、何かしら？」

「シロウさんより強い人ってどのくらいいるんですか？」

「……………多分少ないんじゃないかしら。今の彼でも上級悪魔じゃないと歯がたたないと思うわ。」

マジかよ！生身の人間で上級悪魔レベル！？

「むしろ私が聞きたいわよ。  
ねえイツセー？彼って何者？」

「……………アーシアのお兄さん？」

「それはわかってるの！本当に人間かってことよ！」

「い、いや俺に聞かれなくても！？」

あ！もしかして魔法使いとか勇者とか英雄だったりして！」

ははは、そんなわけ

「……………あり得るわね。」

ウソオオオオオオオ！！！！？？

俺適当に言っただけなんだけど！？

「過去には一人で千とも万とも言える大軍を相手にした者もいたと聞くわ。あながち間違えじゃないかもしれないわね。」

部長が考えこんでしまった。

シロウさん貴方は本当に何者なんですか？

ワタクシ、アーシアが生き返ったら心配でなりません。

泣かせるつもりはありませんし泣かす奴は俺がぶっ飛ばすけど仮に、  
そう仮にアーシアを泣かしてしまったら

「があっ！ぐぼあ！ち、ちくしょう！や、やめがはっ！」



「先ほどの威勢はどうしたのかね？  
くくく、まさかもう終わりではあるまい！」

「「「「  
.....」」」」

うん、死ねるな。

絶対にアーシアは泣かせないようにしよう。そう決意したのだった。

あ！フリードが気絶した！

イツセイ side out

ふう〜良い八つ当、では無く良い仕事をした。  
アーシアを殺したことを許す訳でもつもりも無いが先ほどよりは落ち着いた。

パンパンと手のひらを叩きながらイツセー君達の元に戻り

「ご覧の通り神父は黙らせた。後は君達悪魔に任せよう。」

「「「「」」」」」

「何故黙る？私が何かしたか？」

「……………シロウさん」

「イツセー君、何かな？」

「シロウさんは人間ですか？」

いきなり失礼だな！私はいたって普通の人……………間……………？

私は人間なのか？生物学上は人間なのだろうが能力は英霊だ。  
まあオーデインは人間と言っていたしそれで良いだろう。

「勿論一応人間だ。多分……………」

「一応って何ですか！つーか多分って何!？」

「まあ色々あるのだよ。」

「色々つて……………」

まあ色々だ。流石に説明は出来んだろうしなあ。

「まあ神器の力だと思ってくれたまえ。」

「ではミスターシロウ？先ほどの神父を倒したのも神器の力なのですか？」

「いや、あれは私の自力だが。何か問題でもあったかね？」

「……………」

むう、再び黙ってしまった。

確かに私の力は人間からすれば異常かもしれんが悪魔にもこれくらい出来るのはいるだろう？

「人間で出来るから凄いですよ！」

……………イッセー君、心を読まないで欲しい

「何となくわかりますわ」

リアス君もかね

まったく

「意味がわからん」

「あなたがよ!」「シロウさんです!」「貴方のほうが僕はわからない」「ふふふ、シロウさんがですわ」「……皆さんに同意です」

全員につっこまれた。何故だ?

\*

「ではアーシアを転生させます。ミスターシロウ良いんですね?」

私はこれに「ああ、よろしく頼む」と答えた。

アーシアは今から悪魔に転生しようとしている。

何故悪魔に転生なのかはリアス君が言ったアーシアを生き返らせる、の説明を受けたからだ。

私が神父を黙らせた後、彼女達はまず堕天使の処理をした。

その時ひと悶着あったのだが最終的にはリアス君の魔力で完全に消

滅した。

堕天使が消えるとアジアから奪われたらしき神器が出てきて行き場を失った様に宙にとどまっていた。(死因は確認済)

ちなみにそのひと悶着の時にわかったことだがイツセイ君の力は《赤龍帝の籠手》と言って《赤龍帝》という強大な力を持った龍が封印された《神殺し》と呼ばれる神器の1つらしい。

能力は10秒毎に力を倍化する。

極めれば神すら殺すことが出来るようだ。

恐ろしく凶悪な神器である。

堕天使が消滅した後、やっとアジアの話に移った。

どうやら悪魔の力、《悪魔の駒》を使用しリアス君の下僕として転生できるようだ。

そして話は始めに戻る。

正直悪魔と言うところに何も思わなかった訳では無いがアジアには生を謳歌して欲しかった。

嫌われるのも恨まれるのも覚悟のうち、これは私の我が侘なのだから。

そしてアーシアを悪魔に転生させる儀式が始まった。

リアス君の体を紅い魔力が覆う。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。いま再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が《僧侶》として、新たな生に歓喜せよ！」リアス君の持つ駒が紅く発光しアーシアの胸に沈んでいく。同時に神器も彼女の元へ戻っていった。

完全に同調したのを確認したリアス君は魔力の波動を止めた。

私はただアーシアを見つめる。

そして

「あれ？」

アーシアが目を開けた！

二度と聞けないと思った声が聞こえた！

「あれ？あれ？私は確か……………あれ？」

アーシアは状況が理解できていないようだ。

だが構わない。今はアーシアの生を喜ぼう。

そして

「リアス君」

「なんででしょうか？」

彼女の名前を呼び私は片膝をつき頭を垂れた。

「ミスター！いきなり何を！？頭を上げてください！」

皆が私の行動に驚く中、私は言葉を発した。

「今回の件、誠に感謝する。」

私の家族を救っていただいた、君は私達の恩人だ。」

「故に」と言葉を繋ぎ私の誓いを言った。

「君達が困った時、私が力になろう！」

君達に危険が訪れた時、私が剣に、盾になろう！」

君達が望む限り、私は君達の味方でいよう！」

私の名にかけて私はこの誓いを守る。」

場を静寂が支配する。誰も言葉を発しない中、リアス君は真剣な表情をしていた。

しかしその表情はふと笑みに変わり

「わかりました。貴方の誓い、確かに私リアス・グレモリーが受け

取りました。

貴方の力添え感謝致します。」

こうして誓いはたてられた。

「しかしミスターシロウ、それなら貴方も私の眷属になりませんか？  
貴方ほどの人物なら大歓迎なのですが」

思わぬ所で勧誘を受けるが

「それは遠慮しよう。」

「理由を聞いても？」

「だって」と言ってから少し間を置く。そして私は答えた。

「私は、正義の味方だからな。」

皆が納得した様に笑ったのだった。



## 十話（後書き）

思ったより長くなったので一巻エピローグは次回で！

## 十一話（前書き）

これで一巻は終わりです！

とりあえずどじろどー！

## 十一話

イツセー side

今日は良いことがあったぜ！

昨日の闘いを終え、シロウさんのデタラメさを知り、そしてアーシアが悪魔としてだけど生き返った！

そして

「イツセーさん。授業も終わりましたし部室に行きましょう！」

「おう！じゃあちょっと待っていてくれ、今かたずけるから。」

そう、アーシアが編入生としてこの駒王学園に来たんだ！

アーシアから聞いたんだけど元々学校に通うために日本に来たらしいけど丁度良いので俺達がいる駒王学園に編入したらしいのだ。

この時ほどシロウさんに感謝したことは無かっただろう！

日本に来てくれて、日本の学校を選んでくれて本当にありがとう！  
ぞいます！

おかげで俺はアーシアと出会えました！もうね、アーシアちゃん可愛いすぎ！シロウさんには悪いけど妹が出来たみたいでお兄ちゃん頑張っちゃおうよ！

え？何をつて？

そりゃあ色々だよ、色々ね。

まあとりあえず部室に行くとしましようか！

アーシアにとっては初部活だし俺が色々教えてあげなきゃな！

俺はアーシアと共に部室に向かった。

\*

部室に着いて扉を開けると

「やあ、遅かったな。君達以外は既に集まっているぞ。」

「え？な、何でシロウさんがここにいるんですかああああ！？」

スーツ姿のシロウさんがソファに腰掛け優雅にお茶を飲んでいた！

いや、アーシアちゃん？お兄様！とか言って抱き着かないでよ！まずは何でシロウさんがいるかってことに疑問を持とうよ！

「何故も何も私は明日から駒王学園の教師として働くことになったからだが？」

アーシアを抱き止めながら俺の疑問に答えてくれるシロウさん。

え？マジで？シロウさん教員免許持ってたの？

「シロウさん教員免許持ってたんですか？」

「ここから先は私が説明するわ」

シロウさんとお茶を飲んでいた部長が話に入ってきた。

「実は昨日シロウに相談されたのよ。〴〵何処か良い住居と職はないかね？」ってね。  
それで何が出来るか聞いたらびっくりよ、何でも出来るじゃない。だから私の執事はどう？って聞いたら」

「断固拒否する！」

「って言われちゃったから教師を紹介したの。イツセーの気になっ

ている教員免許も午前中に取らせてきたわ。」

シロウさん執事に何か嫌な思い出でもあんのかな？本当に嫌そうな顔してたぞ……………」。

「経緯はわかりましたけど教員免許って半日で取れるもんじゃないでしょ？」

「そこはグレモリーの力でぐり押しね」

グレモリー、マジでパネエ……………」。

「イツセー君、私は明日からだがアーシア共々よろしく頼む。」

「あーはい！こちらこそよろしくお願ひします！」

シロウさんの挨拶に俺も頭を下げた。

まあ良いが、シロウさんがいるのは俺も嬉しいしアーシアも嬉しいだろうし。

「後イツセー。彼等はあなたの家の近くに住むからよろしくね。」

「そうなんですか？わかりました。何が出来るかはわかんないですけど任せました！」

マジか、俺んちの近所か。こりゃマジで楽しくなりそうだな！

こうしてシロウさんとアーシアは正式に駒王学園の関係者になり、俺達の仲間になったんだ。

ちなみに家に帰る時アーシアとシロウさんの3人で帰ったんだけど家につくと

「何じゃこりゃあああああああああああ！！！！！！」

俺の叫びがこだまする！

シロウさんも頭を抱えていることから場所以外は聞いて無かったらしい。

俺の家に何かあった訳ではない。問題は俺の家の左隣四軒ほどだ！

その四軒が無くなっていて和風の武家屋敷みたいのが出来ていた。しかも表札には「エミヤ」とカタカナで書かれている。

「はあ」

シロウさんがため息を吐き

「……どうやらここが私達の住居らしい。明日挨拶に行くが、両親によろしくと伝えてくれ。

私は少々疲れた。ではまた明日に会おう。」

そう言っつて屋敷に入っつて行つた。

「イツセーさん、それでは私も失礼します！  
ふふふ、でも良かったです。これで好きな時にイツセーさんと会えます！」

それでは！と言っつてアーシアも屋敷に入っつて行つた。

俺はと言っつと啞然と屋敷を眺めていた。

グレモリー、マジでパネエ……………。



十一話（後書き）

いかがでした？

今回はシロウさんの職と住まいを決定しました！

やっぱり活躍グレモリーパワーです！

## 十一・五話（前書き）

はい投稿です！

活動報告で書いた通りこちらを更新しました！

## 十一・五話

今日は私の初出勤の日。

つまり昨日、イツセー君について帰宅した翌日である。

昨夜は驚いた。驚きを通り越して呆れたものだ。

確かに相談したのは私だ。何処が良い住居はないか」と聞いたのは私である。

だがあれは何だ？

リアス君は「大したものは用意できないわ」と言ったが十分に大したものだ。

一般家庭四軒分の敷地に建つ平屋の純和風の屋敷、中庭があり池まである。流石に私が育った衛宮の家の様に道場や離れ、土蔵まではない

訳では無かった。

屋敷に入ってまずしたことは当然間取りの調査。

解析を駆使しても良かったのだが自分達の住む所くらい己の目で見たかった。

そして見つけてしまった。

………地下への階段を。

恐る恐る降りてみるとまず客間らしき部屋が連なる通路が現れた。まるで旅館の廊下のようなようである。

部屋は10部屋ほどありこの時点で私は頭痛がしてきた。

通路を進むとまた階段を見つけたので降りてみるとそこには何も無い、ただ膨大な広さの空間があった。

ごく丁寧に床は全て畳貼りで『切磋琢磨』『一撃必殺』など書かれた掛軸や刀や槍、鎧などの置物がある。

何でさ………。

意味がわからない。分かるがわかりたくない！

外観だけでも頭を抱えてしまったのに、これは何だと言うのだろうか。

あれか？私に弟子でもとれと言うことか！そうか？そうなのだな！  
断固拒否する！

はあはあはあ、失礼。些か興奮したようだ。

ともかく広間、まあ道場と呼ぶ事にしよう。道場を進むとさらに階段があり開き直った私は降りて行くと所せましに柵のある空間に出

た。

何も置かれていないようではあるがその広さは膨大で物置や土蔵と  
言うより倉庫である。

進んで行くと部屋が四部屋あり一部屋開けて見ると何故か鍛冶場が  
あった。嫌な予感がして次を見ると似たような内装ではあるが彫金  
などを施す道具が揃っていた。

みるのも嫌になり始めたがさらに隣を見るとそこは鉄の扉の引き戸。  
何処か倉庫などにありそうな見た目で何となく予想はついたがとり  
あえず開けてみるとそこは巨大な冷凍庫と冷蔵庫だった。

そして最後の部屋を見て私は

「私に何をしろと言うのだああああああああああああああああ  
ああ!!!」

叫んだ！

中には壁一面見渡すかぎりの液晶画面。所せましにある機材に人が  
座り作業できる机と椅子。そこにはパソコンらしきものが常備され  
ていてまるで特撮ヒーローの司令室、秘密基地のようである。  
画面に映る映像から家の周囲を映す監視カメラであることがわかっ  
た。

私は無言でこの部屋の電源を落とし来た道を戻ってこの日は寝て今  
に至るのだ。

「はあ」

スーツに着替え、朝食と昼食の用意を行いながらため息を吐く。

「お兄様？いかなさいました？」

隣で手伝いをしてきているアーシアが話しかけてきた。

いかな、アーシアに心配などさせてどうする。

「いや、何でもない。ただこの家のことを考えていただけだ」

その一言でアーシアもわかったようだ。

「ああ、確かにあれは凄かったですよね。」

「はあ」

私達は同時にため息をついたのだった。

\*

私は一人で家を出た。

アーシアも一緒に行くと言っていたが教師は生徒よりも出勤が早い。普段なら良いかもしれないが今日は私は初出勤なので挨拶などもあ  
るし早めに家を出たのだ。

学校に到着すると一人の女生徒が校門に立っていた。

「おはようございます。あなたがエミヤシロウさんですか？」

「そうだが君は？」

「申し遅れました。私は支取 蒼那、この学園の生徒会長をさせて頂いています。」

本日はエミヤさん、いえ、エミヤ先生の案内を承りましたので僭越ながらここでお待ちしておりました。」

「そうか、朝早くからすまない。それと案内感謝する。ではよろしく頼む。」

簡単に挨拶を終え私達は校舎に入った。

支取君の説明は実にわかりやすく直ぐに理解できて案内は終わった。

「では学園の案内は以上です。」

後は教員の方から説明があると思いますので私はこれで失礼致します。」

「案内感謝する。」

それはそうと君は私のことをどこまで知っているのかね？」

そうして去ろうとする支取君にお礼を告げ、気になっていたことを聞いた。

彼女からは悪魔の気配がする。

別に何であろうと構わないのだがどれだけこちらの情報が行ってい

るのは気になる所だ。

「エミヤ先生のことですか？

え、質問の意味がわかりかねます。」

「隠さなくても良いさ。君が悪魔だと言うことはわかっている。」

「なるほど、流石ですね。

おっしゃる通り私は悪魔で、本来の名はソーナ・シトリーと申します。

あなたのことはリアスより聞き及んでいますので彼女の知ることと大差はありません。」

なるほどな、リアス君とあまり大差はない知識、つまりはリアス君とはそれなりの関係があると言うことか。

ならば支取君とも友好を結んでおいて損は無いだろつ。

「質問の答え感謝する。

ああそつだ、困ったことがあれば言いたまえ。私が出る限りで力になろう。」

「ふふ、リアスの言う通りの人物のようですね。

わかりました、何かあればご相談させていただきますね。では私はこれで」

そつして支取君は去って行った。



さて、これから私の教師生活が始まるのか。  
くく、柄にも無く緊張しているようだ。

まあ緊張しても仕方がない。気合いを入れて行くとしようか！

「失礼する！」

私は一步を踏み出した。

\*

「今日からこのクラスの副担任を勤めさせてもらうエミヤシロウだ。  
担当科目は英語、と言っても基本的に私は授業をしない。君達を教  
えるのは今までと変わらずで、私はその助手だ。」

後は君達の相談相手くらいだがこれからよろしく頼む。」

今の言葉でわかる通り現在ホームルームでの挨拶を行なっていた。

「マジすか！シロウさん俺らのクラスに来たんすか！」

「イツセー君、一応学校では先生をつけるように。」

「あ、すみません！」

何故かイツセイ君のクラスに配属され

「学校でもお兄様と一緒にいられるんですね！」

ああ主よ……………痛っ！」

「アルジェント君、君も学校では先生をつけたまえ。私もここではファミリーネームで呼ばせて貰うのでね。」

アーシアもいたりする。

これはあれか？リアス君が仕向けたことか？

まあ知り合いがいるのは確かにやりやすいから良いがやり過ぎではないか？

昨日アーシアが編入したばかりで翌日には私が配属、普通ならあり得ないことだ。

「はーい！エミヤ先生質問です！アルジェントさんとはどんな

」

まあ良い、これからここで頑張っていくとするか！

十一・五話（後書き）

とりあえず今回は家のことと初出勤です！  
次回から二巻の内容でいきますので！

## 十二話（前書き）

今回は短編的な感じですよ！

## 十二話

私達がこの屋敷で過ごすようになって少しばかり時間がたつ。

私もアーシアも共に学園になれ中々に有意義な時間を過ごしていた。

最近だがイツセー君が早朝トレーニングを開始したようでアーシアもよく手伝いにでかけている。

ふむ、鍛えることは良いことだ。私も彼くらいの時から本格……的  
………思い出すのはやめておこう。今でも思い出さたくない……  
……。

まあ私のことは良い。今はイツセー君だ。  
彼の力は基礎があればあるほど強力になる。  
今のトレーニングを考えているリアス君は流石としか言いようがないな。

イツセー君頑張れよ。私は応援しているぞ。

む？私は何をしているかだと？

それは勿論教師をして空いた時間は人助けだが？

世界を回らなくとも困っている人はたくさんいるのでね。

まあとりあえず学校に行くのでしょうか。

\*

今日も無事授業が終わり放課後になった。

私はオカルト研究部の顧問にもなったので部室に向かうと既にリアス君がいた。

だがリアス君は腕を組、何か悩んでいるようだ。

「やぁリアス君、どうしたのかね？何か悩み事なら相談にのるが」

「こんにちわシロ、いえエミヤ先生」

「今は放課後だ。シロウで構わん。」

「そう？ありがとうシロウ。」

いえね、最近悪魔稼業で不思議な願いが多くてね。新規のお客さんは大概その願いを言うからどうした物かと思ってね」

そう言っつてリアス君はまた考え込んでしまった。

不思議な願い？リアス君がそう言うのだから余程のことなのだろう。

「その願いとは何なのかね？」

悪魔稼業について私は特に出来ることはないが考えるくらいならできろぞ。」

「そうねえ、じゃあシロウも一緒に考えてちょうだい。」

実はね最近ある人に会いたいわって言う願いが急増しているのよ。

何でも暴漢から助けられたとか、車にひかれそうな所を助けられた、またはその光景を見て話して見たくなったとか。まだ他にもあるけどとりあえずこんな感じかしら」

「その願った人達への対応は？」

「流石にいきなり関係無い者を召喚は出来ないから、とりあえず会える確率をあげて契約完了になったわ。」

ふむ、何故か凄い身に覚えがある。

いや、ははは、まさかな。

「それでその人の特徴なのだけれど長身で色黒、髪は短髪の白髪で鋭い目付きの……………」

そこまで言っけてリアス君が私を見た、そして

「あ ……！シロウ、あなた！」

くっ！やはりそうなのか！

何故だ！特別また会いたいなどと思われることはした覚えがないぞ！！

「多分、それは私だな。記憶にある。」

「そう、なら手伝っ ……」

「拒否する！！」

当たり前だ！そんなのに付き合ってられるか！どう考えても面倒事にしかならんわ！

だが私はわかってしまった。この運命からは逃れられないと。

何せリアス君の目がまるでハンターのようになっていた。



「逃がさない」とても言っているよつな。

「逃がさないわよ」

実際に言われた……。

「私、あなたに職を紹介したわよね」

「ぐっ」

物凄い笑顔だ

「私、住居を手配したわよね」

「ぐぐぐ!」

ああ、あれを思い出す。

「あなた、私に感謝するって、そう言ったわよね」

「ぐぐぐぐ!」

あの赤い悪魔を……

「困った時は助けてくれるって、そう言ったわよね」

「ぐぐぐぐぐぐ！」

私はもう

「あなた、正義の味方、なのよね」

「ああああ！わかった！手伝えば良いのだろ！手伝えば！」

逃れられないのだなあ

「そう？悪いわね、協力感謝するわ  
じゃあ早速今夜からね。」

「………了解した。地獄に落ちろ」

「あら、私の実家はここで言う地獄よ？」

「く！そうだったな……………」

こうして悪魔稼業の手伝いが始まったのだった。

\*

ケース1

「私の料理食べて下さい！」

「了解した。」

ふむ、なかなか美味だ。しかしここをこうしてみてもどうかね？」

「え！本当ですか？どれどれ…。」

あ！凄い！さっきよりも良くなってる！

ありがとうございます！お礼のつもりがまた助けられちゃいました  
「！」

「いや、大したことではない。」

そのままでも十分美味いさ。君なら直ぐに気づけたはずだ。」

「そ、そんな／＼／

え、えとありがとございました！」

ケース2

「おい！俺とプロレスで世界を狙わないか？

お前が子供を助けるのを見たがあの身のこなしなら絶対成功する！」

「断るっ！！」

ケース3

「私と付き合って下さい！あの暴漢から助けられた時からあなたのことしか考えられなくて……。」

「すまないな、私は君とは付き合えない。

なに、君には直ぐにふさわしい人が現れるさ。何せ君はこんなにも

魅力的なのだから。」

「そ、そんな／＼  
でも私は！」

「今日の所はお茶と一緒に飲むで我慢してくれないかね？」

「……わかりました。でも私まだ諦めませんから」

「くくく、了解した。君に幸あらんことを」

#### ケース四

「正義の味方さん！ミルたんと悪者をやっつけるによ！！」

「き、きき、君一人でやりたまえ！むしろ君だけで十分だろ！」

「そっだぜミルたん！お前ならその拳で一撃だ！」

「イツセー君の言う通りだ！」

「によ？でもミルたん、一緒に闘いたいによ！」

「頼む、他をあたってくれ……………」

まだまだありますがこの辺で！

\*

「……………リアス君、私は何時まで手伝えば良い？  
ここ1週間毎日ではないか。」

かなり寝不足である。

「え？まだまだ続くわよ？この予定表見て、予約がたくさん！」

ぐ！まだまだあるではないか！



十二話（後書き）

いかがですか？

次回でライザーをだしたいと考えていますので！

ではまた次回で！



十三話（前書き）

投稿です！

今回話が少しは進むよ！

## 十三話

いつもと同じように授業が終了し放課後になったので私は自分の仕事を終らせ部室に向かっていた。

通りがかる生徒に挨拶をしながら向かい旧校舎に入った所で気づく。

「ふむ、客人か？それにしても人数が多いな。」

私は何も聞いていなかったことから悪魔関係だろうか。

まあ気にしても仕方ないし私がすることは変わらんだろうと思いきのまま部室に向かう。

そして中に入ると

「いい加減にしてちょうだい！」

リアス君が怒っていた。

流石の私もいきなりこの状況にはついていけなかった。すると朱乃君が近づいてきて

「シロウさん、お疲れ様です。

先ずはお茶はいかがですか？」

お茶は差し出してくれた。

「ありがとう。」

それはそうとこの状況は何なのかね？」

「実は

」

そうして朱乃君は説明してくれた。

なるほどな、簡単に言うと、リアス君の婚約者が来た。しかしリアス君は結婚したくない。相手は気にせずスキンシップ。リアス君キレた。

となるわけだ。

どうやらリアス君は結婚以前に相手が嫌いらしい。

「ありがとう、状況は理解した。

ちなみに君達は彼の事は？」

「嫌いです」「ニコッ

なるほど、皆に嫌われるとは中々出来ることでは無いな。

「そうか、なら私はアレを止めた方がいいのかね？」

「お願い出来ますか？私ではライザーを止められ無いので。」

「了解した。では行くでしょう。」

ああ、そうそう。お茶、ごちそうさま。相変わらず君の入れたお茶は美味しいな。今度私もお礼にご馳走しよう。」

そう言っつて湯飲みを朱乃君に渡す。

「ふふふ、ありがとうございます。  
シロウさんのお茶、楽しみにしてますわね。」

そうして私はリアス君達の元へ向かった。

私はリアス君と彼、ライザー君の間をわざと通りソファーに座って足を組んだ。そしてタイミング良く朱乃君が再びお茶を出してくれたのでそれを飲む。

これは私に注目を集める為にわざとやったことだ。

案の定皆が私に注目を集める。そして初めは驚いた様になっていたライザー君だが突然の乱入者に腹がたつたようで突っ掛かってきた。

「おいお前！今は俺とリアスが大事な話をしていたんだ！それを何邪魔している！  
しかもお前は人間だな？人間風情がいて良い場所では無い！さっさと出て行け！」

「ふん、大事な話、か。私には君がリアス君に邪見にされているようにしか見えなかったが？」

それに確かに私は人間だがこの教師でこの部活の顧問、さらに言えばこの子達の関係者だ。ここにいるのは当然だろう？

むしろ君がいるのが不自然では無いかね？君は悪魔でグレモリーの関係者かもしれないがそれだけだ。この生徒では無く、生徒の父

兄でも無い。君こそ出ていきたまえ。  
それともあれか？リアス君が君を招待したのかね」

そうしてリアス君を見ると

「あり得ないわね！」

そう言っただけでライザー君を睨めつけた。

「だ、そうだ。つまり君が邪魔なわけだ。いいから君が出ていきたまえ。ここは君がいて良い場所では無い。」

そう言っただけでお茶を飲む。

ふむ、周りは皆が驚いているな。  
私を知る者は普段の私とは違う態度に。  
知らぬ者は突然の乱入者、しかも人間がこの様な態度を取ったのだから。

ただ例外もいる。

一人はリアス君。彼女はむしろすっきりしたような表情だ。  
一人は朱乃君。彼女も同じようにすっきりした表情だ。  
一人は銀髪のメイド。彼女は冷静にこの場を見つめていた。

そして最後にライザー君。彼は

「ぶざけるなあああああ！」

人間風情が生意気な口を聞くんじゃない！  
貴様など俺がその気になれば一瞬で消し炭にできるんだぞ！」

ぶちギレである。

「それは怖いな。

だが人間風情と私をなめているようだが。」

パチンつと指をならす。すると

「人間も馬鹿にしたものでは無いと思うがね。」

私の背後に数々の刀剣が浮いていた。

普段なら言う起動キーではあるが別に言わなくとも投影は可能だ。  
ただやり易いから言っていたにすぎないのである。

「な、何だその剣は！？魔剣、聖剣、妖刀に神剣！  
くっ！こんなの相手にしてられるか！」

逃げた。情けない限りである。

まあ賢明な判断だ。彼の眷属と思われる女性達は顔を青くしている  
のだから。

リアス君達もこれを見たこと無いものは驚愕の表情をしている。イ  
ッセー君なんか震えている。何か嫌な思い出でもあったのか？

何故か祐斗君は複雑そうな表情だが彼も何かあるのだろうか。

まあとりあえずライザー君だ。  
彼は再びリアス君との会話を再開させたが次の言葉は完全に許される物では無かった。

「俺はキミの下僕を全部燃やし尽くしてでもキミを冥界に連れ帰るぞ」

そして室内に殺意と敵意が広がる。

あるものは震え、あるものは臨戦態勢を取った。  
そして室内を熱気が包むなか私だが

「アーシア、これを羽織っておけ。少しは楽になる」

アーシアに《聖マルティーンの聖骸布》を投影して羽織らせた。

彼女が一番抵抗力が低いであろうからな。

「あ、お兄様ありがとうございます！本当に楽になりました！」

私はそれに「構わん」と言って

「「そこまでだ（です）」

……………被った。

私と共に声を発した人物は銀髪のメイド。ただ彼女と違う所は

「ぐっ！ぐううう！」

私がライザー君の首元に聖剣を突き付け彼の周囲を刀剣で囲っていることぐらいだろうか。

私達の言葉で皆が臨戦態勢を解除するが私は変わらずである。

「おい人間！お前も剣を退かせ！」

ライザー君は、いやライザーは私に文句を言うが私は彼に言わなければいけないことがある。

「君は先ほど何と言ったかな？リアス君の眷属を燃やし尽くしても、だったか？」

生憎その眷属の中には私の家族がいるのだよ！君のその発言は私に対する宣戦布告と受け取るが？」

「だからどうした！人間の家族が死のうが俺には関係の、ぐっ！？」

「どうやら死にたいらしい。私は構わんぞ。貴様がここで死のうがな！」

聖剣を喉に押し当てた。まだ切れてはいないが悪魔にはこの聖剣のオーラはきついであろう。

「ぐううう！わかった、訂正する！これで良いんだろ！」



「ふむ……………」

些か心が込もっていないがまあ良いだろう。  
剣を引いて下がりながら

「ああ、そつだ。」

「何だ？まだ何かある、ぐあああああああああああ！！！」

周囲に展開していた刀剣を彼に射出した。一応聖剣は入れてないが  
全て概念武装が施された刀剣、いかに不死鳥とは言え痛いであろう。

「それは今回の件に対する罰だ。

次回があるのならば気をつける様に。次は遠慮なく聖剣も使わせて  
もらつぞ。」

周囲が沈黙するなか私は再びソファーに座りお茶を飲み始めた。

後はあのメイドに任せるとしようか。

\*

その後、話は進みリアス君とライザーの悪魔同士の決闘レーティングゲームをすること

になった。

それで今回の件は終了となりライザーは帰って行った。

そして現在だが

「いや、君エミヤ君だったかな？まさかうちの隣に引っ越してきた人がうちの馬鹿息子の通う学校の先生とは思わなかったよ！」

「いやいや、私こそ近所さんがイツセー君とは思いませんでしたよ。」

イツセー君の家にお邪魔していたりする。

あの後、アーシアがイツセー君の家に行きたいと言ったので、ではついでにと私も一緒に来たのだ。

簡単に挨拶を済ませてはいたが確りとはしていなかったからである。そして手土産を持って挨拶に伺うとイツセー君の父ぎみに誘われこうして酒を頂いたりする。

実はアーシアはしょっちゅうお邪魔していたらしく彼女を実の娘の様に可愛がる兵藤夫妻と意気投合してしまい今に至るのだ。

ちなみにアーシアだが夜も遅く風呂に入っていなかったのでここで

シャワーを借りている。  
隣のだから帰ればと思わなくもないがそこは母君が強引に入  
れしまった。

そしてイツセー君だがあの後さらにあつたライザーとの一悶着で彼  
の着属にやられたことがショックらしく二階から降りてこないで  
いた。

そしてしばらく父ぎみと談笑していると

「お、お父さ　　んっっ！ま、孫ができるわよ　　っっ！」

次の瞬間私は駆け出していた！  
まさかまさか！

そして浴場に向かう途中イツセー君が全裸で駆け抜けていった。  
……………決まりだ。

私はイツセー君の後を追いつ彼の気配がする部屋にはいると

「げええ！シロウさん！え、えとあれは！！」

イツセー君が慌てて着替えをしていた。

「イツセー君。」

「は、はい!!」

「見たのかね」

「え、えと、何をですか？」

「見たのかね？」

「え」とお

「見たのかね!!」

「さー！見ました！さー！」

ふむ、やはり見たのか。やはり決定だ。

「君は強くなりたい、そうだな」

「は、はい！強くなりたいです！さー！」

「では私直々に鍛えよう。何安心すると良い。多少ボロボロになるが強くなれるさ！」

くくく、さてどのようによい、鍛えようか……………」。

「え？今イジメルって言いかけたでしょ！

もしかしてシロウさん怒ってる？

ちょっと待って！あれは事故！わざとじゃない！事故なんだー！」

くくく！レーティングゲームまでの10日間、私が君をいじ、鍛えてあげようか！……！

十三話（後書き）

いかがですか？

私はライザー君が結構好きだったりします。良いやらねカメラですよね？

## 十四話（前書き）

うえっい、何とか今日中に投稿ですっ！

今回キャラが壊れてます！でも気にしないで。  
それがジエイクオリティ！

## 十四話

ライザー襲来翌日、イッセー君がアーシアの裸を見た翌日でもある。

私達は山に来ていた。

……学校をサボって。

生徒であるリアス君達はまだしも教師である私は不味いのでは？と聞いた所

「大丈夫よ。こんな時のために副担任で助手にしたのよ。ああ出勤日数についても心配しないで。顧問として私達に引率って事にしてあるから」

職権乱用どころか権力乱用である。

そして半強制的に連れて来られた。

まあイッセー君をイジ、ではなく鍛えると言った手前拒否するつもりも無かったがな。

そして現在であるがイッセー君は基礎トレーニングを行なっていて私は

「ふむ、祐斗君。



君は確かに才能があり努力も怠っていないようだが……」

迫りくる神速の剣をいなし、避け、受け、わざと作った隙に打ち込ませ

「ぐうっ!？」

蹴りを放つ

「まだ甘いな。君は剣とスピードに頼りすぎだ。」

力は抑えているので吹っ飛びはしないがそこそこ強めかつ急所に打ち込んだ故に

「ぐっ、ごほっごほっ!あ、ありが、とうございます。」

組み手終了だ。

「さて、祐斗君」

「は、はい、ごほっ」

「君のスタイルはある意味完成されている。だがそれだけだ。現状でも君の戦闘能力は十分に高い。しかしそれはその歳にしては、だ。」

私の様な戦闘スタイルの者にとって君は非常に闘い易い。何故かわかるかね？」

私の質問に祐斗君は少し考えてから

「すみません、わからないです。」

悔しそうに答えた。

「謝る必要はない、それを教えるのが今の私の役目だ。先ほと言ったと思うが君は剣とスピードに頼りすぎだ。つまりは剣に集中すれば君の攻撃は容易く防げる。

これはある程度力があるものなら誰でもできることだ。

ではどうすれば良いのか。答えは2つ。

1つは愚直なまでに剣技を鍛える。ただこれは直ぐには完成しない。時間をかけて作り上げていくものだ。

そして2つめだがこれは簡単だ。体全てを武器にすれば良い。直ぐに使える様に出来るとすれば足だな。特に足技はカウンターや奇襲に向いている。」

私の説明に成る程と頷き

「ありがとうございます。少し自分で考えてみます。」

ではと言って祐斗君は自分の修行に戻って言った。

さて、次は

私の午前はこうして過ぎていったのだった。

\*

昼食をいただき休憩をいれ、いよいよ

「さあ！イツセー君！イジ、訓練開始だ！」

「いやいやいや！何回言い間違えるつもりですか！？」

「すまない、つい本心が出そうになった。」

「本心つて余計質が悪いですよ！あれは事故ですって！部長も笑ってないで助け」

「ばしんっつっ！！」

私はあるものでイツセー君の頭に打ち込む。

「つつ~~~~な、何ですか！？いつたい何がおきたんすか！？急に頭に衝撃がああああ？」

ふむ、見えなかったようだ。

これは不味いな。祐斗君や小猫君なら今のは避けれた筈だ。これは鍛えがいがありそうだ。

「ってシロウさんが持っているのは何ですか！さっきまで持って無

「かつたでしょ!？」

「ん?これか?これは

「虎竹刀だが?」

私はこの手に持つ竹刀の名前を言うが

「虎竹刀ってなにいいいいいい!？」

何で?竹刀でその威力って何さ!小猫ちゃんのツッコミパンチ並に痛かつたんですけど!？」

でも吹っ飛ばないのは何故?

「っ!かつ!か束についでる虎がらぶりいいいいいい!!!?!?」

「イッセー君が混乱してしまった。

仕方ない、訓練開始前に説明をしてやるか。

「これはとある猛者が愛用していた竹刀で、その者はこれ1つで闘い抜いてきた。これはある意味伝説の竹刀だ!」

うむ、嘘は言っていない。あの虎はこれで闘い続けたのだから。

主に銀髪ロリブルマと……………。

「猛者って誰！？つーか伝説の竹刀？ある意味？わけわかりませんから！！」

仕方ない、竹刀の能力を教えてやろう。

「まあ猛者についてはどうでも良い。  
この竹刀の能力を説明しよう。」

「シロウさんから言っていてどうでも良いの！？  
つーか能力あるの！？」

「この竹刀の能力は」

周囲を静寂が支配した。いつの間にか集まっていたリアス君以外のメンバーも真剣な表情で私の言葉を待っていた。

む、少し言いにくいと言うしかないようだ。  
私は覚悟を決め

「この竹刀の能力は

ギャグ補正だっ！！」

「意味わかりませんからあああああああああ!?!」

ツッコミが入った。

む、意味がわからないだと!

ならば皆に聞くが良い!

「祐斗君!」

「おっと!」

私は彼に虎竹刀を投げ、祐斗君は見事にキャッチする。

「それを持ったならわかるはずだ!」

祐斗君は少し探る様に竹刀を見つめ

「ギャグ補正だね」  
そう言った。

「えええええええええええ!?!?木場まで?木場までそんなこと言うのかよ!?!つかキャラに合わねえよおおお!」

「そんなこと言われてもね。じゃあ小猫ちゃん、君も持ってみなよ。」

「……………わかりました。」

あ、……………ギャグ補正です。」

祐斗君に渡され小猫君も同じように答えた。そしてそれはアーシア、朱乃君、リアス君の順に回っていき

「ギャグ補正ですね」

「ギャグ補正ですわね」

「ギャグ補正ね」

皆同じ様に答えた。

「うそおおおおおおおおお！？みんなして何言ってるのさ！？つかみんなキャラに合っていないよおおおおお！」

「そんなに言うならあなたも持ってみなさい。ほら」

リアス君の言葉にイツセイ君が半信半疑ながら竹刀をつかんだ。

そして

「こ、これは！ギャグ補正……………ってわかるかあああああああああああああ！！！！！！」

バシンッ！

あああ！虎竹刀を叩きつけるな！

「イツセー君！何をする！！」

「だってわけわかんないですから！

アレっすか？俺にはわからない不思議なパワーでもあるんすか！？

うわあああああああああん！」

む、イツセー君が泣き出してしまった。

しかし嘘ではないので仕方がない。

とりあえず話を進めよう。このままではいつまでもたっても開始出来ない。

「イツセー君、話の続きをするぞ。

この竹刀の能力は事実なのだが「事実かよ！！」

少し黙りたまえ！まったく……………

ごほん、事実なのだが何がギャグ補正なのかと言つとだな。」

「言つと？」

「いくら虎竹刀で殴っても死なない！殺す気で殴っても死なない！



痛いだけ！しかも直ぐに痛みは引く！これすなわちギャグ補正！」

「あゝ！だからさつき小猫ちゃんパンチ並に痛かったのに吹っ飛ば無かったうえに痛みが直ぐに引いたのか〜！……………」

……………余計に嫌だあああああああああああああああ！！

つまりあれっすか！？痛い思いしたくなかったら避けるか受けるかしろって事ですか！？

体は平気でも心が死ぬわあああああああああああ！！

イツセー君の言うことも最もだが

「問答無用！さあ行くぞ！！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

イツセー君の訓練開始だ！！

\*

「うおおおお！美味ええ！マジで美味しい」

イツセー君は元気だな。例え傷つかなくとも疲れているはずだが。

現在私達は本日の訓練を終え、食事をとっていた。

今夜の食事は私、朱乃君、アーシアの合作だ。  
食材はどうやらリアス君が山から調達してきたらしい。  
牡丹肉に魚、さらには木の実や山菜。  
良くこれだけ集めたものである。

これだけの食材があっても調理器具がと思いましたがそれは杞憂であつた。

今朝あつた大量の荷物はなんとほとんど調理器具だつたのだ！

何故か私の何かが燃え上がり

「くくく、朱乃君、アーシア！ついてこれるか？」

やってしまった。

実に後悔している。何故なら

「シロウ！あなた私の執事になりなさい！  
何よこの料理………私よりも、いえ！うちのコックより美味しいじゃない！」

先ほどからリアス君の勧誘が半端ないのだ。

他の者はリアス君ほどでは無いにしろ喜んでくれたようだ。  
ただ気になる視線がある。

小猫君だ。

いつもポーカーフェイスの彼女の目がキラキラと輝いていた。

気に入ってくれたようでなによりだが少し怖かったのは内緒にして欲しい。

ちなみにセイバーだが

「きゅううううう！お願いです！私にも！きゅ、きゅうううううう！またお肉が！魚まで！シロウ！私を発現させてください！私もたべあああああああ！」

非常に騒がしかった。

\*

訓練開始から約1週間がたった。

この1週間でイツセー君の力は飛躍的に上昇したことだろう。特に避ける技術は相当に上がったと思われる。

余程嫌だったのだろう。私だって嫌だからな。

そして本日の訓練も終わり後は寝るだけなのだがどうも眠れず外で一人体を動かす。

仮想の敵を想像し、ひたすら打ち合っていた。

しばらくそれを繰り返し一息ついた所で終わりにし、中に入って聞いてしまった。

リアス君の気持ち、イツセイ君の苦しみを。私は聞くことしか出来なかった。

まったく、不甲斐ないな。

私はいつもそうだ。後になってやっと気づく。

私はイツセイ君を鍛えたつもりでいた。事実肉体面では1週間前より遥かに強くなっているだろう。

だが心はどうだ？いくら肉体が強くなるうとも心が強くならなかつたら？

彼は心が強い。だが周りと比べてしまい今の彼にはその強さが無くなってしまうている。

肉体だけ、戦闘技術だけ鍛えても仕方がないのだ。

人は心一つで強くも弱くもなるのだから。

どうやら私はイツセイ君を鍛えることに失敗したらしい。  
だが

「自信が欲しいのね。いいわ、あなたに自信をあげるわ。ただ、今は少しでも体と心を休ませなさい。眠れるようになるまで私がそばにいるから」

そこはリアス君がうめてくれるようだ。

くくく、イツセー君、君は良い主を持ったな。彼女ほどの女性はそうはいないぞ。

それに君もリアス君の気持ちを聞いたのだから？  
なら、守ってみせろ。

君が真に強くなることを願っている。

\*

翌日、どうやらイツセー君は自信を手に入れたらしい。

まあ役立たずだと思ってた自分が神器の力を使ったとはいえ祐斗君と同等に闘えたのだからな。

流星はリアス君である。これを見越していたのかまではわからないがイツセー君の目に力強さが戻っている。

もう大丈夫だな。

後は君達次第だ。私も出来る限りで力になる。だから

「頑張れよ、若者諸君」

君達の未来に幸あらんことを。

そして時間は瞬く間に過ぎ、レーティングゲームの、決戦の日がやって来たのだった。

## 十四話（後書き）

どうでしたか？

正直今凄く眠いです。でも書きたかったので書いて投稿です。  
多分大丈夫だと思いますが何か変な所があったら教えてくださると  
助かります。

では！

## 十五話（前書き）

投稿です！

これで二巻が終了！

あゝ疲れた！でもたのしー！



## 十五話

リアス君達のレーティングゲームが終わった。  
結果はリアス君達の敗北であった。

善戦していた。数で劣りながらも相手のほとんどを倒し、残すところの王のライザーとその女王、僧侶までいった。

しかし流石にリアス君達も無傷とはいかず、彼女達もリアス君、イツセー君、アーシア以外は倒されてしまったのだ。

そしてそこからの壁が厚かった。

アーシアの回復は相手の女王によりアーシアごと隔離されてしまった。

僧侶は何故か戦線に現れていないがライザーはあの尊大な態度なだけありそこそこ強かった。それこそリアス君とイツセー君が二人がかりで戦っても有効打を与えられない程に。

リアス君の魔力弾をいくつくらってもライザーは再生し、イツセー君がいくら殴りかかっても避けられ、当たっても大したダメージにならなかった。

幸いだったことと言えばイツセー君がライザーの攻撃をあまりくらわなかったことだろう。

私との訓練の成果がでていようである。

だがその拮抗もライザーの行動で崩れてしまう。

ライザーがしたこと。それは超接近戦<sup>スーパーインフアイト</sup>。自身の再生能力と炎を駆使しての捨て身の攻撃方法。

だが彼には捨て身にはならない。故にある意味最良にして最強の攻撃方法である。

この戦闘方法の弱点は再生能力を上回る攻撃にて殲滅することだがリアス君の破滅の魔力弾にしるイツセー君にしる、そこまでの威力を持っていなかった。

イツセー君の神器で力を高めれば可能だろうがライザーがそれを許す筈がない。

よって結果は直ぐに現れ出す。

殴っても殴っても再生するライザーに対してイツセー君は徐々にではあったがダメージをもらっていき、最終的には深刻なものになった。

そう、意識を失っても闘い続けてしまっていた程に。

倒されては立ち上がり、倒されては立ち上がりを幾度繰り返したことが。

意識を失ってまで闘い続けるその姿は如何にこのゲームに勝ちたいのか、如何に主を護りたいのかを物語っている。

彼は立ち向かい続けた。



「あら、執事が主に向かって酷いわね。

ふふ、それにここは冥界。あなた達人間で言う地獄よ。残念でした、私達はもう地獄にいるのよ」

「……………」

く！何故私がこの様な事を！

私は昨日のことを思い返す。

昨夜突然リアス君に呼ばれ部屋に向かい告げられた。

「シロウ、明日の婚約パーティーの時私の執事になりなさい！」

当然私は拒否したのだが

「お願い……………」

ふざけていた訳では無さそうなので理由を尋ねると

「正直な話心細いのよ……………」。

あなたに対して失礼だとは思っけど本当はイツセーにいて欲しかった。でもイツセーはあの状態だから無理。

朱乃達も挨拶回りとかあるしお願いしたいこと、まあもしイツセーが目覚めたらここの案内なのだけれどそれをして欲しいから無理。

だからあなたにお願いしたいのだけれどあなたは人間だわ。悪魔でなく従者以外の者があの場にいるのは不自然。だからあなたには明日だけでも執事になって欲しいのよ。」

そう言われてしまった。

あの様な表情であの様な言われ方をされては断れる筈もなく仕方なしに引き受けたのだ。

「あ、シロウ！後で写真とるから今日はその服脱いじゃ駄目よ！」

「ぐっ！何故私がおんな様なことまでせねばならんのだ！！」

「ダメ？」

「うっ！そ、そんな捨てられた猫みたいな目で私をみるな……………」

「……………」キラキラ

「……………」

「……………」キラキラ

「っ！わかった！わかったからその目はやめてくれ！」

「よし！勝ったわ！」

ぐううう！勝ったとは何だ！勝ったとは！赤い悪魔、いや紅い悪魔め！  
いっそのこと

「天に召されてしまえ！！」

「無理よ、私悪魔だもの」

まさしく悪魔である。

\*

婚約パーティーが始まり少し時間が経過した。

私はリアス君につき、彼女の執事として行動をしていた。

ライザーに一応らしいが挨拶に行くと、ライザーは私を見た瞬間顔をひきつらせ、軽く挨拶だけしてどこかに行ってしまった。

リアス君……………、実はこれを狙っていただろう……………。

この後にリアス君の両親に挨拶を、学園の教師として行い、さらにその後もしばらく挨拶回りを行い、やっと一息ついたころ

「やありアス。久しぶりだね。」

一人の男性に声をかけられた。

その男性はリアス君と同じ紅髪で顔立ちも何処か似ている。

そして今は優しそうな笑みを浮かべているが圧倒的な強さを持っていることがわかった。

「お兄、魔王様！もう挨拶回りはよろしいのですか？」

兄？魔王？どうということだ？

「ああ、もう大体は終わったよ。

後、今はリアスの兄として話しているんだ。だからいつも通りで構わないよ。

それはそうとその執事服の男性は？どうやら人間のようだけど。」

286

「まだ紹介していませんでしたね。

彼はエミヤシロウ。先ほどお父様とお母様にも紹介しましたが彼は駒王学園の教師で我が部の顧問を勤めて頂いている人間です。

本日は私から頼み執事として同行していただいています。」

「ほう、リアスが頼んでまで連れてくるということは余程有能なんだろうね。」

失礼、挨拶が遅れた。

私はサーゼクス・ルシファー、現四大魔王の一人にしてリアスの兄だ。

学園ではリアスがお世話になっているようだね。

私からも感謝するよ。」

成る程、この男性はリアス君の兄であり魔王でもあるのか。それならば先ほどの笑みにも、感じた力強さにも納得がいく。

「ふむ、先ほどリアス君からも紹介があったが私から改めて自己紹介をしよう。」

私はエミヤシロウだ。君達とは違いたただの人間だがよろしく頼む。」  
ふむ、簡単にだがこれで良いだろう。後のことは先ほどリアス君から言ってくれたしな。

「あなたがただの人間？そんな訳ないでしょう」

リアス君！余計なことを！

「ん？どういう意味だい？」

そらみる、魔王が興味を持ったではないか！

「彼の身体能力と戦闘能力は人間にしては異常なんです。」

上級悪魔と同等以上の身体能力に卓越した戦闘能力。さらには不思議な魔術らしきものを使い、特殊な神器保持者でもあります。

この前はライザーを完全に封殺しましたし、修行の時には皆が彼に師事を受けました。

お兄様にもグレイフィアから報告があったのではありませんか？」

く！流石に照れるものがある。リアス君は私を誉め殺しにするつもりか？



「ほう、君があつ……………」。

ふふふ、成る程成る程。

リアス、君の元には面白い人材が揃うね。いや、この先が実に楽しみだよ。

おっと！そろそろかな？」

ん？何がそろそろなんだ？

魔王の言葉に疑問を浮かべているとそれは起こった。

「部長おおおおおおお！！！」

む！この声は！

「……………イツセー？」

リアス君の咳きが聞こえる。その声には驚きと喜びの感情が強い。

イツセー君はリアス君を返して貰いに来たと叫び走り出した。当然の様に警備員が動き出すが彼の仲間達によって妨害されている。それにしても

くくく、イツセー君来たか。

ならば！今が男を見せるとき！

僭越ながら私も手を貸そう！

「リアス君、しばしここを離れる。」

「ええ、お願い！」

イツセーをここまで連れて来てちょうだい！」

「了解した！！  
トレス・オン  
投影開始！！！」

この言葉を合図に剣群が私の背後に出現する。なんてことのないただの剣だが

「全投影連続層写！！！」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン！！！！！！！！！！

「うお！！」「な、何だ！？」「剣がいきなり！」「ち！動けない！！」

動きを止めるのには十分だ！！

さあ、道は出来た！

「行け！イツセー君！！！」

私の行動に驚いていたようだが、言葉を聞いて

「はい!!」

力強く答えた。

君の力を、思いを、心の強さを見せてやれ!この場にいる悪魔達に!  
ライザーに!そしてリアス君に!

そして

「部長 リアス・グレモリー様の処女は俺のもんだ!!」

力が抜けた……………。

は?イツセイ君はなんと?リアス君の処女?俺のもんだ?

「……………」

ああ、まったく君は……………

「たわけがあああああああ!!」

\*

イツセイ side

会場に殴り込みをかけて仲間達とシロウさんの助けを得て俺はここにいる！

魔王様の許可を得て俺は部長をかけてライザーとの一騎打ちを行うんだ！

力の使い方はこの左手に宿る《赤龍帝ドライブ》が教えてくれた。だから後は

「輝きやがれええええつつ！！オーバーブーストオツ！！」

『Welsh Dragon over booster !!!!』

あいつを！ライザーの野郎を！ぶっ飛ばすだけだああああああああああああ！！

赤い閃光が籠手の宝玉から溢れ会場全体を照らす。  
閃光はオーラに変わり俺を包む。

光が晴れるとそこには赤い鎧を纏った俺がいた。

制限時間は15秒！

ただそれだけあれば十分！それだけあれば

「てめえを殴れる！」

「くっ！赤龍帝の力を具現化したのか！！」

ああ、そうだ！ライザーの言っていることは概ね正しい！

「これが赤龍帝の力！禁手、《赤龍帝の鎧》！俺を止められるなんて思っなよ！？何せ今の俺は無敵らしいからなああああああ！」

部長をかけた闘いが始まる！

\*

戦闘開始から8秒、残り7秒。

「はあはあはあはあ。お、お前は」

「おらあああつー!!」

ドゴンー!!

「がはっ!!」

ぐ、何故そんなに強くいられる!?何故左手を支払ってまで!?

俺はライザーを圧倒していた。

俺はほぼ無傷だがライザーはボロボロだ。

それもこれもこの鎧と

「部長の、ためだ!!部長がそれを望んだ!だったら俺は左手を支払ってでも強くなる!」

ドガンー!!

「がっ!ぐあああああああああああ!」

シロウさんとの修行のおかげだ!!

鎧のおかげで炎は耐えられる!修行のおかげでライザーの拳は避けられる!

それに例えいくらくらっても、部長の涙を見ないですむならいくらでも耐えてやる！

残り4秒、一気に決める！

「いくぜ！ドライブ！」

『応！相棒！15秒、たったの15秒だが相棒の力は充実している！残り4秒分の力を次に込めるぞ！』

最後の1撃。もしこれで倒せなかったら俺は負けるだろう。

でもだからこそ全力で殴る！！

俺の全部をこの1撃に！

ブースターをフルで噴出しライザーに突撃をかます！

はは。速すぎて景色が見えねえ。でもライザーはしっかり見えてるんだよ！それで十分だ！てめえが見えてればこの拳は当たるんだよ！

ライザーの野郎も構えをとってやがる。フラフラの癖に良くやるわ。それもお前の言うプライドか？

それとも本当に部長と結婚したいのか？

でも譲らねえ！部長は絶対に譲らねえ！

だから





完全に動かなくなった。

これで俺の

「じゃあああああああああ！！」

勝ちだ！！

部長は返して貰うぜ。ライザー！！！！

イツセイ side out

イツセイ君が勝利し、リアス君はイツセイ君とグリフォンに乗り何処かに去っていった。

くくく、イツセイ君。君はやはり強いな。

今回私は特に何もしていない。せいぜい彼らと訓練した程度だ。

でも嬉しいものだ。そのせいぜいが役に立ったようだからな。

きつと訓練を始める前のイツセイ君なら勝てないとは言わないがかなり苦戦、もしくは敗北寸前までいっていただろう。

結果的には彼自身の力で勝ち取った勝利だが少しでもその勝利に貢献できたことが嬉しく思う。

人を助けるとはこんなことでも良いのだと改めて思い知らされたよ。

「やぁリアスの執事君。エミヤシロウ君だったかな？  
もう誰もいないこの会場でどうしたのかな？」

ふう、ようやく来たか。

私は待ち人、魔王サーゼクスに返事を返した。

「貴様を待っていたのだよ。魔王サーゼクス。」

私は全てが終わった後も彼に会うためにここに残っていた。  
どうしても聞かなければいけないことがあったからだ。

私に近づいてくる魔王とその後ろを歩く銀髪のメイド、確かグレイ  
フィアと言っていたか。

「私に用か？」

ふむ、グレイフィアの報告を聞いてここまで来たのは正解だったよ

うだ。

それで私に何の用かい？」

「なに、貴様の本心を知りたいと思ったのだよ。

貴様の力があればあの婚約は破棄出来たはず、だがそれをしなかった。そのくせ最後にはイツセー君の戦闘許可。

予測にしか過ぎないが手引きしたのは貴様だろ？

何を考えているのかね？」

今述べたように矛盾する点がある。

私はそれが気になった。

魔王は何を考えているのか。場合によってはリアス君の兄であろうと相応の対処をすることになる。

少々殺気が漏れたのだろう。魔王は少し驚き、メイドは警戒を露にする。

「グレイファイア、構わない。

君の言うことも最もだ。

確かに私は結婚を止める権力はある。

ただどね、立場がそれを許さないんだよ。

私とてリアスの気持ちには気づいていた。だけど悪魔社会のことを考えるとそうも言っていられなかった。」

こいつ………悪魔社会の、政治のために妹を捧げるつもりだったのか？

いや、しかしそれだとイツセー君の戦闘許可に納得出来ない。つまり魔王は

「でもね、それでも私はリアスに幸せになって欲しい。ただでさえ私のせいでグレモリー家の家督と言う重いものを背負わせてしまうのだから。

どうにか出来ないか考えて考えて、そこに赤龍帝を宿した彼が現れた。

彼の存在を知ったのは最近でその時はレーティングゲームの話までついていたんだけどチャンスだと思ったね。

彼ならばリアスを救えるのではないかとね。  
そしてそれは成功した。ライザーには悪かったけどね。」

これを見越して行動していた訳か。

「まあ後は赤龍帝の力を見たかったのもあるけどね。」

くくく、この魔王はなかなか

「狸めが」

「ふふふ、政治を行う者にとってそれは誉め言葉だよ。」

くくく、やはり狸だな。だが好ましい狸だ。私は嫌いではないな。

「それでは最後に聞きたい。貴様にとってリアス君は？」

魔王はさも当然かのように

「大事な、大事な妹だよ。」

そう言った。

そうか、それならば良い。

「わかった。ならば私の用は終わった。私は帰るとしよう。すまないが帰り方を教えてくれないか？行きはリアス君に付いていっただけなのでね。」

情けないが帰り方がわからないのだから仕方ない。

「ふふふ。わかった、こちらで手配しよう。」

後、私からも質問があるのだが良いかい？」

「何かな？」

「君は何者なんだい？まあその様子では悪人には見えないが」

そんなことか。なら答えは1つ

「私は、正義の味方だ」

## 十五話（後書き）

いかがですか？

結構急ぎでやったんで所々不安です。

次回からは少し番外編的な物をやろうと思います。

## 十五・五話（前書き）

今回はライザー戦直後の夜、部室に戻った時の話です！



## 十五・五話

「ふう、ついたか」

魔王サーゼクスの手引きにより無事冥界より帰還をはたして現在駒王学園の旧校舎前に私はいる。

来たときと同様に数時間にも及ぶ列車移動を覚悟していたのだが魔方阵で一瞬であった。

何故か私達の自宅に、しかもあの秘密基地に転移された時は何のイジメかと思ったものだ。

………叶うならあの部屋は二度と見たく無かったのだがなっ！

まあそれはいいとして、時刻はまだ23時で、家にまだアジアがいなかった事からまだ部室に皆がいるだろうと思いきやこうしてやってきたのだ。

廊下を進み部室の前まで行くと人の気配がする。

やはり居るようだ。しかも気配の数は6、全員居るな。

私は扉に手をかけ

「失礼する」

中に入った。すると扉の近くにいたアーシアが

「あ！お兄様！おかえりなさ……………い？」

言葉に詰まった。

ふむ、どうしたのだろうか？

そしてリアス君に言われて気が付いた。

「シロウ、あなたまだ執事服を着ていたの？ふふふ、それとも気に入ったのかしら。」

……………忘れてた。自分で言うのも何だが、違和感が無さすぎたのだ。

くう！何故私は忘れていたのだ！気に入ったなど決してあり得ないというのに！

「お兄様！とてもお似合いです！」

違和感が無さすぎてびっくりしちゃいました！」

笑顔でアーシアが言う。そうか、君は違和感があって驚いていたのでは無く、その逆の意味で驚いていたのか。

アーシアには悪いがほめられても嬉しく無い。

むしろ不満である。私は決して執事などでは無いのだから。

「……………部長のお家にいそうです。」

小猫君が呟く。

……君の発言は地味にきくな。

「あらあら、そうですね。」

朱乃君、笑顔で肯定しないで欲しい。

「不満そうなシロウさんには悪いですが本当にいそつですよ」

祐斗君、悪いと思うなら言わないでくれ。言葉にしないでだけでも私の心の平穩は守られるのだよ。

「マジか、俺闘ったりで気付かなかったけど、シロウさんずっとその格好だったんだ。  
似合いすぎでしょ。」

……君に意識があれば私はこんな格好をしなくてすんだのだよ。

「いつそのこと毎日その格好でいれば？ふふふ、皆気付かなかったりして。違和感なさすぎて」

元凶は黙れ！！

この後も色々言われた。私の精神はすり減るばかりである。

ああ、あんなお願い聞くんじゃ無かった……………。

\*

散々皆に言われた私は我慢出来なくなり着替えた。

残念そうな顔をされたが知るか！

この時間で考えるのも面倒だったので、黒のパンツに黒のノースリーブシャツを投影し着ている。

最近はスーツばかり着ていたのでこの様な格好は楽で落ち着く。まあスーツが嫌だというわけでは無いのだがな。

ただ執事服だけは嫌だ。何故と問われても嫌だから嫌としか言いようが無い。

それにしても良かった。リアス君は後で私の写真を撮ると言っていたがどうやら忘れていたようだ。

あの姿はできるだけ記録に残したくないので本当に安堵している。

「くくく」

思わず笑いが漏れてしまった。だがそれほど安堵しているのだ。突然笑い出した私を怪訝に思ったのかリアス君が言う。

「シロウ？突然どうしたの？」

「なに、大したことではないさ。

ただ君が後で写真を撮るとか言っていたのを思い出してね。残念だったな。私はもう着替えてしまったぞ」

くくく、私がいつまでもリアス君の思い道理になると思うなよ。ま  
ぁリアス君が忘れていただけだがね。

「ああ、そのこと？それならもう済んでるわよ。」

……………何だと？

「済んでるとはどういう意味だ？」

「言葉のままよ。ほら。」

そう言ってテーブルに広げられた写真の数々。

私は恐る恐る写真を一枚手にとり

「なっ！！」

後悔した。

その写真には私がリアス君に付き従っている所が写し出されていた。

「な、何だこれは！いつの間に撮られた！？気配は感じなかったぞ  
！」

そっだ！全く感じなかった！視線や意識が私に向けば私が気付かない筈がない！

「それはそうよ。だってその写真は高解像度監視カメラの映像を編集したものだもの」

なっ！何だと！？

くっ！それなら私が気付かないのも無理はないが普通そこまでするか！？

「普通に撮っても良かったのだけれど貴方嫌がるじゃない。そんな嫌そうな顔を撮っても楽しくないのよ。」

「だがそれは盗撮だろう！」

「問題ないわよ。だって、私を撮った物でもあるんだから」

ま、まさか！

私はばらまかれた写真を見た。するとどうだろうか。確かにリアス君が写っている。だが

「小さかったり後ろを向いているものばかりではないか！こんなもの」

「どんな写り方であれ私が写っているのだからそれは私を撮った写真よ。」

だから決して盗撮ではないわ」

「屁理屈だ！」

「でも事実よ。」

私とリアス君の言い合いが続く中動きをみせた者がいた。

「何々？これにシロウさんが写ってんのか？」

どれどれ」

イツセー君だ。

く！彼はいつも余計なことを！  
その写真に触るな！その写真を

「見るなああああああああああ！……！」

バシンッ……！！

「あだあああああああああ……！！……？？」

「ふん！それを見ようとした罰だ、天誅だ！」

頭を抑えてのたうち回るイツセー君に告げる。

「いつだああああ！」

ん？痛みが引いたぞ？あ！ま、まさかそれは……！」

ふむ、気づいたか。

「虎竹刀……？」

イツセー君の表情が恐怖に歪む。忘れたくとも忘れられないのだから。

何せこれの恐ろしさを一番知っているのはこの中ではイツセー君ただ一人。10日間の訓練は彼を鍛えはしたが同時に恐怖も植え付けたようである。

しかしイツセー君は不適に笑い出す。

「フフフ、シロウさん。確かにそれは怖い、だけどこれを見る！」



バツ！とイツセー君が掲げた物、それは私の写真だった！

「く！イツセー君、やるようになったな。叩かれつつも痛みに一瞬耐えそれを手にとるとは……………。だがそれは返して貰う！」

虎竹刀を片手に持ちにじりよる。

「っ！！！」

で、でも俺も見たいっ！ちょっとくらい良いじゃないですか！

……………ほう。

「良い度胸だ。

ならば力ずくでも返して貰おう！！！」

「え！？う、嘘ツス冗談ツスやめてとめてこないでえええぎやああああああああああああああ！！！」

バシンツバシンツバシンツバシ

ン！！

私は数分間殴り続けた。

\*

「へ、へへへ、へへへへへへ」

ふむ、やり過ぎたようだ。イツセー君が壊れた。

宙を見ながら笑い続けるイツセー君。非常に不気味である。

仕方ない…………

私はイツセー君を担ぎ上げ「イツセー君の目を覚まさせてくる」と部員達に告げ部室を出ていった。

その際皆が唾然としていたが、まあ良いだろう。

イツセー君には話しておきたいこともあつたし丁度良いだろう。

私はイツセー君を担いだまま階段を登って行き屋上まで来た。

そしてもう一発気合いの一閃を叩き込もうとして竹刀を上段に構えると

「は！！ま、待った待った待った待った待った待ったああああ！起きた！起きたからやめて！」

復活してしまった。

「ちっ」

「何その舌打ち!？」

相変わらずツッコミが速いな。そのツッコミの様に戦闘でも速く動ければ良いものを。

「いや、何でもない。それよりイッセー君、君の左手はどうしたのかね？」

「っ!?!」

………いつ気が付いたんです？」

「先ほど君に打ち込んだ時だ」

あの時、イッセー君に、彼の左手に違和感を感じた。まるで彼の手ではないかのような、そんな違和感が。

「はは、流石はシロウさんです。

これはですね、力の代償として《赤龍帝》に捧げました。」

成る程

「あの鎧だな？」

「はい。俺は弱い。だから強くなるには代償が必要だった。俺は部長のために、そして俺のためにライザーにどうしても勝ちたかったんです。だから捧げました。」

「捧げて左手はどうなったのかね」

「ははは、ドラゴンになっちゃいました。今は部長達のおかげでわかんないですけど定期的に儀式をやんなきゃいけないみたいです。まあ後悔はしてませんよ。」

「一応聞いておくがああ、の鎧を使う度に何処かを捧げるのかね」

「今の俺だとそうです。あれは《禁手》ってヤツみたいなんですけど俺のは不完全らしいんで。」

「最後にもう一つ、君はまたアレを使うのか」

「出来れば使いたくないですよ。」

ただ部長が、仲間が危険になれば迷い無くやるでしょうね。」

照れ臭そうに言いつつも迷いの無い瞳。彼は間違いなくその時がくれば鎧を使うだろう。

「……………自己犠牲か」

「え？何ですか？」

私の咳きにイツセー君が反応した。

「いや、君は方向性は違うが私と似ていると思ってな」

「俺とシロウさんが？ははは、そんなわけないですよ。

だってシロウさん俺みたいにエロくないしスゲー強いじゃないですか。俺はシロウさんみたいに闘う才能なんてまるで無いし。」

冗談に聞こえたようだ。

ふむ、イツセー君には少し話しておこうか。

「君が私をどのように見ているかはわからんが大して変わらんよ。私だって人並みに女性には興味はある。君より大人なぶん理性が効くだけだ。」

私だって男だ。興味が無い筈がない。

「それに君は私が強いと、才能があると言ったがはつきり言おう、私は闘う才能などない」

「え？な、何言ってるんすか。え？だってシロウさんあんなに」

驚いたような、困惑したような表情を浮かべるイツセー君。だがそれが事実、私は闘う才能などない。

「事実だ。」

本来の私は造り出す者。決して闘う才能に恵まれた訳ではない。まあそうそう負けるとは思わんがこれは永年の修練と経験によるもの。決して才能などでは無い。」

私に才能などと呼べるものがあるならせいぜい固有結界と弓くらいなものだ。

それに私が似ていると言ったのは才能云々では無く別の事。

「だが君と私が似ているのは才能ではない。自分を犠牲にしてまで他人を守ろうとする所だ。」

「そんな！確かに俺は部長の為に左手を捧げましたけどぶっちゃけ怖かったんですよ？」

「だから言っただろう、方向性は違つと。君は恐怖を感じながらも守るためならその身を差し出してでも。私は守るためなら当然のようにこの身を危険にさらす。」

ほら内容は違つが結果は同じだ。」

イツセー君のは勇気であり私のは感覚が壊れた破綻者という違いもあるがね。

「そんな風に言われるとそうかもって思えますけど……つまり何が言いたいんですか？俺とシロウさんが方向性は違つけど似ているつてのはなんとなくわかりました。でもシロウさんのことだからそれだけってことは無いでしょ？」

普段抜けてるようで中々に鋭いな。まあ彼の言うことも最もである。早足ではあるが結論を言おうか。

「では結論を言おう。イツセー君、君はいずれ大切な守るべき者を傷付けるかもしれない。」

「どつという意味ですか？確かに俺の左手はこんなになりましたけど部長のためにしたことだ！間違つても傷付けたりなんてしてない！」

後半は少々興奮したような物言い。まあ自分の決意で大切な者を傷

付けるかもと言われたのだから仕方ないといえば仕方ない。だがまだ未熟だな、人の話は最後まで聞くものだ。

「まあ待ちたまえ。私は、かも」と言ったのだよ。

だが君が自分を犠牲にしていく限りそれは訪れる可能性が高い。」

私がそうだった様にな。以前の私なら救うことだけ考えて気にしなかった事だからこそ聞きたい。

「なあイツセー君、君は救われた側の事を考えた事はあるかね。」

突然の質問にイツセー君は多少は困惑しながらも

「えと、そりゃ助けられてありがととか嬉しいとかじゃないんですか？」

「それも間違いではない。だが例えばだがリアス君が君を相手の攻撃から守るために盾になったとしよう。君は当然無傷でいたがリアス君は怪我をした。君はリアス君に救われたわけだがそれについてどう思う？」

「そんなの決まっています！俺のせいで部長が怪我をしたって思うに

あ！」



どうやら気が付いたようだ。

「わかったかね。」

救った気でいても逆に傷付けてしまうこともあるのだよ。相手の心をな。

だから覚えておきたまえ。本当に救うと言うのは体だけでは無く、心だけでは無く、両方救って初めて救ったことになるのだよ。」

まあそれでも言うときはあるがね。

最後にそう付け足し私からの話は終わった。

イツセー君は少し考える素振りをしてから

「俺には良くわかんないこともあったけどこれだけはわかりました！部長も仲間も、そして俺自身も守れるくらい強くなれば良い！そうすれば誰も傷つかないですむ！少なくとも大切な人達は守れる！だから俺は強くなる。シロウさんみたいに！」

笑いながら言うイツセー君に今度は私が困惑させられた。

私の様にだと？私の様になった所で良いことなど

「だってシロウさん才能なくてそんなに強くなつたんでしょ？才能ないのに守るために闘い続けてきたんでしょ？」

スッゲーカツコイイじゃないですか！

俺もそんなカツコイイ大人になりたい！才能なんか関係ない。そんな風に思われる様になりたい！

それで皆を守れる様になりたい！

まあ何事も無いのが一番なんだけどさ。」

最後にどこか情けなくとも誰もが思う事をイツセー君は言う。

私はそんな高尚な存在では無いのだがな。まあわざわざ彼の夢を壊す様な事を言う必要はないか。

ならばせいぜい彼が目標に出来る、そんな存在でいられるように頑張るとするか。

だから君も

「そうか、ならば努力しなくてはな。生半可な覚悟ではその夢は叶わんぞ?」

「はい！俺、今はまだ弱いけど絶対強くなります!」

「そうか。なら私に出来ることがあれば力になる。」

聞きたいことがあれば応えるぞ。」

「なら早速なんですけど

」

君も、頑張れよ

この後イツセイ君と話をして気がつけばかなりの時間がたっていた。そして迎えにきたアーシアと部屋に戻りまた会話をしてこの日は解散したのだった。

ちなみに帰る間に執事服をしつかりたたみテーブルに置こうとするとリアス君が私に言った。

「あら、それあげるわよ。大切にね。」

「こんなものいるかあああああああ!!」

今夜も私の叫びが響く。どうやら私とリアス君の関係は変わらないようである。

ち  
ゃ  
ん  
ち  
ゃ  
ん

十五・五話（後書き）

どうでしたか？

こんなんで良いのか微妙な所ですが楽しんでいただけました？

感想など頂けたら幸いです。

十六話（前書き）

今回は短めですが話は進みます。

## 十六話

突然だが私には悩みがある。それも複数だ。

今日は学園行事の球技大会を終えた後の日曜日の午前10時で家事を一通り終わらせたので一息つきながらどうしようかと頭を働かせている最中である。

アーシアだが彼女はイツセー君の家に遊びに行っているのだが、私の悩みの1つは他でもないアーシアだったりする。

なんと言うか最近のアーシアは変な方向に活発なのだ。

主に性的な意味で。

とは言ってもアーシアは純真無垢で幼いころから教会で育ったためその様な知識に疎い。

最低限のことは理解しているようだが少し応用される事柄には弱いようだ。

そしてアーシアは人を信じやすい所がある。以前に比べれば大分良くなっているのだが、それでもまだ信じやすいのだ。

それは一見良いことではあるのだが同時に困ったことでもある。

これは数日前の事なのだがイツセー君に相談を受けた。

彼曰く

「最近、部長やクラスメートの影響でアーシアが純真無垢なのにエロくなってきたんです。

エロいのは好きですけどこのままじゃ身が持たないっすよシロウさ

ん……………」

らしい。

まあ頑張れとしか言いようが無かったのだが、今はそうも言っていられないのだ。

イツセー君に相談された時に知ったのだが、どうやらイツセー君の家にリアス君が下宿している様なのだがそれが問題だったりする。

イツセー君は何と言ったか思い返して欲しい。

そう、部長やクラスメートの影響で、だ。

つまりリアス君やクラスメートは彼の言葉を借りるとエロい、または大胆、もしくは奔放と言うことになる。

そしてアーシアはその影響を受けている。

……………まずいのだ。それがイツセー君にだけならまだ良かった。アーシアはイツセー君に好意を寄せているようなので、それもまた1つのアプローチであろう。

だがその影響は私にも来たのだ。

イツセー君に相談されたその日の夜の事だ。私はアーシアと食事をとっていた時の事であった。



「お兄様！私と裸の付き合いをしましょう！クラスメートの方から聞いたのですが何でも日本では親しい人とお風呂で裸の付き合いをするものだと聞きました！」

「んんんっ！ごほっごほっ！き、君は何を言って、いるのか、ごほっ、わかっているのかね!？」

で、ある。

この他にも色々あったのだが、その度に間違いを指摘したり説明したりしたのは言うまでもないだろう。

リアス君、頼むから自重してくれ……

アーシアが変な方向に行ってしまう……。純粋なエロシスター悪魔、言葉にすると非常に混沌としているものである。

アーシアのことは事ある毎に矯正していくしかないか。指摘すると直ぐに理解してくれることが幸いである。

さて、2つ目の悩みであるがそれは

プリプリプリ、プリプリプリ

む、来たか。

鳴り出した携帯電話の通話ボタンを押し耳にあて

「もしもし、エミヤだが」

そう言った瞬間

「シロウですか！？ロスヴァイセです！ちょっと聞いて下さい！またオーデイン様が

はあ本当にまたである。オーデインも懲りないものだ。

以前行なった矯正計画の影響が大分大人しくなった。

……………表向きには。

何とオーデインは己の未来予知をフルに使用し一番安全かつ有意義なセクハラをし始めたらしいのだ。

まあこれはまだ良い。ヴァルキリー達からすればたまったものではないのであるが、以前に比べればまだましである。

問題はヴァルキリー達の怒りの矛先が私にくる所だ。

愚痴と言う形で……………。

今の電話はロスヴァイセ、昨夜はブリュンヒルデと言った様に最近毎日毎朝毎晩毎夜の様に電話がかかってくるのだ。

おかげで寝不足の日が続いている。

まったく勘弁して欲しいものだ。

ロスヴァイセからの愚痴を聞き終え電話を切り次の事を思考する。

3つ目それは現状で一番の問題かもしれない。

祐斗君の様子が最近おかしいのだ。

どこか上の空で今まで見てきた彼とは様子が違う。特に球技大会の後からどんどん酷くなっている。

それというのもどうやらリアス君に叱られた様なのだ。それからというものの個人で動く時間が増えたらしい。

それにあの目、あれは復讐者の目だ。

気になった私はリアス君に聞いた。

直ぐに理由がわかった。

## 聖剣計画

意図的に聖剣使いを生み出そうとした計画で、彼は実験体であり失敗作として処分された者の生き残りらしいのだ。そのため聖剣に対しては強い憎しみを抱いているとのことだ。

成る程、道理で祐斗君が私の投影した剣を見て複雑そうな顔をしていたわけだ。

あの中には当然聖剣もあったのだから。

「ふう」

まったくもってままならないものだ。  
だがこれは優先的に解決しなくては彼等の絆に傷がつくかもしれない。

私も動くのでしょうか。

まだ他にもあるがこの3つが主に私を悩ませていることである。

ともかく出来ることからやっていくしかないか。

私は立ち上がりお茶でも飲もうかと準備をしようとして

ピリリリリ、ピリリリリ

携帯電話がなる。

またかと思いながら

「もしもし、エミヤだが」  
いつもと同じようにでた。

「シロウか？我だ。オフィス。今から行く。」

「は？今なんと？」

予想外の人物に思わず聞き返してしまった。

日本に来る少し前からまるで連絡が来なかったのに突然こちらに来ると言うのだ。

この場所など教えていないのにどうやってと聞こうとしたのだが

「だから今から行く。と言うか着いた。」

「……………」

私は無言で立ち上がり玄関まで早歩きで移動し玄関を開けた。  
するとそこには

「シロウ、久しい。」

相変わらずの黒いゴシック衣装に身を包んだ少女、オフィスが立っていた。

「……君にはまだ住まいを教えてなかった筈だが？」

「これ」

オフィスは携帯電話をつきだして見せ

「GPS」

と言つて携帯電話をつきだしたまま片手を腰にあて胸を張った。

「……………そうか」

彼女は本当に龍なのだろうか

\*

オフィスを家に招き、丁度良かったので昼食を一緒に取った。驚いたのが準備をしていた時にオフィスが無言で手伝いだしたからだ。

しかも中々に手際が良かった。

意外、と言つては彼女に失礼だが意外である。彼女の見た目で意外というわけではなく彼女が龍であるから意外なのだ。

料理が出来る龍、シユールだ。

思わずセイバーが料理をしている所を想像してしまった。

6mを超える体でエプロンを着けてフライパンを持つ白銀の龍を。

微笑ましい絵である。かつシユールである。

ともかくそうして昼食が出来上がりそれを頂いて現在お茶を飲んでいたのだ。

「ん、美味」

ぽつりとオーフィスが眩く。

「そうか、それは良かった。

それはそうと突然どうしたのかね？」

今まで何をしていたのかも気になるが、それよりも突然来たことのほうが気になった。

「シロウのご飯を食べに来たのとお茶を飲みに来た。後は」

次の言は私の悩みを解決させる糸口であり同時に深くするものであった。

「墮天使の人柱、コカビエルが聖剣計画の残党と動き出した。この街に向かつてる。

シロウなら問題無いだろうが気をつける。シロウが死んだらご飯とお茶が飲めなくなる。」

なんたることだ。

コカビエルと言えば聖書にも記される墮天使。きっとかなりの力をもった存在だ。

さらには聖剣計画の残党。

厄介なことだ。

だが同時に丁度良い。

上手く解決出来れば祐斗君の問題も同時に解決出来る筈だ。

「オフィス、情報感謝する。

お礼と言っては何だがデザートはどうかね。  
今から作ると思うのだが。」



「ん、食べる」

この後デザートを食べ一休みしてからオフィスが帰ると言うので彼女を送り出した。

さて、私も本格的に動くでしょう。

まずはこの事をリアス君に伝えなくてはな。

十六話（後書き）

感想待ってまーす！

## 十七話（前書き）

今回はあのキャラが出ます！

ただ今回のあの子は少しアンチが入っていますが決して私が嫌いな訳ではありません！

ただ当初のあの子はこんな感じだったかなあ、と思ったので。

好きな人達には先に言っておきます。

ごめんなさい。

## 十七話

オフィスが帰った後、電話であるが直ぐにリアス君に伝えた。

「そう、墮天使コカビエルが……」。  
情報ありがとう。シロウに伝えてくれた方にもお礼を言っておいてくれる？

後こちらからも報告があるわ。以前シロウが捕まえた神父なのだけれど逃げられたみたいなの。  
何者かが手引きしたようなのだけれど、もしかしたらこの件と関わりがあるかもしれないわ。」

「あの神父が？了解した。気をつけておく。君達も警戒を怠らないように。」

後この件についてだが部員達には君から伝えてくれ。私は私で動くただ何かあれば言いたまえ。今回は戦線であろうと雑事であろうと最大限に力を貸すことを約束しよう。」

「ええ、ありがとう。シロウには情報収集を頼みたいのだけれど大丈夫かしら？一応お兄様にも連絡はしておくからおおよその情報は手に入ると思っただけだけど細かい所まではね。だからお願い。」

「了解した。  
後は怪しい人物がいたら牽制くらいはしておこう。  
ちなみに君はどうするのだ？」

『私は各方面にこの情報を流すわ。後は拠点になると思われる場所の防衛強化かしら。』

そつだ、シロウは学校どうするの？一応出張って形にすることは出来るわよ。』

「それも考えたがやめておこう。  
だが当分授業には出ず事務処理だけして早退しようと思うのだが。  
いきなり私が抜けてしまうと流石に他の先生に負担がかかってしま  
うからな。」

『それもそうね。わかったわ、学校には私から話を通しておくから  
シロウも情報収集をお願いね。』

「ああ、頼む。  
とりあえずはこんなものか。  
では私は早速行動開始する。何かあれば連絡したまえ。」

『わかったわ。  
じゃあ失礼するわ』

電話が切れたので携帯電話をしまい立ち上がる。

まずはこの地域一帯のパトロールでもするとしよう。あの神父でもいればまた捕まえて吐かせるのだが、まあそんな都合の良い話は無いか。

実は少し前に祐斗とフリードの戦闘がありました。祐斗は報告しなかったため誰も知りません。

\*

私の行動開始から既に2日が経つ。めぼしい物や人物は見つけられ無かったが街のいたるところに魔術的な痕跡や魔力または魔力に似た力の残滓を発見した。

私以外の調査員かもしれないが悪魔ならば純粹な魔力だけでそれに似た力は使わないであろう。

別の可能性も十分にあり得るがオフィスの情報は正しいとみて問題ないであろう。

後はあまり有力な情報は得られなかった。

私の方はだが。

それと言つのもリアス君に教会の聖剣使い接触を計ってきたのだ。

その聖剣使いの一人がどうやらイツセイ君の幼なじみだったらしく

昔引越していららい海外で過ごしていたらしい。

それが昔住んでいた場所に来ることになったのでついだに幼なじみに会って行こうとしてイツセー君がリアス君の眷属と知り接触してきたのだ。

そして現在、私も呼び出され、リアス君達オカルト研究部部員と顧問の私、教会の聖剣使いの紫藤イリナとゼノヴィアによる面談もとい交渉が行われている。

彼女達の目的は聖剣の回収。

エクスカリバー

私のいた世界とは違い、このの《エクスカリバー》は7つに別れてしまつたらしいのだ。それはカトリック、プロテスタント、正教会で各二本づつ保持されていた。のこりの一本はかつての戦争、つまりは私がこの世界に来るきっかけになつた戦争の際に失われてしまつたらしい。

そしてその内の三本、各教会から一本づつ奪われたようなのだ。

犯人はわかっているようで堕天使の一柱コカビエル。

既にこの街に潜んでいるらしい。

彼女達はその奪われたものの回収または破壊のためにこの街まで来たのだ。

そしてリアス君への交渉事。それは悪魔側は手を出すな、らしい。正直ふざけた話だ。

この街はリアス君の管理区域、つまりはリアス君の家に等しい。そこに無断とは言えないが上がり込み、挙句自分達のする事に手を出すのである。

どうやら教会側は悪魔が堕天使と手を組む事を懸念しているようだ。

これを聞いたリアス君は

「……………」

うむ、キれているな。その目は細まり、瞳には冷たいものが宿っている。

勘弁して欲しいものだ。彼女の怒りが収まらない場合、高い確率で私も巻き込まれるのだ。

……………そろそろ私も会話に参加するでしょうか。今まで少し離れた場所、部室の入口付近で聞いていただけであったが実に聞くに耐えない。

これは交渉とは呼べない。命令である。

リアス君ならば彼女だけでも乗り越えられるであろうが少し力を貸しておこうか。

私は歩き出しリアス君の後ろに立つ。

突然の行動にリアス君以外の皆が反応するが無視した。

どうやらリアス君にはそれなりに信用を得ているようだ。私が何をするのかわかったのだろう。

では期待に応えられるように頑張らせてもらおうか。



「先ほどから話を聞いていれば実に君達教会は横暴なのだな。」

「……あなたは？」

ショートヘアの緑のメッシュが入った少女ゼノヴィアが問いかける。

「私はエミヤシロウ。この学園の教師でこの部の顧問だ。  
後一応言っておくが私は人間だ。」

「その人間の教師が私達に何の用かな？関係無いものが話に入って欲しくないんだけど。」

「君は馬鹿なのか？」

私は少々あきれながら言う

「……一応聞いておくけど何でかな？」

「それがわからないから馬鹿だと言っただよ。」

ただの顧問ならこの場にいる必要は無い、つまりは関係者ということだ。」

やれやれとあえて馬鹿にするような表現をして告げる。未熟な者な

らこれで激昂するのだが彼女は未熟者ではないらしい

「そう、それは失礼したね。」

それで私達教会のものの言いが気に入らないみたいだけど何か問題でもあるのかな？」

まだまだ甘いかな。

「問題も何も問題だらけだと思うがな。」

仮に君達が逆の立場ならどうかね。この要求を飲めるのか？無理だろう。

リアス君にしても同じことだ。この場合はこの区域の立ち入り許可と墮天使と手を組まない事への嘆願だけで済ませておくべきだったのだよ。」

「それもそうだね。少し訂正しよう。」

リアス・グレモリー殿、この街の管理者のあなたにお願いがある。

この街での活動許可が欲しい。許可を貰えた場合、私達の邪魔をしない限り私達からも手を出さない。

そしてもう一つ。墮天使と手を組まないで欲しい。

これならどうかね？」

中々理解が早くて助かる。隣の少女も

「そうよね、さっきの言い方されたら普通怒っちゃっわね。」

同意見のようで何よりだ。

「ふむ、私が言ったままではあるが良いと思う。  
それでリアス君はどうかね。」

上手く話の流れを持っていったと思うがさて、リアス君的にはどうなのか。

「……………それなら問題無いわ。  
ただこちらからも要望があるわ。」

出来る限り戦闘場所を今から指定する場所で行なって欲しいのよ。」

これにゼノヴィアが少し不思議そうに伝える

「それは良いけど理由を聞いても？」

「私達も別口でコカビエルの情報を得ていたの。  
それでこの学園を始めとして複数の場所に結界を張ったの。その結界は戦闘開始と共に発動されるタイプの物で外に影響を出さないた

めのもの。あなた達だつて一般人を巻き込みたくは無いですよ？」

「成る程ね、それが本当なら要望に応えよう。」

ただそれは信用できるのかな？君達が既に墮天使と通じていて私達を始末するための罠かもしれない。そうだろ、魔王の妹さん？」

彼女の警戒は当然のこと。それがわかっているのだからリアス君は怒る事なく応えた。

「私が魔王の妹と知っているってことは相当上に通じた者みたいね。わかったわ。なら改めて言いますよ。」

私は墮天使とは手を組んでいないし、組まない。絶対によ。このグレモリーの名にかけて。魔王の顔に泥を塗るような真似はしない。これは契約と取ってもらっても構わないわ。」

絶対の自信と意思を込めて言った。

「どうやら信用しても良いみたいだね。一応聞いておくけどイリナはどう思うっ？」

ゼノヴィアは納得したようだが彼女の言ったように一応相方にも問う。

「私も良いと思うわよ。悪魔にとって契約は絶対、そうでしょ？リアス・グレモリーさん」

彼女も同意見のようだ。そして確認の意味を込めてさらにリアス君に問う。

「ええ、悪魔は契約を得て生きているもの。契約を破る者に悪魔を名乗る資格はないわ。」

リアス君も当然のように答えた。

相手も納得したのだろう。彼女達はリアス君の要望に同意したのだ。  
った。

\*

あの後リアス君の指定する場所を地図に書き込みゼノヴィア達にそれを渡した。

そして簡単な情報交換をして彼女達はここから去ろうとして彼女達の視線が集まった。アーシアにだ。

「兵藤一誠の家で出会ったとき、もしかと思ったが、《魔女》アーシア・アルジエントか？まさか、この地で会おうとは」  
ゼノヴィアが言う。

《魔女》と呼ばれアーシアが体を震わせる。当たり前だアーシアにとってその言葉は辛いものだ。

紫藤イリナもそれに気付いたようでアーシアを見て言う。

「あなたが一時期内部で噂になった《魔女》になった元《聖女》さん？悪魔も癒す力を持っていたら面白いわね？追放され、旅人の男と何処かに流れたと聞いていたけど、悪魔になっているとは思わなかったわ」

昔のアーシアならここで反応に困っていたかもしれない。しかし今のアーシアはそんな弱くはない。現に

「そうですね。確かに私は《聖女》と呼ばれていましたし、最後には《魔女》として教会を追放されました。

でも私はお兄様に出会いました。たくさんの人を笑顔に出来る素晴らしいさを知りました。

そしてイツセーさんや部長さん達に出会うことができました。

悪魔になって御祈りや聖書は読めなくなってしまいましたが、それでも私は幸せです！」

そう力強く告げた。この言に少し気圧されながらも紫藤イリナは応える。

「そ、そう？まああなたが良いなら私は良いのだけれど。

ああ、後安心して。ここで見たことは上には伝えないから。《聖女》《アーシアの周囲にいた方々に今のあなたのことを話したら、シヨックを受けるでしょうからね」

「……………」  
紫藤イリナの言葉で流石にアーシアは複雑そうな表情を浮かべた。

想像してしまったのだろう、その状況を。

思いだしたのだろう、あの教会を追い出された時の事を。

私は待ったをかけようとしたが彼女達の言葉は止まらなかった。

「しかし悪魔か。《聖女》と呼ばれた者。堕ちるところまで堕ちるのだな。まだ我らの神を信じているのか？」

この言に私の中から何かがつつつと沸き上がるのを感じた。

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が主を信仰しているはずは

あり得るわね。さっき彼女は御祈りや聖書が読めないとか言ってたし」

「ああ、それにその子から信仰の香りがする。私はそういうのに敏感だね。

そうだろ？アーシア・アルジェント。」

その問いにアーシアは悲しそうに言う。

「……………捨てきれないだけです。今まで信じてきたものですから。」

アーシアには笑っていて欲しい。それは彼女と出会った時から願い続けていたことだ。

しかし何だ？今のアーシアのあの表情は何だ？  
何故アーシアはあんなに悲しそうにしている？

私の中で疑問と沸き上がる。怒りが渦巻いていた。

そしてゼノヴィアは布に包まれた《破壊の聖剣》をアーシアに向けて

「それならば、今すぐ私達に斬られると良い。今なら神の名の下に  
断罪しよう。罪深くとも我らの神は救いの手を差し伸べてくださる  
はずだ」

そう言ったのだ。

そして次の瞬間

「触れるな」

イツセー君がアーシアを庇うように前に立った。  
そして告げる。

「アーシアに近づいたら俺が許さない。あんたアーシアを《魔女》  
だと言ったな？」

「そうだよ。今の彼女はそれだけの存在だと思っけどね」

ことをかいて良く言う。私もそろそろ我慢出来そうもない。

「ふざけるなっ！救いを求めたアーシアに手を差し伸べたのは神様



じゃねえだろ！！シロウさんじゃねえか！

アーシアの最初の友達だってシロウさんらしいじゃねえか！家族になつたのだからシロウさんだ！

全部！全部シロウさんのおかげだ！

てめえら教会の人間は人を何だと思つてやがる！？

いくら《聖女》と呼ばれる存在だってなあ、人間なんだよ！

人間なら寂しいのは嫌に決まつてる。孤独は人を殺すんだよ！」

イツセー君が私の怒りを代弁するように叫ぶ。

しかしゼノヴィアは淡々と

「まったく、何を言うかと思えばそんなことが……………」。

君は《聖女》に友人が必要だと思ふのか？

《聖女》に必要なのは分け隔てない慈愛と慈悲だ。他者に友情や愛情を求めた時に《聖女》は終わる。それに孤独と言つたね。それは無い、彼女は神から愛を受けていたはずなんだ。つまり彼女は神の愛があれば生きていけたはずだ。

そして彼女を救つたのは神ではなく、そちらの教師だつたかな？彼が救つたらしいけど、だから何だ？大した美談だが、それは彼女が神の救われる価値も無かつただけの話だろ。《聖女》ならばそんなはずはないよ。

つまりアーシア・アルジエントは最初から《聖女》を名乗る資格はなかつたのだから」

もう、無理だな。私は自分の家族をここまで言われて黙っていられ

るほど大人では無いのだよ！

「ふざっ

」

「イツセイ君」

何かを言おうとしたイツセイ君を止め、彼の方に手を置いて彼を見つめる。

「何ですか！俺はまだ」

そう言いながら振り向いた次の瞬間

「っ！……！」

イツセイ君は驚愕した。

それはそうだろう。なにせ今の私は怒りを抑えるつもりは無い。故に手を上げるつもりは無いが我慢するつもりもない。

「イツセイ君。アジアのために怒ってくれてありがとう。だが私にも言わせてくれないか？」

「え、ええ。わかりました……………」

私の気迫が伝わったのだろう。そう言いながら一歩下がるイツセイ君。

この部屋は私の怒気で満たされている。一人祐斗君を除き皆が冷や汗をかいていたが私に抑えるつもりは無かった。

祐斗君からは濃密な殺気が漏れているが、彼はアーシアの事だけではなく、彼女達教会関係者と聖剣が関係しているのは以前のリアス君の説明でわかっている。

しかし今は私自身のことを優先させてもらおう。

「アーシアを切り捨てた教会の人間が良く言う。

随分と教会は勝手なのだ。散々《聖女》と持て囃し、悪魔が治療できれば《魔女》だ。

神の愛？はっ、聞いて呆れる！

その神の愛が何をした？何も神を知らない小娘共が妄想で神を語るな！！」

怒声が部屋に響く。

神を殺した私が言うことでは無いかもしれない。だが我慢ならなかった。

アーシアのこともそうだし、神のこともだ。

私も神と話したのは少しのことだったが、彼は悪魔を治療出来るだけで見捨てるような人物では無かった。

彼は世界を思い、悪魔と手を組むことも考えていたのだから。

「ず、随分な物言いだね。まるで神にあったかのような言葉だ。それにあなたは人間か？さっきまで気付かなかったけど今ならわかるよ。」

その霊核の高さは人間では異常だ。

天使様クラスだよ、それは。」

ゼノヴィアが私に問う。だがそれに答えるつもりは無い。

流石に全てを言うつもりは無いので多少ぼかして話すことにした。

「私の事はどうでも良いのだよ。」

後神に会ったようだ、だったか？

ああ、あるさ。私がここに入るのも、私に神器を与えたのも神達のみだからな！」

「そんな馬鹿な！！信徒である我らですら声も聞いた事も無いのに！それに神等とは何だ！？我らの神はただ一人、絶対唯一神だ！」

「それに答える義務は無い！信じたく無ければ信じなくてけっこう。だが事実だ。」

その私から言わせれば貴様等の神が以下に自分勝手なことか！自分で造り人に宿した神器で悪魔を治療したら異端。

何が神だ！それは神では無く、教会の上役どもが、または天使が都合の良い様にねじ曲げた妄想に過ぎん！」

私の言葉に怯むゼノヴィア。しかし彼女も反論してきた。自分の信じる神を否定されたのだから当然かもしれない。

私達の言い争いが続く中

「シロウ！もうやめ」

リアス君が止めに入ろうとしたのだが、祐斗君が私達の前に出た事で遮られた。

「僕はシロウさんを信じるよ。それに丁度良い。僕が君達信徒の相手しよう。」

君達も鬱憤を晴らしたいだろう？」

祐斗君は濃密な殺気を放ち剣を携えていた。

「誰だ、君は。」

ゼノヴィアの問に祐斗君は不敵笑う。

「君達の先輩で失敗作だよ。」

君達風に言わせると神の愛を得られなかった者さ。」

次の瞬間、部室内に無数の魔剣が出現した。

「じゃあ外に行こうか。イツセイ君も行こう、君も大分鬱憤がたまってるんだろ？」

ただシロウさんは勘弁して欲しい。あなただと一人で終わらせてしまいそうだ。」

そして祐斗君は歩きだす。それに続くようにゼノヴィアと紫藤イリナも歩き出した。

指名されたイツセイ君も

「お、おい木場！ちょっと待ってって！俺はシロウさんが言ってくれたからもうそこまで」

行ってしまったのだった。

私は祐斗君らしくない行動に啞然としながらもリアス君に聞く。

「……………行ってしまったがどうする？止めるか？」

「はあ。今さら無理でしょ。あちらもやる気みたいだし。

この際とことんやらせましょう、私達は周りに見られない結界と被害が出ない結界をはりましょう。

シロウには悪いんだけど……………」

「わかっている。もしもの時に止めに入るのだろうか？」

先ほどまでの怒りがどこかに行ってしまう程に事態は急速に進んで行った。

「ええ、お願い」

そして

「「はあ」「」

私達はため息を溢したのだった。

## 十七話（後書き）

いかがですか？

今回はバトルは少し飛ばしてその先から行こうと思います。

それと今から移動中のシロウとアーシアの会話になります！ではどうぞ！

\*

「お兄様。お兄様は主と会ったことがあるんですね！凄いです！」

「アーシアは私を信じてくれるのか？」

「当たり前です！お兄様が嘘をついたかどうかなんてわかつちやいますよ。」

「くくく、そうか。」

「はいっ！それより主はどのような方だったんですか？」

「ああ、厳格な話し方をする中々に愉快な人物だった。

そして世界を真に思う人物。正に神だった。

その神を知る私から言わせればアーシア、君は何も悪くないさ。」



「へへへ、ありがとうございます。  
主の下を離れてしまったのは悲しいです。でもその代わりと言っては何ですが、お兄様達に出会えました。だから私は幸せですよ。  
さっきみたいに悲しいことはありませんけどお兄様やイツセーさんが守ってくれましたし。」

「ああ、いつまでも守るさ。君は私の家族なのだから。」

む、そろそろ着くな。ほらアーシア。イツセー君に激励でもかけてきたまえ。彼は君のために怒り、試合とはいえ今から闘うのだから」

「はい！じゃあ行って来ます！」

「ああ、行ってこい。」

\*

こんな感じですかね。

ではまた次回で会いましょう！

## 十八話（前書き）

投稿です！

後この作品のPVが気づいたら10万を超えていました。

読んで頂いた皆様に感謝を！

## 十八話

戦闘もとい、試合が始まった。

イツセー君は紫藤イリナ君と、祐斗君はゼノヴィア君と対峙している。

まずイツセー君だが中々に良い動きをする。紫藤イリナ君の攻撃を完璧なまでにかわし、時折隙をみては牽制の一撃を放つ。ダメージは与えていないが相手の動きを鈍らせるには十分だ。そしてこれは神器で力を溜めている状態での話だ。

紫藤イリナ君もまだ様子見のようだが警戒は怠っていないようだ。この試合、どちらが勝利してもおかしくないだろう。

次に祐斗君の試合だが凄まじい。凄まじいのだががむしゃらすぎる。戦闘スタイルはいつもと同じスピードと手数の高さを利用した高速の全方位攻撃。それに加え以前教えた体全体を使用した奇襲。時には足に、肘に、口に魔剣を生み出しそれを振るう。方法としては見事だ。

普段の彼ならかなり有効だろう。しかし今の彼はただ攻め続けていた。まったくもって攻め方に緩急や虚実がない。

祐斗君の技量ならそれでもある程度なら問題ないだろう。

しかしゼノヴィア君はある程度どころでは無かった。

聖剣の力もさることながら彼女の戦闘能力の高さは普段の祐斗君とさして変わらない。

故にゼノヴィア君は全て受け、時には避け、捌き、未だ傷どころか疲れすら見せていない。

祐斗君にいたっては傷は無いものの疲れが徐々に見えはじめてきた。

だが彼は止まらない。まるで修羅の如く攻め立てる。高速は神速に、全方位攻撃が一撃必殺に変わっていく。

一点集中は確かにスピードもパワーも上がる。しかしそれは祐斗君にとっては悪手にしかならなかった。

故に

「私の勝ちだ。」

彼はゼノヴィア君に敗北したのだった。

こちらの勝負は終わった。後で話をしようと思つが、さて、今の彼が話を聞いてくれるか。

まあ今は良い。今は未だ戦っているイツセー君だ。

さて彼はどうなっているのかな。

私は視線を向けると



ズバアアアアンツ！！

「っ~~~~っ~~~~！！いつてええええええ！！

はっ！！この痛み方は虎竹刀！？

や、やべっ！逃げっ」

イツセー君に攻撃もといツツコミを入れ

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」

イツセー君を拘束した。その際虎竹刀が邪魔だったので放置していたのだが

「うおっ！？何これ！？う、動けない？え？小猫ちゃん？何で虎竹刀拾ってこっち来るの？」

「……最低です。えいつ！」

ドガアアアアン！！

「ぎゃああああああああああ！！！」

虎竹刀を拾った小猫君に制裁を受けていた。自業自得である。

あちらは小猫君に任せておくとしよう。

私はスーツの上着を脱ぎ

「え？何で？」

紫藤イリナ君に羽織らせた。

トレス・オン  
「投影開始」

そして私の魔術の起動キーを呟く。

投影するのは先ほどまで彼女が着ていたゼノヴィア君と同じデザイン  
の衣装。

それを紫藤イリナ君に渡し

「イツセー君がすまなかった。とりあえずこれを着るといい。それ  
まで私の上着は着ていて構わない。」  
彼女に謝罪した。

彼女は困惑しながらも

「あ、ありがとうございます。」

え？でも何であなたが謝るの？

それにこの服はどこから？」

礼と疑問をぶつけてきた。

「私が謝るのは簡単な理由だ。まず1つは私がこの学園の教師である  
からだ。ここでの監督責任は私にあるのだよ。」

もう1つがイツセー君を鍛えたのは私でね。師匠ってわけではない  
がそれでもな。

そして服の件はノーコメントで。まあ手品か何かだと思ってくれた  
まえ。」

流石に投影の事は言わないほうが良いと思うので、そこだけはぐら





「と、とりあえずわかったわ。

この服はありがたく使わせてもらっわ。それにしてもあなたは私達が嫌いなんじゃないの？何でここまでしてくれるの？」

と、紫藤イリナ君。

「別に君達が嫌いな訳ではないさ。

私が腹をたてたのは君達の考えと物言いであって君達自身は決して嫌っていないのだよ。

それに困っている人は放って置けなくてね。責任を感じたのも事実だが、もし関係無くとも私は同じ行動をしたと思うぞ。」

本心を話した。

今言ったように、別に彼女達が嫌いな訳ではない。

アーシアの件で腹が立ったのは事実だがそれは教会に属する者達の考えが嫌いな訳であり彼女達個人についてはわからないので嫌いでは無いのだ。

それに好き嫌いで困っている人を放置など出来るはずが無い。そんな事では正義の味方を名乗れる訳が無いのだから。

「あなたは何者？」

私達と同じ人間なのにその霊核の高さ。

私と同等に戦うイツセー君を一瞬で鎮圧する強さ。

さらには神に会ったことがあると言っじゃない。

本当に何なの？」

何者、か。そう聞かれれば私はこう答えるしかない。

「私か？私は」

いつもと同じだ。いつだってこう答えてきた。

「正義の味方」だ。」

とな。

さて、彼女はどのような反応をするのだろうか。

今までたくさんさんの反応を見て来たが基本的に好意的な笑いや、馬鹿にする笑いに別れていた。

実はこの反応を見るのが密かな楽しみだったりする。

さあ、彼女はどのような反応を見せてくれるのか。

「……………ああ、主よ」

……………祈りでした。

何故私が名乗って祈りだす？

この反応は初めてだ。

「私にこの方を遣わせて頂き感謝します。正義の味方、ああ、何て甘美な響き。」

さらにこの方は主にお会いした事がある。つまりは神の使者様なのですね！

私の祈りが主に届いたのですね！」

いつの間にか神の使者になっている。

確かにそうとも言えるかもしれないが正確には神と魔王の使者だ。しかもその神と魔王を殺したのは他でもない私なのだが。

それから彼女の独白と祈りは続く。

どうやら紫藤イリナ君は自分の信仰に酔うタイプらしい。だがいつまでも裸にスーツは不味い、そろそろ着替えてもらわなくては。

「御祈りの最中に失礼する。紫藤イリナ君、そろそろ服を着たほうが良いのではないかね。風邪をひくぞ？」

私は未だに祈り続ける紫藤イリナ君に声をかけた。

紫藤イリナ君はピクリと一瞬震え私を見た。そして

「イリナです！わざわざフルネームで呼ばないでください！私とあ

「あなたの仲じゃないですか！他人行儀です！」

「どんな仲だ、どんな。」

「いつの間にか話し方が敬語になってるし訳がわからない。」

「名前で呼ぶのは構わないが、私と君は今日のはじめて会ったと思うが、いったいどんな仲なのだ？」

「純粋な疑問である。しかし紫藤イリナ君、イリナ君は何故？といったような驚きの表情をする。こちらが何故と言いたい。」

「どんなってあなたは主に遣わされた使者様ではないですか！私の祈りが届いた結果です！」

「だからそんな悲しいこと言わないでください！」

瞳に涙を溜めて言わないで欲しい！私が悪いように思えてくる。と、そこで助け船が入った。

「イリナ、その辺にしといたほうが良い。彼も困っているし、まずは服を着ろ。」

「ゼノヴィア君だ。」

「ゼノヴィア？でも私、彼は使者様だと思っのよ。」

「そうかもしれないけど、違うかもしれない。」

「彼が嘘を言ってるようには見えないけど、もしかしたら高位の存在に会って神と勘違いしたかもしれない。まあどちらにせよ人の身で」

そんな存在に出会えることも凄いいことなんだけどね。」

「うっっっ、でもっっっ。」

「まあいいから服を着る。」

「……………わかったわ。」

そうしてイリナ君は服を着るために旧校舎に移動して行った。

その後着替え終わり戻って来たイリナ君はゼノヴィア君に引きずられるように去って行ったのだった。

頼むから捨てられた猫の様な目で見ないで欲しい……………。

ちなみにイツセー君だが

「む、無理……………。もう無理。こ、小猫ちゃん、お願い、もう……………  
ぎゃあああああああああああああああ！また来たアアア

アアアアアアアアアアア！！！！」

「……………問答無用。」

バシイイイイイン！

小猫君による制裁が続いていたのだった。

うむ、そうだな

「小猫君、その竹刀は君にあげよう。  
有効に使ってくれ。」

「……………ありがとうございます。」

バシイイイイン！バシイイイイン！バシイイイイン！！バシイイイイン！！！！

「ちよ！ぎゃあああああああああああ！こ、これが落ち！？  
い、いやだあああああああああああ！！！！！！」

小猫君による制裁が続くのであった。

十八話（後書き）

感想待ってます！

## 十九話（前書き）

どもっす！投稿です！

今回は戦闘モドキがあります！  
とりあえず本編どうぞ〜！



## 十九話

走る。

ただ走る。

学園に向けてただただ走る。

周囲は暗く、街灯が点々と点き、静まりかえった夜の世界。

そして私はその世界を走り続ける。

何故私がこの様な時間に走り続けるのか。

事の始まりは今日の放課後にまで遡る。

ゼノヴィア君とイリナ君との面会から数日後のことだ。

私は、いつ始まるかもわからない堕天使コカビエルとの戦いの為に情報収集と不審者の探索ならびに奴等の拠点探索を行っていた。

しかし中々、有力な情報は手に入らず拠点もみつからない。

不審者は数名発見し拘束に成功するも、関係の全くないものや、私が堕天使と口にした瞬間に自害するものばかりで大した成果はあげられなかった。

そんなおりに一本の電話が入った。発信者はリアス君。彼女の用件、と言うより報告は現状についてである。

リアス君の報告では、イツセー君達は聖剣破壊のために動き出しゼノヴィア君とイリナ君にコンタクトを取ったらしい。

そして目的の一致した彼らは、聖剣破壊のために動き出した。これはこの前の休日の話である。

それからというもの、時間が空く放課後に聖剣探索を行なっており、ついに今日の放課後に聖剣を持つ白髪の少年神父、フリードと戦闘を行なったらしいのだ。

結果的にフリードには逃げられ、その後を祐斗君、ゼノヴィア君、イリナ君が追って行き、行き違いになる様に異変を感じたりアス君がソーナ君と共にその場に到着した。

そしてイツセー君達に事情を聞き、それが私に伝わったのだ。

その場にいたイツセー君、アーシア、小猫君にソーナ君の眷属、匙君を保護（勝手な行動をしたお仕置き、イツセー君と匙君のみ）したのだが、追って行った3人が行方不明。故に私が3人の捜索を行なったのだ。

セイバーと二手に別れ私が地上から、セイバーは上空から捜索を行い、祐斗君とゼノヴィアは発見できた。

しかし二人は余程慎重に隠れていたようで、その時には日付が変わ

っていた。

そして見つからなかったイリナ君だが、彼女は捕まってしまったよ  
うなのだ。

フリードを追いかけた3人は、奴等の拠点までの追跡に成功した。

しかしそこでコカビエルと遭遇し、何とか逃げる事が出来るもの  
の、イリナ君は取り残されてしまい私が2人を発見するに至った。

その話を聞いた後2人を帰して、私はイリナ君救出の為にその拠点  
に向かった。

場所は町外れの廃工場、

しかし私が到着した時にはそこは誰もいなかった。間違えたのかと  
思い周辺の探索に赴こうとして、再び電話が入った。発信者はまた  
もヤリアス君なのだ。様子がおかしい。

どこか緊張したような、忙しない声。

だが彼女の話聞いて驚愕し、同時に納得した。

コカビエルが現れた。

それが彼女からの報告だった。

リアス君がイツセー君とアーシアと寝ていると（アーシアはイツセー君の家に泊まっていたらしい。この事は後でしつかりイツセー君とO・H A・N A・S H I しなくてはな）不意に気配を感じて外を見ると、そこには白髪の少年神父フリードと墮天使コカビエルがいたらしいのだ。

奴等はリアス君に闘争と言う名の、口答ではあるが挑戦状を叩きつけ奴等は去って行った。

その際に捕らえられたイリナ君を返されたようなのだが、イリナ君はボロボロでとても危険な状態だった。

急ぎアーシアの神器で治療するも意識が戻らず、決戦には間に合いそうに無かった。

故に彼女はイツセー君の家に置いて行き決戦の場所、駒王学園に向かいながら私に電話を寄越したのだ。

私も直ぐに学園に向かおうとしたのだが、それは出来なかった。

「……………抜かった。囲まれている。」

敵であるコカビエルの部下と思われる墮天使や人間に囲まれていたのだ。

どうやら私の存在に気がついていたようで待ち伏せされていたらしいのだ。

そして戦闘が始まった。数にして墮天使が5柱に悪魔祓いが30程。そこそこ多いが幸いなことに大した実力者はいなかった。

故に難なく撃退出来たのだが、思いの外時間がかかってしまった。

急ぎ学園に向かうために走り出す。普段ならばセイバーに乗り一気に駆けつける所のだが、コカビエルの部下があれだけとは限らないので目立つ移動はしなくなかったのだ。

もしそれらを引き連れてしまえばイツセー君達を助けるどころか、逆に敵を増やしてしまうことになってしまうので、こうして自らの足で学園に向かっているのだ。

故に走る。

ただ走る。

目的地はまもなくだ。

だから

「皆。死ぬなよ!!」

ひたすらに走り続ける。

祐斗 side

ようやく。

ようやく念願が叶った！

長年僕を復讐に駆り立てた存在、《エクスカリバー》を破壊する事が出来たんだ！

僕一人の力だけじゃ無かったけど、あの聖剣を僕の《禁手》に至って得た《双覇の聖魔剣》で打ち破る事が出来たんだ！

部長達の協力もあった。

ゼノヴィアの力もあった。

そして死んでいった同志達、聖剣計画の実験体の思念が僕の力になり、それが僕に聖剣の適正を与えた。故に《聖魔剣》。本来なら相反する属性。だけど僕はそれを得て《エクスカリバー》に勝ったんだ！

だけどそれで終わりでは無い。

堕天使コカビエル。

聖書に記される堕天使で、《神の子を見張る者》クリュロの幹部。

そして僕の本当の敵、バルパー・ガリレイ。  
当日、聖剣計画の代表にして《皆殺しの大司教》と呼ばれた男がいる。

だけどバルパーはコカビエルに殺された。

呆気ないものだった。

光の矢で一刺しだ。

そしてバルパーの死後、コカビエルとの戦闘が始まる。

威圧感はライザーの比ではない。

その力もあんなものじゃない。

でも負けられない！

やっと。やっと僕はこれからを歩み出せるんだ！

部長の！リアス・グレモリーの眷属の《騎士》として仲間達とこれからを！

でもコカビエルは強かった。強大だった。

イツセー君の力を譲渡した部長の一撃も、僕の《聖魔剣》とゼノヴィアの《デュランダル》の連携もコカビエルには通用しなかった。

強すぎる。

こう言うのも何だけど流石聖書に記される墮天使だ。

でも、それでも負けられない！

せめて魔王様の助けが来るまでは。

せめて僕達の先生、《正義の味方、エミヤシロウ》が来るまでは絶対に死ねない！

だから腕が無くなるうと、足が無くなるうと闘い続けてやるんだ！

僕達はコカビエルに挑み続け

コカビエルが突然語り出した。

神の死を。



それは誰にとっても驚愕の事実だった。

部長達のような比較的、あまり関係無いものにとってもそれは変わらぬ。

僕にとっては研究施設にいたころ神に祈っていた僕達は何だったのだろうか。

そして今も信仰しているアーシアさんは崩れ落ち、現役の信徒ゼノヴィアも力が抜けたように頂垂れていた。

くっ！このままじゃ不味い！そう思った刹那

「 I am the bone of my sword .  
（我が骨子は捻じれ狂う。） 」

僕達のよく知る声が響き

「 “偽・螺旋剣”

（カラド…ボルグ）！ 」



「私か？私は」

僕達の《正義の味方》

「私は《正義の味方》だ！！」

エミヤシロウがそこにいた。

祐斗 side out

「私は《正義の味方》だ！！」

いつもと同じ名乗りをあげる。

本当は最初の一撃で仕留めるつもりで《偽・螺旋劍》カラド・ボルグを放ったのだが、どうやら直前で避けられたらしい。それでも奴の左腕と翼を抉り取る事には成功し、そのお陰かコカビエルは地に落ちた。ならば後は奴を仕留めるだけである。

「さて、貴様がコカビエルか？

私の生徒達が世話になったな。今度は僭越ながら私が相手をしよう。何、私は人間の身であるが退屈をさせないことは約束しよう。」

そう言うと同時に私は走り出す。弓は即座に破棄し、使いなれた夫婦剣「干将・莫耶」を手にしている。

「ふざけるなよ！俺の腕と翼を消し飛ばしておいて退屈はさせないだ！」

不意打ちで俺を傷付けたくらいで調子にのるなああああああ！

「！」

コカビエルが叫び残った手に光の槍が形成された。

そして

がぎい  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
ん  
！！

双剣と槍がぶつかり合う。

やはり強い。

だがこの程度なら！

「ふんっ！」

「ぐううっ!？」

どうとでもなる！

「くくく。貴様は本当に聖書に記されし墮天使か？

何だその槍捌きは？英雄クー・フリーンを少しは見習え。

奴の槍はもつと早かった！もつと力強かった！

貴様は人間に劣るのか？ほら答えてみる、墮天使コカビエル！」

私の挑発にコカビエルは驚きの表情を浮かべた。

「貴様！あの怪物を知っているのか！

人間にしてあの強さを誇る英雄を!？」

「

成る程、流石は太古より生きる墮天使。クー・フリーンを知っていたか。

「貴様は本当に何者だ？

いや、待てよ……………クー・フリーン……………英雄……………死者……………

……………そうか!!貴様は奴と同じ英雄か!

ならば貴様の強さにも納得がいく。」



「 I am the bone of my sword .  
（我が骨子は捻じれ狂う。） 」

剣の雨を降らせる中、再びあの呪文を唱える。  
しかし先ほどよりさらに多くの魔力を注ぎ込み

「く！これで最後だあああ！！」

剣の雨が終わると同時に

「 “偽・螺旋剣”  
（カラド…ボルグ）！ 」

特大の一撃を放った！！

その一撃は地面を抉り、砕かれた剣を巻き込み、空間すらも歪ませるように一直線にコカビエルに向かう。

そしてその速度はまさに閃光。





奴は今、胸から上を残しところどころ爆発による火傷や切傷だらけだ。

人間とは違うと言っことか……………

ザッ

私はその手に干将・莫耶を投影しコカビエルに向け歩み始める。

そしてコカビエルの横に移動して告げる。

「最後だ。言いたい事があるなら言いたまえ。」

コカビエルは虚ろな瞳を私に向け言った。

「……………ふ、ふふふ。お、思い、出したぞ。き、さまは……………守護者……………だな。」

あ、の闘いで……………みと……………魔……………を、こ…した。」

っ！…こいつ！あの場に居たのか！…！

皆に今の話は!?

私は急ぎ周りを見渡した。

だが皆は大分離れた場所にいる。多分ではあるが聞かれていなかったらう。

「ふう」

思わず安堵のため息を吐いた。

いずれ話すことになるやもしれないが、少なくとも今話すことではない。何より私が聞かれたく無かった。

知られる覚悟はしているが、それにより今の生活が壊れてしまうことを私は恐れている。

それだけ今の生活が気に入っているようである。

「は、ははは………何だ………言っていないの、か? だった、ら俺が……話して……やるぞ?」

何!今はまだ

「おい！貴様等！この男は」

コカビエルがそこまで言って

「何だ、俺が来るまでも無かったな」

突如空からか声が響いた！

この重圧、この存在感！オーフィスほどでは無いにしてもコカビエルを遥かに超える力を感じた！

くっ！不味い！皆は言うまでもなくボロボロで私は傷こそ無いものの、大分力を使った。

この状態ではいくら私でも皆を守りながら勝てる自信は無い。

……………最悪、この身をなげうつても！！！！

そう思考しながら力を感じる場所に視線を向ける。

カツ!!

白い光の柱が舞い降りてきた。その白い光は一直線にこの場所に向かい、夜の闇を切り裂きながら突き進んできた。

凄まじい速度だ。

きつと本気を出したセイバーよりも速い。

そしてそれは降り立った。眼前に広がる白。

夜の闇にも関わらず全く淀みのない白。

顔まで覆われた白い全身鎧を着込み、体の各所に宝玉が埋め込まれている。

背中に備わる八対の光輝く翼は神々しさすら感じさせた。

似ている。

イツセイ君の《赤龍帝の鎧》に。

そして理解した。この者は

「白龍皇……………」

コカビエルが呟く。

《白龍皇》。イツセイ君が宿す《赤龍帝》と対をなす存在。

それが今、目の前にいる。

戦闘意欲は見られないが油断は出来ない。

今の状態で気を抜けば死なないまでも、たちまちボロ雑巾のようになるだろう。それほどの強者だ。

「アザゼルのお使いで来てみれば……………ふふふ、コカビエル。いい様だな。」

「う、う、う。さっさと、俺を、助ける……………」

「俺に命令をするな。だが、まあいい。」

コカビエル、アザゼルは大分怒っていたぞ。覚悟しておくんだな。」

そう言うと白龍皇はコカビエルの頭を掴み持ち上げた。

そして私を見て

「コカビエルはお前がやったのか？」

そう聞いて来た。

「そうだが何か問題でもあるのかね？」

何でも無いように答え、逆に質問を返した。

「いや、問題はない。ただ、世界は広いなと思ってな。

まさか人間で《神殺し》の神器を持たずにコカビエルをここまで追い詰める者がいるとはな。

ふふふ、また楽しみが増えた！赤龍帝も目覚めている！凄まじい強者の人間もいる！

ああ、本当に楽しみだ……………」

楽しみ、か。どうやら白龍皇は戦闘狂らしいな。

私は全く持って楽しみではない。むしろ平和が一番と考えている。

本当に迷惑な話だ。

その後イツセー君と2、3言葉を交わし

「次に会えるのを楽しみしている。  
俺は《白龍皇》。人間、お前は？」

「私は《正義の味方》エミヤシロウだ。」

「ふ、ふふふ、はははははははははは！成る程成る程！《正義の味方》か！ふふふ、覚えた！エミヤシロウ！  
そうか、《正義の味方》か。ああ、本当に楽しみだ！

ではまた会おう、《正義の味方》！《赤龍帝》！」

そう言い残し奴等は去って行った。

どうやら私とイツセー君は大変な者に目を付けられたらしい。

まあとりあえず闘いは終わった。  
私は皆を振り返る。

私に向かって走ってくる皆に

「闘いは終わった！私達の勝ちだ！！」

そう告げたのだった。



## 十九話（後書き）

如何でしたか？

実際にシロウならあれくらい出来そうなんでコカビエルをボコしました！

コカビエル、君はボコされる為にいるんだよ！私の作品では！！

つと、失礼。

え〜次回ですが三巻のエピローグ的な感じでいききたいと思います。

それでは次回で！

感想待つてま〜す！！

二十話(前書き)

三巻ごゆるりよ...

## 二十話

イツセー side

いきなりだが俺と木場は

「ぎゃあああああああああああ！」「くっ！ぐわあああああ  
ああ！」

死にかけていた！  
時刻は深夜つつーか朝方。場所は学校の校庭でさっきまでコカビエ  
ルと闘い、《白龍皇》と会った場所。そしてその原因は二刀流で虎  
竹刀を振るうシロウさんだ！

「そらそらどうした？イツセー君、はっきり言え！アーシアと寝た  
のか！怒らないから言え！」

「いやいやいやいや！めっちゃ怒ってんじゃん！？本当のことだけで  
言えるわけ無いって！」

「そして祐斗君は私からの罰だ、甘んじて受け入れろ！！」  
木場は自業自得だ！皆に心配かけたんだからな！

「っ！がシロウさんは何でそんな元気なのさ!？」

さっきまで戦ってコカビエルを倒したのシロウさんじゃん！

「イツセー君！ボサツとしている暇はないぞ!」

シュシュツ!!

「うわっ!うわわわわわ!」

迫る竹刀の2連撃。それを1撃目は交わし、避けた先に来た2撃目は竹刀に手を沿えて何とか受け流す。

これはシロウさんとの地獄の10日間の修行で身につけた技術!

あまりにも攻撃を食らってばかりだった俺にシロウさんが教えてくれた効率的な攻撃のかわし方。

最初は受け流す手の平でもろに受けて痛い思いをしてたけど、今なら打撃は大体受け流せるし神器で強化すれば真剣だって受け流せるんだ!

さらには目で見えなくても何となく気配でわかるようになった!

おかげでイリナに《洋服破壊》を食らわせることが出来たんだ!

ふふふ、修行中はシロウさんを恨んだけど今となってはいくら感謝しても足りないぜ！

ありがとうございますーすー！

「ほう！今のをかわせるようになったのか！」

シロウさんが関心したような声をあげる。

そうでしょそうでしょ！もうシロウさんの攻撃は効きませんよ？まあ小猫ちゃんはずり押しきられるけど……。

「ふむ、なら少しスピードをあげるか。今まで抑えすぎてやりにくかったし丁度良い。」

なぬ？今何と？スピードをあげる？抑えすぎてた？

え？え？嘘でしょ！？

ちよっ！まっ

「さあ！これはかわせるかな？」

後アーシアとの事も話してもらおうか！

え！腕が消えた！？竹刀を振るう音が聞こえな

ガガガガガガガン！！！！

「のおおおおおおおおおお！！！！！？？」

バタ

俺はその連撃を受けて崩れ落ちた。竹刀でその打撃音はヤバイですよ……………。

あ、痛みが引いた。て事はっ！！ひいつ！

……………あれ？痛みが来ない。

俺は恐る恐る顔を上げて様子を伺う。すると

「ひいつ！！！？」

「さあ、イツセイ君。アーシアとの事を君の口から聞かせて貰おう

か。」

虎竹刀が俺の鼻先に突き付けられていた！

「えと！えとえと！そ、そうだ！木場は？俺の相手ばかりしてないで木場に罰はいいんですか？」

何とかこの状態を回避しようと木場に振ることにした。

木場スマン！！でも俺も限界なんだ！

しかし俺の期待は

「ああ、祐斗君の相手はセイバーに任せた。」

裏切られたのであった。

「え？」

俺は周囲を見渡すと

「く！速くて重い！ぼ、僕の聖魔剣が碎かれるなんて！龍の爪がここまで強力とは」

「きゅきゅきゅきゅううううう！まだまだいきますよ！」

木場が6mを超える白銀の籠の猛攻を受けていた！

「つか強っ！速っ！木場が守りに徹してるとかどんだけだよ！」

「お、そつだ。祐斗君！セイバーはあまり手加減が出来ない故気を抜くなよ！」

シロウさんが思い出したように声をかける！

「おいおいおいおいおいおいおい！」

もしかして木場ヤバインじゃねえの！？

そして次の瞬間

「うわあああああああああ！！！」

木場が吹っ飛ばされた！

俺は思わず叫んでしまった

「木場あああああああああ！！！」  
と。



「ふむ、まだ早かったか？」

シロウさんがその光景を見ながら言う。

いやいや！早かったかじゃ無いでしょ！？木場吹っ飛んでるじゃん！

でも木場も普通じゃ無かった。

「ふふふ、強者がこんな近くにいるなんて。人との戦闘も良いけど龍との戦闘になれるのも悪く無いよ！」

木場が不敵に笑いながら立ち上がる！

「せっかくだ！今からなれておく事にしよう！」

そう言って走り出した！

あいつ少し変わったか？

それから木場はセイバーと激戦を繰り広げる。

そして俺は

「祐斗君は大丈夫そうだな。

ではイツセイ君。アーシアとの事を話してもらおうか。」

「はい……………」

洗いざらい吐いたのだ。

結果的にシロウさんは許してくれた。でも最後に

「私は君達の意思を尊重しよう。だがアーシアを悲しませたら、わかってるな？」

そう告げたのだ。

俺はそれにブンブンと何回も頷いた。

そして何回目になるかわからないが改めて心に誓った。

アーシアを絶対に悲しませないと。

そう心に誓ったのだった。

イツー side out

白龍皇 side

コカビエルとフリードを回収し、俺は墮天使の拠点に帰還する途中である。

その途中で俺はコカビエルを見た。

胸から上と右腕、右翼を残し無くなったコカビエルを。

その視線に気付いたのかコカビエルが俺に声をかけた。

「何だ白龍皇？俺を笑うか？人間に殺されかけた俺を。」

くくく、だが貴様とてあの人間と闘えばただではすまんど。」

コカビエルが気になる事を言った。《正義の味方》と名乗った男、エミヤが強者ということはコカビエルを見れば良くわかる。こんな

奴でも聖書に記されし墮天使だ。それをここまで追い詰める存在などそうそういない。

俺が気になったのはそこでは無い。

奴の口調は何か知っているようであった所だ。

そしてコカビエルは驚愕の事実を話す。

「何せあの男は世界の《守護者》にして、あの戦争で神と魔王を殺した。張本人だからな。」

「何だと！」

これは俺にとっても衝撃だった。

魔王は周知の事実であるし、俺は神の死も知っていた。しかしその死因までは知らなかった。

「突然魔剣や聖剣、神剣など様々な剣が嵐の様に降り注ぎ気がつけば神と魔王は肉体も残らない程にズタズタに引き裂かれていた。」

コカビエルはその時の状況を語るが俺の耳には入って来なかった。

何故なら俺は





に住むようになったことだしゼノヴィア君の事も理解しようと思う。

ちなみにゼノヴィア君を同居人として受け入れる原因はいつも同じリアス君の「説得」によってだ。

断じて脅しではない！私は悪魔の脅しに屈したわけでは無い！！何  
と言われようともリアス君に負けた訳では  
失礼。少々興奮していたようだ。  
つと

とにかくゼノヴィア君は悪魔に転生し、駒王学園に通うようになり、  
私達の同居人となったわけだ。  
これがまず1つ。

そして2つ目にイリナ君だ。  
彼女は目を覚まし、何故か私達の家にいる。  
まあそれは構わない。部屋は無駄にあるからな。  
構わないのだが理由を聞くと

「使者様のそばが良いです！」  
らしい。そばも何もイツセー君の家とは隣近所なのだが？  
まあいつまでも兵藤夫妻にご迷惑をかける訳にはいかないし、事情  
を知っている私の方が何かと融通が利くだろうから受け入れた訳だ  
がな。

ただ問題もあった。

ゼノヴィア君との仲だ。悪魔となったゼノヴィア君をとても残念そ  
うに、そして悲しそうに見える彼女にゼノヴィア君も居心地が悪いよ

うだ。

しかし悪魔となった理由は言えない。

神の死をイリナ君に伝えればどうなるかわからないからだ。

ゼノヴィア君曰くイリナ君は彼女以上に敬虔な信徒らしく、心の支えが無くなってしまえば今後生活に支障を来す可能性が高いらしい。さらに神の死を知ってしまえば教会から異端視されてしまうそうだ。これはゼノヴィア君が悪魔になる際教会と連絡をとり実際に起きた出来事のようにほぼ確実に起こりうることらしい。

よってイリナ君とゼノヴィア君の間には微妙な空気が流れていて、私もアーシアも非常に居心地が悪かったのだ。

そして最大の問題は今現在起こっていた。

現在私の目の前ではイリナ君と教会からの使者、イリナ君を迎えにきたと思われる神父が言い争っていた。

何故言い争っているのか。それは私達の家にいる理由と関係していた。

「使者様のそばにいる！」

彼女は教会の者、自分の上司にそう言ったのだ。

これに驚き慌てた教会は急ぎ説得のために神父を派遣した。



そして今の状態のまま既に一時間が経とうとしていた。

「はあ」

一度ため息を吐く。

私としてはイリナ君がここに住まおうが構わない。  
ゼノヴィア君との事さえ解決すれば何ら問題は無いのだ。

ただ彼女は任務中であるのだ。故に

「イリナ君。そこまでにしたまえ。」

そう告げた。

「そんな！私は使者様のそばで主にお仕えしたいんです！  
何でそんなこと言っんですか？」

イリナ君が驚き、神父との言い争いを中断して私に聞く。それに対  
して私はさらに告げた。

「君にはまだやるべき事があるだろう？  
せめてそれを終え、然るべき手続きをとってからここに來たまえ。」

私の言葉に神父も頷き、何とか説得しようとしている。

これに対してイリナ君は「うゝゝゝ」と唸りうつむいてしまった。

しかない。あまりこういった言い方はしたくはないのだが

「一度戻らないと言うのなら今後この家への立ち入りを禁止する。君が何のために日本へ来たのかを忘れてはいけない。聖剣の回収のためだろう？ならなすべきことをなしてからここに来るんだ。」

最後にわかったかと付け加え、その後イリナ君が何を言っても私は無視を決め込んだ。

そしてようやくイリナ君も諦めがついたのか

「……………わかりました。本部へ戻ります。」

そう言ったのだ。

ふう、ようやくこの騒動も終わりが見えてきた。

「でもっ!」

とイリナ君は続ける。

「ちゃんとした手続きをとったら、またここに来ていいんですよ  
!?!」

「それならば構わない。ただ何度も言うが私は君の言う使者様な  
なら善は急げ!神父様、今準備してきますね!」……………」

行ってしまった。

イリナ君は真つ直ぐでいい娘なのだが人の話は最後まで聞こう。

ポンポン

神父が私の肩を叩き頷いた。

……………そうか、貴方も彼女に振り回されているくちか。

私は神父に親近感がわいたのであった。

その後、イリナ君は「また来ます!」と言い、神父は私にお辞儀を  
して去って行ったのだった。

ああ、後もう一つ変わった事があったな。それは

「お兄様ー。只今戻りました。」

「「「「お邪魔します」「」「」

む、来たか。

「アーシアお帰り。それと皆、毎日飽きもせずよく来たな。」

そう、オカルト研究部の部員達が毎日の様に家に来るようになったのだ。

「ええ、シロウの料理の腕を見込んで習いに来てるのだから当然よ。」

と、リアス君。

「私もですわ。シロウさんの料理は見てるだけで勉強になりますもの。」

同様に朱乃君。

「……………料理処理班です。」

小猫君は食べる為に。

「シロウさん！今日もお願いします！今度こそ全部避けきってやる！」

最近訓練の為にうちに来るようになったイツセー君と

「よろしくお願いします。」

祐斗君。

「お兄様？今日は何を作るんですか？私も手伝います！」

やる気十分なアーシア

ゼノヴィア君はまだやることがあるとかでここにはいない。さらに言えば学校には明日顔をだすとかでまだリアス君と朱乃君、そして同居人である私とアーシアくらいしか彼女が悪魔になったこと自体しらいであろつ。

まあともかく最近はよく皆がくるようになった。

全く騒がしいかぎりである。

だが

「なら早速料理を作ろうか。食事を終えたら休憩をはさんで訓練にはいる。」

皆、ついてこれるか？」

「「「「「はいっ！！」「」「」「」

「こつこつのも良いものだ。」

いつまで続くかわからないが、それまでこの小さな幸せを守って行こうか

## 二十話（後書き）

はい、如何でしたか？

感想や指摘など待っています！

ちなみにこのお話しのシロウはシスコンと言うかファミリコンプレックス、略してファミコンです！

これは1を切り捨てない為に過剰になった結果ですのであしからず！  
ではまた次回で会いましょう。

## 二十・五話（前書き）

少しお久しぶりです！

最近仕事が忙しく更新出来なかったのですが何とか更新です！

ちなみに私、この度足が捻挫してしまい数日仕事に出れなくなってしまいました（泣）

よって治るまでの数日？毎日更新できるようにしたいと思います！



二十・五話

「はあ、はあ、はあ、ふっ！」

疲れたような息を吐く音。その息づかいは歳の割には妙に艶っぽい。

「もっと腰を落とせ。そんなことでは……………こつなる！」

「きゃん！はあ、はあ、ま、まだよ。」

激しく動く肢体、宙を舞い乱れる紅く長い髪。その顔は赤く酷く扇情的でもある。

「ならば来い。私を落としてみる。」

「はあ、はあ、はあ、い、言われる、までも、はあ、はあ、無いわ、よ。」

絡み合う肢体は相手の熱を感じるには十分な距離である。

「ほう、先ほどより断然良い具合だ。だがそれでも」

「えっ？ちよ！？え？もう」

体制を崩した相手の体が何の抵抗も無く浮き上がり

バシン！

「きゃんっ！」

紅い髪の主、リアス・グレモリーが畳に叩きつけられたのだ。

「さてリアス君、交代だ」

勿論投げたのは私で、リアス君は目を見開き何が起きたかわからな  
いといった表情で虚空を見つめていた。

どうやら私の声が聞こえていないらしい。

「リアス君、交代だ。」

「はっ！？え、ええわかったわ。ありがとございました。」

もう一度言つと我にかえり、立ち上がると一礼して部屋、道場の壁  
沿いに座り込み私とリアス君の「組み手」を見学していたオカルト  
研究部部長の元に歩いていった。

そして入れ替わる様に朱乃君が立ち上がり私の前に歩いてくる。

「次は私ですわね。ふふふ、お手柔らかにお願いしますわ。」

いつもと同じ笑顔を浮かべ私と対峙し

「よし、来い！」

「はあああああつ！！！」

私の返事を合図に朱乃君が突っ込んできた。

さて、今更ながら現状の説明をしよう。

現在私達悪魔関係者は臨時修行を行なっている。

理由としては少し前にあった墮天使ココビエルの襲撃だ。

そのココビエルに対してもそうだが、何よりもその後に見れた白龍皇の存在が今回の臨時修行に関係していた。

要は皆が己の力の無さを実感し強くなりたいと言っただけで個人の能力、とりわけ戦闘技術の向上のために私と組手を行なっているのだ。

本来なら色々と教授したいところではあるが、生憎戦闘スタイルの違いや才能などの差によりそれが出来ない。

故に私に出来るのはこの様に相手になることのみ。

現在は個人の修行であるが、全員が終えたら団体戦の修行にうつる。

その際の相手は私かセイバー。またはその両方である。

これをここ1週間毎日の様に行なっていた。

まだまだコカビエルや白龍皇と闘えるレベルではないが順調に成長しているのがわかる。

若者の成長がこんなにも嬉しいものだとは思わなかった。案外私は教職に向いているのかもしれないな。

それはそうとコカビエルの影響は私達だけでは無く悪魔、天使、墮天使にも影響した。

どうやらコカビエルの行動は奴の独断だったらしく墮天使陣営は無関係だったようなのだ。

それでもこれにより各陣営の緊張は高まると思われた。

そしてそうなったにはなったのだが、これはある意味良い方向に転がったのだ。

三勢力会談。

三勢力で手を結ぶために行われる会談だ。

こういつては何だが、意外なことにどの陣営も戦争を起こすつもりは無かった。今までの起こった事件のほとんどが組織の末端、または一部の暴走によるものであったのだ。

ならばと言っては変だが、この三勢力で手を結びより良き世界を目指そう、となったのだ。

ああ、神よ、魔王よ、見ているか？

あなた方の目指した未来はあなた方の後継者達がしっかりと後を継いでぞ。

私もあなた方に交換条件とはいえ救われた者だ。

私なりにではあるがその代価しっかり払わせて貰うぞ。

まあ先ずは

「朱乃君。君もリアス君と同じだ！」

「きゃっ!?!」

スバンッ!!

この子達の成長を手伝うのでしょうか!

\*

「よし。朱乃君、交代だ。」

「ありがとうございます。ふふふ、流石シロウさんですね。無手でもこんなにも強いんですね。では私は戻りますわ。」

朱乃君が戻り、次は誰が来るのかと思っていると誰も来ない。

祐斗君は正座で目を閉じ精神統一を行い、アーシアはゼノヴィア君と小猫君に簡単な体さばきを教わっていた。

そしてイツセー君なのだが

「ぶはっ！す、凄い……………。おっぱいが縦横無尽に動き回ってるよ。」

しかも体育着でブルマ……………。  
やべ……………俺死ぬかも……………血がたりねえ……………」

幸せそうな顔で大量の鼻血を噴いていた。まあ確かにイツセー君達の年代の少年には刺激が強いだろう。私から見てもわからなくは無いが、服装の意味がわからない。何故ブルマ？普通にジャージなどで良いのでは？と思うのだが。

それにしてもイツセー君。この道場は一応私達の家なので鼻血で血溜まりを作るのは辞めてほしい。  
まあ後で掃除をして貰おう。

とりあえず次はイツセー君だ。一番暇そうだからな。

「次！イツセー君！こちらへ来い！」

「えっ？俺すか？ちょっと待ってほしいかなあ〜と思うんですけど。トイレとか行っちゃ駄目ですか？」





から使ってくれと言ってくるのだがな。  
まあこの組み手では私は無手で相手をしているので威圧感が増すの  
であるうが反応が露骨すぎるだろう。

まあ良い。やる気を出したようだし

「来い！！」

「はいっ！！よろしくお願いします！！」

さっさと始めるとしようかっ！！

\*

「……………ありがとうございました。」

イツセイ君との組み手を終え、ゼノヴィア君との組み手も終了して  
現在、小猫君も終えた。

そして残っているのは祐斗君のみなのだが

「……………」

彼はまだ精神統一をしていた。

だがそれも小猫君が戻った瞬間

「次は僕です。よろしくお願いします。」

立ち上がりこちらに歩いて来た。

そのたたずまいは真剣そのもの。手加減しているとはいえ気を抜けば斬り捨てられてもおかしくない。それほどの覚悟を彼から感じたのだ。

……………私もうかうかしてられないな。

私は干将・莫耶を投影し、両腕をだらりと下げた。所謂無構え。型と呼ぶには自然体過ぎる構えで見るものによっては馬鹿にしているように見えるだろう。

しかしその実は如何なる攻撃にも対処出来る万能の型でもある。

それがわかるのだろう。祐斗君は真剣な表情のまま聖魔剣を正眼に構え

「　　っ！行きます！」

攻め込んで来た。

その言葉とほぼ同時に繰り出される無数の斬撃。

その全てをかわし、剃らし、弾き、受け止めた。そのままつばぜり合いになるが、それで終わるはずも無く

「シッ！！！」

新たに聖魔剣を生み出し横薙ぎの一撃が私を襲う。しかしこれは予想の範疇故に

「はあっ！！！」

強引に弾き飛ばし距離をとることで回避した。

そして再び開始と同じ距離に戻るがそれは一瞬のことで直ぐ様

「はあっ！！！」

「ふんっ！」

攻防が始まる。

ガギンガギンと剣がぶつかる音が部屋に響き、その際火花が散る。

どれだけそうしていただろうか、不意に祐斗君が声をかけてきた。

「っ！せいっ！いつまで護りに！徹するつもりですかっ！」

「……………」

私はこれに無言で応える。

確かに開始から私は攻めていない。だがこれも考えあつての事。

「……………わかりました。あくまで攻めないのなら終わらせてもらいます！」

さっきからここ、隙だらけですよ！！」

そう言った祐斗君の神速の刺突が私の右大腿部に向けられた。

突然の奇襲。避けられる者は少ないだろうし、達人ならばこの様な隙は作らないだろう。

だが私にとってのこれは

「ふう、よじやくか。」

「なっ!?!」

ただの誘いなのだよ!

ガギンと剣がぶつかる音が響く。

祐斗君の目にはこう映っただろう。

今まで隙だらけだった右大腿部に攻撃を加えようと刺突を繰り返した次の瞬間にどこからともなく現れた双剣の傍らに弾かれた。

そして弾かれた直後には

「　　っ!ま、参りました……………」

もう一本の双剣が彼の喉元に添えられていたのだから。

「でも」

と祐斗君は続ける。そう、でもだ。

「後少しで一太刀とは言いませんが、相討ちくらいには出来ましたね。」

そう言って微笑んだ。

私の目には喉元に剣を添えられた状態の祐斗君が映っているが、私は背に威圧感を感じている。

その正体は地面より切っ先のみが突き出た聖魔剣。どうやら刺突が弾かれた瞬間に生成したようだ。

私のほうが数瞬早かったようだが、少し私の反応が遅れていた、もしくは祐斗君の反応が早かったならば結果は変わっていただろう。

やれやれ、まったく

「また強くなったな」

「ふふ、ありがとうございます。」

再び祐斗君は微笑んだのだった。

まったく持つてこの子達には驚かされる。確かに私は手加減はしていた。

ただそれは全力は出していないと言っただけで本気は出していたのだ。

それを1人とはいえこの短期間で相討ち直前にまで持つて行かれるとはな。

本当につかつかしてられない。

祐斗君に集まり笑い合う部員達を見ながらそう思ったのであった。

余談だがこの後の団体戦で少し力を出した私に彼等は直ぐに敗北したのはまた別の話である。

くくく、まだまだ甘いな！

二十・五話（後書き）

如何でしたか？

今回は祐斗君の成長を書きたかったんですね。  
ほら、彼って最初の方は気がついていたら強くなってる感じでしたし。



## 二十一話(前書き)

何とか更新！

今回はあの人**が**暴れます。そしてあ**の**男の娘**が**登場。

## 二十一話

「イツセー君。」

今は放課後。授業は終わり、私も仕事を終え帰宅している。

「何ですか？」

そしていつもならば部員達がこの家に集まっているのだが今日はイツセー君と

「このダンボールは何だ？」

小柄な人が入れそうな少し大きなダンボールがいた。  
何故いたと表現したかと言つと

「ひいっ！」ガタガタガタガタガタガタガタ

「……………」

中に人が入っているからだ。

「えっと、それはですね。実は

「

イツセー君の説明が始まった。

彼が言うにはこうだ。

リアス君にはもう一人の僧侶でハーフヴァンパイアの眷属がいた。しかしその者は神器の力を制御出来ずに危険と判断され、封印されていた。

その封印もコカビエルの件を境に封印解除の許可を得て開放されたのだが、本人は引きこもりだったのだ。

その頃私はたまった仕事の処理と近日に行われる授業参観の準備で顔すら出せなかったのだが、その間に何とか封印部屋から連れ出す事は成功した。  
しかし

「お外怖いよおおおお。」ガタガタガタガタガタガタ

「……………」

今度はダンボールにこもってしまったようだ。

何をしても怖がり外に出ようとしないうリアス君の眷属、ギヤスパイ・ヴラディ君をどうしたことかと考えた結果、私に相談しようといッセー君がダンボールを抱えてここまで来たらしいのだ。

他のメンバーは夜の悪魔稼業に向けて待機していたり、これもまた

近日に行われる三勢力会談に向けての準備があつたため、イツセー君がギヤスパー君の件を引き受けたいらしいのだ。

私としてもこの件に手を貸すのは何ら問題は無い。むしろ喜んで手を貸そうと思うのだが

「ひい！見てる！見てるよお！先輩と知らない人が見てるよおおお  
おおお！」

「「……………」」

これをどうしろと？

というかダンボールの中でどうやって外の様子がわかる？

私はイツセー君を見た。

それに気がついたイツセー君は申し訳なさそうにしながら

「……………とりあえずギヤスパーをダンボールから出しますね。」

そう言つて行動を開始したのだ。

その際「いやあああああ！」「や「先輩のエッチいいいいいい」  
など聞こえたのでつきり女子かと思つた。

現に無理矢理連れ出されたギヤスパー君は女子の制服を着ていたの

だが

「あ、こいつこれでも男らしいですよ。」

と言つイッサー君の説明に驚愕した。

これで男だと!?

顔立ちも骨格的も声も女子そのものではないか!

そして解析をして理解した。

要はあったのだ。男性特有の性器が。

「くくく、不思議な事がこんな身近にあったとはな……………」

私は腕を組み、遠くを見るように虚空を見つめた。

そうもしたくなる。何せ見た目女子が実は男だったのだから。

ああ、世の中は本当に不思議で不条理だ。まさか本当の女子より女子らしい男子がいるとは。

これが所謂男の娘と言つ奴なのだな。

ぼんぼん

私が思考していると不意に肩を叩かれた。  
そちらに目を向けるとイツセー君が

「……………」

無言で頷いていた。

ああ、君もか。君もギヤスパー君を女子だと思ったのだな。

無理も無い。

何せあれだからな。

ギヤスパー君には失礼だがあれが男に見えろと言っ奴は病院に行くのをすすめる。それほどにギヤスパー君は女子より女子らしい男、男の娘なのだから。

私とイツセー君はギヤスパー君を見る。

「な、何ですか？僕、何かしましたか？ひっ、すみませんごめんなさいiiiiiiii！そんな目で見ないでくださいiiiiiiii！」

ガタガタと震えるギヤスパー君。私達は

「「はあ」」

同時にため息を吐くのであった。

本当にどうしろと？

\*

ギヤスパー君をダンボールから出して自己紹介をすませた。  
しかしそれから話は進まずどうしたものかと思考していると

ピリリリリリ　ピリリリリリ

私の携帯電話がなった。

またヴァルキリーかと思いい画面を見るとそこにはオフィスの顔写真と名が写し出されていた。

………いつの間にオフィスは己の顔写真を私の携帯電話に登録していたのだ？

気がつかない私も私だがオフィスもオフィスである。  
後でデータの確認をしよう、そう思考している間も携帯電話の事務的な音がなり続ける。

「シロウさん？出ないんですか？」

イツセイ君が聞いてくる。

「すまない、少々失礼する。」

そう言って少し彼等から離れて電話に出る。

「もしもし、エミヤだ」

『……遅い、もう着いてしまった。』

いきなり文句を言われた。というか着いただと？

まさかと思い玄関に向かう。その際イツセイ君が「シロウさん！？いきなりどこへ？」という声が聞こえた気がしたが無視した。

玄関の扉を開けると案の定、そこには

「む、シロウ来たぞ」

と携帯電話を片手にこちらを見る黒いゴシックファッションに身を



包んだ黒髪の白い肌の少女、オフィスが立っていた。

「来るなどは言わないが前もって連絡がほしいのだが……」

私のささやかな抗議も

「した。でるのが遅いシロウが悪い。」

その一言で一蹴されたのだった。

「……せめて1日前とかにほしいのだが」

内心無理と思いつつも言ってみる。

「面倒。行きたい思ったら行く。」

だがそれも一蹴されたのだった。

まったくもって刹那的な龍である。

\*

オフィスをそのまま帰すのも何だったので家にあげたのだが

「「……………」」

「ん、美味」

何とも言えない雰囲気であった。

先ほどまであんなにも外を怖がっていたギャスパー君も、そのギャスパー君を何とかしようとしていたイツセー君も目の前の光景を啞然と見つめている。

それはそうだろう。いきなり見知らぬ美少女が現れ、私が料理を振舞い始めたのだから。

私かというと、慣れたのでどうということはない。故に

「それは良かった。ちなみにデザートもあるがどうする？後食後のお茶は？日本茶、中国茶、珈琲、紅茶、各種取り揃えているが」

この後に出すものを聞く余裕があった。

「いる。お茶はシロウに任せる」

「了解した。少し待ちたまえ。」

未だ啞然とこちらを見るイツセー君達を無視してオフィスの要望に応えるためにキッチンに向かう。

今回は試しに作った杏仁豆腐だし烏龍茶で良いだろう。

烏龍茶と言っても作り置きした物ではなく、ちゃんと茶葉から入れた物なのであしからず。

それを4人分用意してリビングに向かう。

未だに啞然としているイツセー君達の前に杏仁豆腐と烏龍茶を置く  
とようやくイツセー君が動き出した。

「あ、ありがとうございます。じゃなくて！この娘誰っすか？」

横でギヤスパー君が何回も頷いていることから同意見なのだろう。

「ああ、紹介していなかったな。彼女はオフィス、私の友人だ。  
まあとりあえずこれを食べると良い。」

「ん、我はオフィス。シロウの主になる予定。」

そう言っただけで食べ始めるオフィス。

「……………まったく、まだ諦めていないのか。そら、イツセー君が変な目で私を見ているじゃないか。」

「……………シロウさんが部長の執事を拒否するのは仕える主がいたからなんですわね。」

まあ良いや、いただきます。

おいギヤスパー。お前も食べるよ。シロウさんの料理やデザートはマジうまだぞ。

お前が引きこもりを辞めるくらいにな。」

イツセー君の物言いには否定させてもらおう。断じて私は彼女の執事になるつもりはない。

だがまあ私の料理などで引きこもりを治させるのなら喜んで振舞おう。

「わ、わかりました。いただきますう……………うわぁ！美味

しいです！こんなの食べた事無いです！」

「だろ？どれ俺も……………うまっ！相変わらずですね！」

「ん、美味。」

高評価のようでは何よりだ。  
では私もただくとしようか。

先ほどの微妙な雰囲気はなりを潜め、和やかな空気に満たされたのであった。

\*

デザートも食べ終え、くつろいでいると突然オフィスが

「シロウ、何故我がいるのに女を連れ込む？それとお前は少女趣味？」

とギヤスパ―君を見ながら言い出した。

「……何でさ」

思わず昔の口癖が出た私は悪く無いだろう。それほどに突然かつ意味不明な発言だったのだ。

「ほ、僕女の子じゃないもん！男の子だもん！」

そら、ギヤスパ―君も反論している。

「へえ、やっぱりシロウさんのコレだったんすか！」

イツセー君、小指を立ててコレと言つな！あと微妙に表現の仕方が古いぞ！

「……私はオフィスとそういつた関係になつたつもりは無いのだが？」

「気にするな。いずれなる。」

「気にするわー！ー！」

私が反論したところで

ピリリリリリ　ピリリリリリ

再び携帯電話がなり始めた。

まったく今度は誰だ？この忙しい時に……！！

電話に出る許可を得てから画面も見ずに通話ボタンを押した。  
流石に私も疲れていたようだ。

そして次の瞬間

「もしもし、エミ」  
「シロおおおおおおおおおおおおおお  
お！！！」  
「………」  
「ロスヴァイセか？」  
「ロスヴァイセの叫びが私の耳元で木霊した。」

何とか聞こえはするが耳が痛い。どこの音量破壊兵器かと問いた  
だしたくなる威力である。

「ロスヴァイセか？じゃありません！！今どこにいるんですかっ！  
」  
「！」

「自宅だが。君こそどうしたのかね？」

「………私の勘が何かを感じとりました。………そこに女がいます  
ね？妹のアーシアちゃんや悪魔の生徒達じゃない女がっ！！」

「………何故わかる。というかロスヴァイセは何故そこまで切羽詰ま  
ったように話すのだ？」

私は周りを見渡した。するとイツセー君とギヤスパー君は

「お、俺達そろそろ帰りますね。」「ちそこさまでした。」「おい、何かヤバそうだから帰るぞ」ボソッ

「あ、ありがとうございます。僕、頑張りますう。」「は、はい。帰りましょう」ボソッ

「こらこら。聞こえているぞ!？」

あ!待て!帰るなああああああ!

……………行ってしまった。

私は恐る恐るオフィスを見た。

「ニヤリッ」

うむ、凄い笑顔だ。とても綺麗なのだが普段無表情なだけに異様なまでに怖い。

『シロウ?いるんですね!?やっぱり女がいるんですね!!  
ああ!!だから遠距離は嫌なんです!少し目を離せば違う女。シロ



ウは私に飽きたんですか！？私いらな子ですか！？』

「少し待てっ！！話が飛躍していないか！？」

私と君はそんな関係では無いだろう！？」

確かにその時が来れば改めて考えようとは言ったが、私にはまだその時が来たとは思えないのだが！？」

確かにその様に言ったことはある。しかし私は最後にヴァルハラに行ってから1年近く経っている。故にロスヴァイセと最後に会ったのも1年近く前の話だ。電話などでのやり取りはあったがそれ以上は無かったはずである。

『くっ！そうでした。あれはこの前見た夢の話でした！』

夢と現実を混同させるなっ！！

『……………わかりました。だったら私もそちらに向かいます！今から許可を、ってブリュンヒルデ様！？いつからそこについてあああああ  
あ！！私の携帯電話をとら  
』

ああ、どうにかなりそうだ。

何故私の周りはこの様な活発な女性が多いのだろうか？

しばらくもめる声が聞こえたが

『はあ、はあ、シロウ殿、私だ、ブリュンヒルデだ。この度は部下のロスヴァイセが失礼した。この娘は私に任せてくれ。では失礼する。』

そう言っつて電話が切れたのだつた。

ブリュンヒルデ、感謝する。この恩はいずれ返そう。

後ロスヴァイセにも後日フォローの電話をしなくては。形はどうあれ私をしたってくれているのだから。

とりあえず今は

そう思考しながらオフィスを見て

「……………何でね」

本日二度目の口癖発動だ。

何せ

「服を脱いだ。今からするのに必要ないから」

全裸のオフィスが立っていたのだ。

ふむ、中々着痩せするタイプのようだったよりも豊かな

ではなくっ!!

「何故そうなるのだっ!!!!」

私はオフィスとする気はないぞ!?別にオフィスに問題がある訳では無いが、これは私の精神的な問題だ!!

「ん、子作り。性交。SEX。Make Love」

「そういう意味で言ったのでは無い!!」

「ふふ、シロウ諦めて我のものになれ。我を抱けるのなど光栄なことだぞ?」

ジリジリ迫るオフィス。

「くっ!!」

ジリジリ後ずさる私。

そして

「スマン!!」

私は駆け出した!

これは逃走ではない! 戦略的撤退だ!

「くくく! 逃がすか!!」

やはり追いかけてくるか!!

だが捕まる訳にはいか!!

「うおおおおおおおお!!」

近所迷惑を省みずに声をあげ、家を走り回る私に

「さあ諦めろ! 我と子をなすぞ!!」

それを追いかけて回すオーフィス。

ここに私とオフィスの闘いが始まったのだ。

\*

今日は疲れた。

オフィスの追いかけてこはアーシアとゼノヴィア君が帰ってくる夜中まで続いたのだ。

幸いなことに彼女達には見られなかった。

アーシアとゼノヴィア君が帰って来るとオフィスは

「ん、邪魔者が帰ってきた。興ざめ。帰る。」

そう言っつて瞬時に去って行った。

危なかった。今のを最初から使われていれば私は今頃……。

考えるのはよそう。きつとそれが良い。

とりあえずもう寝よう。明日も忙しいのだから。

ピリリリリリ　ピリリリリリ

む。またか。今度は誰

そこまで考え凍り付いた。発信者は

「もしもし、エミヤだ。オフィスまだ何かあるのかね？」

私をここまで疲弊させた相手、オフィスであった。

『シロウ、次は逃がさない。』

プッ、ツーツーツー。

一言だけ告げ直ぐに切られた。

彼女は私に何を求めているのだ？会う度に過激になっているではないか！



二十一話（後書き）

如何でしたか？

オフィスって原作であまり出てないんで動かし方がよくわからな  
いんですよねえ。

故に妄想です！！

では感想や意見など待っています！



## 二十二話（前書き）

更新です。

長くなりそうだったので二回に分けました。  
つーか私の集中力が持たなかったのもあります。

## 二十二話

授業参観が終了した。

いささか問題があったように思うが一応終了だ。

英語の授業で何故か粘土細工を行なったが概ね問題ない。

と、思いたい。

イッセー君が思わぬ方向で才能を發揮（リアルリアス君人形を作った）しオークションが始まったが多分問題ないだろう。

イッセー君のご両親が何故かアジアばかり撮影していたのも私的には問題ない。むしろ私が撮影出来ない故に助かるので問題ないどころかグッジョブである。

まあ終わったことはともかく問題は職員室へ戻る途中の現在、廊下の少し広くなった所で起こっていた。

パシャッパシャッパシャッとなるシャッター音とそれに伴い光るカメラのフラッシュ。その数は1つや2つではない。そしてそのカメ

ラマン達には父兄どころか生徒まで混ざっている。  
この者達の共通点は皆が男だということ。

そしてカメラの向かう先、被写体に当たる人物なのだが

「よし 次のポーズいくよー」  
ノリノリである。

その女性、いや少女と言った方が良かったらうか。

その少女は非常に可愛らしい。どこかで見たことがある気がするの  
で多分生徒のご親族なのだろう。

あの見た目だ、妹だとは思うのだがそれは別に構わない。

問題なのはその服装だ。

非常に嫌な物を思い出しそうなので言いたく無いがあれはまるで魔法  
少女だ。

この摩耗した記憶の中でも嫌すぎて覚えているあのステッキが憑依  
した者の姿にどことなく似ている。服装も言動も、である。

そう、あの呪いのステッキ、カレイドル……………止めておこ  
う。名前を呼んだら本当に出てきそうだ。

幸いあの魔法少女が持っているステッキはあれとは違うので、あの  
状態が少女の素なのだろう。

ふむ、あの記憶は封印しよう。それが私の精神上、最も平穩が約束されるだろうからな。

まあとりあえずあれを止めよう。

人だかりが出来て通行人の迷惑である。  
私は歩き出し

「諸君！ここは他の通行人もいる！即刻撮影を中断したまえ！」  
「オラオラ！天下の往来で撮影会たーいいご身分だぜ！解散解散！」

告げ、誰かと言葉が合わさった。  
もう一つの声の主を見ると

「匙君か」

「エミヤ先生！」

生徒会の匙君だった。

匙君は申し訳なさそうにしながら

「すみません。こんな騒ぎになるまで放ってしまつて。」

謝ってきた。

「気にすることは無い。君の責任では無いさ。むしろ君はよく仕事をしているぞ。」  
「ともかくまずはあれを止めよう」

「はい！」

「なああんた誰かのご親族か？一応服装は自由だけど普通は正装してくるもんだろ。」

言葉遣いは若干あれだが言っていることは正しい。

私も付け加えて言おうとして

「何事ですか？サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言っ

」

遮られたのだが、その遮った本人も言葉に詰まっている。

その声の主は生徒会長支取蒼那、本名はソーナ・シトリー。上級悪魔で匙君の主でもある。

そのソーナ君の後ろには紅髪の男性が二人。壮年の者と、若い者。そしてその二人には見覚えがある。

壮年の男性はリアス君の式で挨拶をした彼女の父、グレモリー卿。そしてもう一人がグレモリー卿の息子でありリアス君の兄、そして四大魔王の一角サーゼクス・ルシファー。

実はこの二人が授業参観に出席することは知っていた。これはリアス君より聞いていたからだ。

ちなみにサーゼクスは少し前よりこちらに来ていたらしく、イツセー君の家に泊まったりもしたらしいのだ。

普段の私ならば気づいていたのだがその日はオフィスが来ていた日と被っていたので私が気がつかないのも無理無いだろう。

感覚的な話だがオフィスの力は魔王を超えている。恐らくオフィスは世界でトップだと思っただ。

そんな存在が身近にいたのだから仕方がないだろう。

まあともかくソーナ君が来たのだが

ふむ、似ている。

あの魔法少女と雰囲気などはまるで似ていないが顔立ちがそっくりだ。

姉妹か？

「ソーナちゃんだああ

」

魔法少女がソーナ君に抱きつく。ソーナ君は困ったようにしながらも受け止めていることから間違い無いだろう。

「ソーナ君、妹さんか？」

確認の為に質問すると

「ははは、それは違うよ執事君。いやエミヤ先生だったね。彼女はセラフォル・レヴィアタン。私と同じ魔王の一角でソーナ君の姉だ。」

サーゼクス・ルシファーが私の質問に答えた。

「そーよー 私がお姉さんなのよ よろしくね、とっても強い人間さん」

セラフォル・レヴィアタンも訂正するように答える。どうやら彼女も私を知っているらしい。しかしそんなことはどうでも良かった。姉だど？これが？ソーナ君の？

「ソーナ君、事実か？」

サーゼクス・ルシファーとグレモリー卿、そしてセラフォル・レヴィアタンが話している中、思わず聞いてしまった。

「……………ええ、事実です。」

「……………そうか。いや、すまない。変なことを聞いた」

「……いえ。こちらこそすみません。」

「ふむ、何かあれば私が話を聞こう。」

「はい、ありがとうございます。」

「ほう、ならこの後少し良いかな？君とはまた話をしたいと思っていたのだよ。」

ソーナ君に言ったのだがサーゼクス・ルシファーがソーナ君の言葉を遮り話に入ってきた。

「それは構わない、と言いたい所だがお待たせしてしまう。何分仕事が残っているからね。」

良かったら今日の宿泊先か夜の予定を伺ってもよろしいか？」

「ああ、そうだね。君にも仕事があったんだね。いやすまない。リアス達と同じ感覚で話していたよ。」

そうだな。後でグレイフィア、私の眷属なのだが彼女を使いに出すよ。」

ふむ、そちらの方が私としても助かる。

「了解した。それでは連絡待っている。私はまだ仕事が残っている故これで失礼する。」



そう言って立ち去ろうとして

「待つて待つて 私もお話したいわ」

セラフォル・レヴィアタンに呼び止められた。

しかし先ほどサーゼクス・ルシファーに言った様に仕事が残っている。ソーナ君も合わせた三者面談という形なら出来なくもないが、ソーナ君にも仕事があるのだ。

「だから私もサーゼクスちゃんと一緒にいるわね あ、ソーナちゃんも一緒よ」

「え！？お姉様！いきなり言われても困ります！それにエミヤ先生にも迷惑がかかります！」

「え〜！でもお姉ちゃんはソーナちゃんと一緒にいたいわね、人間さん。良いわよね」

「だから迷惑がかかると」

「私は構わない。むしろサーゼクス・ルシファーと合わせて一度で終わるならそちらの方が楽だ。」

ソーナ君が驚いた表情をした。私が断ると思ったのだろうか。対照

的にセラフォル・レヴィアタンは「やったわ」とか言いながらはしゃいでいる。本当にこれが魔王でソーナ君の姉なのか？皆して私を騙そうとしてないか？

まあそれは無いだろうが、いささか不安である。

「それではエミヤ先生、私達はこれで失礼するよ。では父上行きましょう。ほら、セラフォルも行くこう。ソーナ君、案内頼むよ。」

「あつ！は、はい！エミヤ先生すみません。失礼します。」

「うむ、エミヤ先生だったね。今夜はよろしく頼む。娘の事を聞かせてくれると助かる。ではな。」

「じゃあ失礼するわ。今日はよろしくね。」

そうして彼等は去って行った。

一応何か準備しておこうか。

私はそう思考しながら職員室に向かうのであった。

\*

放課後、仕事を終え自宅で待機していた。アーメンはイツセイ君の

家に行っているらしい。

本当にアーシアはイツセー君が好きなのだ。安心したような少し寂しいような不思議な気分である。

ゼノヴィア君だが彼女は祐斗君と稽古していくようで帰りは遅いらしい。彼女も熱心だ。休日など暇が出来れば、直ぐに組手を要求してくるくらいである。アーシアとも仲が良いようだし概ね問題ないな。

さて、いつ頃来るだろうか。そう思考していると

ピンポーン

来たようだ。

玄関に向かい、扉を開けると

「お疲れの所失礼します。我が主の使いでまいりました。」

サーゼクス・ルシファアの眷属、グレイフィア君がいた。

「ああ、お疲れ様。それでどこに行けば良いのかね？」

「場所は、お隣の兵藤一誠様の自宅でございます。」

「……あの人数でか？迷惑ではないのかね。」

「……そうと思いましたがグレモリー様に我が主、セラフォル様、そして兵藤一誠様のご両親が意気投合いたしましたして……」

成る程、それならば納得は出来る。

しかし私まで行ってしまえば大変な人数になる。いつそのこと

「ふむ、ご歓談中に失礼かもしれんがこちらに呼んでくれないか？私としてもそちらの方が気兼ね無く話せる。勿論兵藤夫妻を呼んで頂いても結構だ。」

「よろしいのでしょうか？」

「構わないさ。ただ来るのは一時間後にしてくれ。私にも準備がある。」

後兵藤夫妻の認識阻害はそちらで頼む。あまり聞かれていい話ではないからな。」

「かしこまりました。そちらはおまかせ下さい。」

後準備とおっしゃりましたが一体何をなさるつもりで？」

「なに、私は夕食がまだだね。ついでに他の方の分も作ろうと思っただけだ。」



「……！」

「イッセー君の叫びが響く。」

「「こらイッセー！はしたないでしょ。」

「エミヤ先生うちの息子がすみません。」

「いや、母さん。これは本当に美味しいぞ。母さんも食べてみなさい。」

「え？そう？じゃあいただきます。」

「あら、凄い美味しい……。エミヤ先生は料理お上手なんですね。いくらでも入っちゃうわ。」

「兵藤夫妻も気に入ってくれたようで何よりだ。」

「ほづ、これはこれは。」

「うむ、妻にも食わせてやりたいな。」

「「ですね。母上にもそうですがミリキヤスにも食べさせたいです。すね。」

「グレモリー卿とサーゼクス・ルシファーにも好評である。」

「ソーナちゃんソーナちゃん はい、あ〜ん」

「お、お姉様！ 恥ずかしいですよ！」

「いいから食べてみて すっごく美味しいのよ」

「で、では……………あむ。」

「どんっどんっどんっ」

「……………凄いですね。リアスから聞いてたけどこれほどは……………。リアスが執事に欲しがるのも無理無いわね…………。」

ソーナ君姉妹の口にも合ったようだ。最後の方に不吉な言葉が聞こえた気がするが気のせいだと思いたい。

「さてアーシア、リアス君、グレイフィア君、私達も食事としようか。手伝い感謝する。」

手伝いをしてくれた3人にお礼を言い、食事をすすめる。

その後グレイフィア君がここに戻る時、アーシアとリアス君も手伝いに志願してくれたのだ。

おかげで大分作業がはかどったものである。

ちなみに作った物は完全和食。

様々な種類の物を作った。いささか作りすぎたかんもあるが、この人数故問題ないだろう。

「じゃあ私達も食べましょうか。アーシア悪いのだけれどその肉じやがとつて貰える？さつきから凄く食べたかったの。」

「はいっ！わかりました！」

あ、すみません。そっちの天ぷらお願いしても良いですか？」

「ええわかったわ。」

グレイフィア、貴女も食べなさい。今は仕事を忘れて、ね。お父様もお兄様も気にしないわ。」

「……ですが……………」

「良いから君も食べる。」

今のうちに休んでおきたまえ。

どうせこの後酒が入るのだから、その時に備えて、な。」

悩んでいたようなので近い未来、起こりうる事を話し食事をとらせ



ようとした。

というかほぼ確定だろう。何セイッセー君の父君が隠し持っているのはサイズからして一升瓶。どう考えても酒である。

まあ私も用意はしてあるし、魔王達との話が始まる前に出しておこうと思っていたからな。

「わかりました。メイドの身分で皆様と同じ席に着くのは失礼かと存じますが、私も食事をとらせていただきます。」

そうしてグレイフィア君がカチューシャをとり、座った瞬間

「ふう。リアス、私にも天ぷらとってくれるかしら？後アーシアさん、肉じゃがもお願い。」

雰囲気が変わった。

む？どういうことだ？これが彼女の素なのか？

私が疑問に思っていると

「あはは、びっくりした？グレイフィアちゃんは仕事以外だところなのよ

公私を完全に別けてるの」

いつの間にか近づいていたセラフォル・レヴィアタンが説明してくれた。

ほう、公私を別けてる、か。

成る程。それなら彼女の変化にも納得がいく。

公、従者ならば主とは同じ席にはつかない。故に今は私としてここに座ったわけか。

ん？待てよ。グレイフィア君は今リアス君をリアスと呼んだか？  
と言うことは彼女の本来の身分はリアス君以上なのか！？

「ありがとうございます。アーシアさんもありがとうございます。」

「いえ、構いませんわ。さあグレイフィア義姉様、いただきましょ  
う。」

お姉様？いや、しかしグレイフィア君とリアス君は似ていない。  
と言うことは義姉様か？

義姉様、義姉様……………まさかっ！！

私は思わず立ち上がる。皆は各々楽しんでいるようで気づいていない  
ようだが直ぐ近くにいたセラフォル・レヴィアタンは気付いた  
？？でも言うような表情で

「そうなの。グレイフィアちゃんは何とサーゼクスちゃんの奥さん  
！つまりリアスちゃんのお姉さんなの  
色々あってメイドさんをやってるけどね」

「そう言うことが。」

成る程、理解した。感謝する、セラフォル・レヴィアタン。」

私は素直に礼を言った。  
言ったのだが

「む〜〜〜〜〜！」

何故かむくられた。

「どうかしたのかね？私が何か気にさわる事でも言ったか？」

「言ったわ！」

言ったらしい。語尾に が抜けていることからそこそこ怒っている  
ようだ。

しかし心当たりが無い。いったい私は何を言ったのだろうか。

「私の事はレヴィアたん っと呼んでね」

成る程、彼女はフルネームで呼ばれるのが嫌だった訳か。  
しかし彼女が求める呼び方は私が嫌だ。  
具体的には、たん の部分がな。

「ではセラフオルー君と呼ばせて貰う。」

「レヴィアたん スルー!？」

え〜! 何で知り合いはレヴィアたん って呼んでくれないのかしら  
あ。  
」

良かった。彼女の知り合いは基本的に良識的な人物らしい。

もし悪魔達がセラフオルー君と同じ様な者が多ければ非常にカオス  
であろうからな。

「これで勘弁してくれ。その呼び方は私にはレベルが高すぎる。  
私の事はエミヤでもシロウでも好きに呼んでくれ。」

「もうしょうがないわね

じゃああなたの事はシロウちゃんって呼ぶわ」

何だと? シロウ……………ちゃん?

それは私の事か?

「ぶっ！シロウ、あなたがちゃん？ぶぶぶぶぶぶぶっ！！ちゃ、ちゃ、シロウちゃん。ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ！！」

く！リアス君は笑いすぎだ！！

「お兄様、かわいいですよ。」

アーシア、一応ありがとうと言っておこうか。だがな、ちっとも嬉しくないぞ？

「……………」もぐもぐ

何も言わないでいてくれるグレイフィア君の優しさが身にしみる。彼女が良識的な人物で良かった。

「どう？良いでしょ シロウちゃんって？」

セラフオルー君が得意気に言うが

「……………頼む、他の呼び方にしてくれ。」

私は要求した。しかしだ

「駄目よ だったら私のことはレヴィアたん って呼びなさい」

却下されてしまった!!

くそっ!どちらを選んでも私にはキツイ!現にリアス君は

「ぷ、あはははははははははは!!シロウがちゃん?む、無理よ!笑  
つちゃう!

それにシロウがセラフォル様の事をレヴィアたん ですって?  
む、無理、あはははははははは!!」

下品では無いが大笑いである。

私だって想像出来んわ!!というかしたくないわっ!!

「部長。笑ったらかわいいそうですよ。  
それにかわいいじゃ無いですか。」

「そ、そうね。かわいいわね。  
ちゃん……………ぷぷっ!!」

リアス君、笑いすぎだ!!

そしてアーシア、嬉しくないぞ!!

「ほらほら どっちが良いの？」

セラフォール君が急かす。

くう。私はどうすれば

「ほう、興味深い話をしているね。」

サーゼクス・ルシファーが話に入って来た。

「セラフォール、そういう事はな

「お？まさかサーゼクス・ルシファーが擁護してくれるのか？」  
流石は王

「私も混ぜてくれ」

……気のせいだった。

くそっ！！まさしく魔王だ！血も涙もない！！

この後、結局私の呼び名はちゃん付になった。幸いだったのがサーゼクス・ルシファーがサーゼクスと呼ぶ事を条件に私の事をシロウと呼び捨てにする事だ。

そしてもう一つ

「くくく！リーアたんか。」

何故だろうな。君に対してならこの呼び方でも私は構わんぞ？」

「なっ！？シロウまでお兄様みたいに呼ぶのは止めて！

それに昔の愛称にたんをつけないで！！」

顔を真っ赤に染めて抵抗するリアス君、もといリーアたん。

「部長、かわいいですよ」

アーシア、君はそればかりだな。  
だが良いぞもつと言ってやれ！

「~~~~~//」



くくく、良いネタが手に入った。セラフオール君、君には酷い目に  
合わされたが同時に良い物も手にはいったよ！

そしてサーゼクス、協力感謝する！

私はこの時間で大切な何かを失い、そしてどうでも良い、かつ重要  
なネタを手に入れたのであった。

二十二話（後書き）

今回はなあなあな感じにしました。

つまんなかったらごめんなさい。

二十三話（前書き）

…… すんません！大分遅くなりました！  
遅くなりましたがあんまり長くないです！  
とりあえず読んでみて下さい！！

## 二十三話

時が経つのは早いようで遅い。

瞬く間に、それも光のように駆け抜けるが、同時に亀が歩くようにゆったりと進むようでもある。

この星に降り立ち、アーシアと家族となり、リアス君達と知り合い、まだそれほど時間は経っていない。

事実この短い時間は瞬く間に過ぎていった。しかしとても長く、大分昔からこの子達といたのではないかと思わせる。

それほどに今の生活を自然と受け入れ、気に入っていたのであろう。生前、そして守護者であった時の私では考えられない心境ではあるが、それだけ私も考えが変わったと言うことだ。

だがその生活も

「なあ、なんでテメエがここにいる？」

これで終わりかもしれない。

「私もアザゼルに同意します。何故あなたがここにいますのですか？」

アーシアは大丈夫だろうか。

まあ大丈夫だろうな。今の彼女は一人ではないのだから。

「アザゼル、ミカエル、どういう意味だ。シロウがここにいるのは私が呼んだからだが、そういう意味ではないのだろうか？」

サーゼクスは知らないのだな。あの件を。

墮天使総督アザゼル、大天使長ミカエル、そして白龍皇を除き皆が怪訝そうな表情を浮かべる。

それだけ皆から信頼を得ているようで嬉しくあるが、この後に訪れるであろう別れを思うとそうも言っていられないな。

「そうか、現魔王様は知らねえのか。だったら三勢力会談の前に教えてやる。こいつは」

とうとう来るか。この時が。

「聖書に記される神と、初代魔王を殺した張本人なんだよ！」

アザゼル、ミカエルの睨む様な目と、白龍皇の楽しむ様な目。そして皆の驚愕した目が私に向けられたのであった。

\*

時間は少し遡る。

あれは授業参観後に行なった我が家での出来事の続きである。

サーゼクスやグレモリー卿との会話の後、時間も時間だったためお開きになったのだがサーゼクスが帰り際に

「そうだシロウ、君も三勢力会談に参加してくれないか？  
コカビエル撃退の件でリアス達同様に話を聞きたいのだよ。」

と、頼まれた。

私としては断る理由が無かったのでそれに同意したのだ。

それから会談まで色々であった。

会談までの間、サーゼクスがよく我が家に来ていたり、会談の準備などで奔走していたり、ミカエルがイツセー君に聖剣アスカロンを

授けていたり、白龍皇が学園に足を運んでいたりと色々であった。

そうしてようやく来た三勢力会談の日。私はこの時に覚悟は出来てはいた。

何せコカビエルが私を知っていたのだ。総督であるアザゼルが知らない訳がない。そして大天使長であるミカエルも知らない訳がないのだ。

そして予想通り、アザゼル達は私の姿を目にしてあの様な発言をしたのだ。

さて、どうしたもののか。

全てを話してしまおうか。

いや、しかしそれはどうだろう。信じて貰えるだろうか？

逃げる。それは出来ないし、するつもりも無い。

私は私の業を甘んじて受けようと思う。

ならば死を選ぶか？

それも出来ない。

神と魔王との約束を私は果たしていない。それに私が死ぬにはセイバーも一緒に死なねばならない。そんなこと許せるはずもない。

ぐるぐると巡る思考。しかしどれだけ考えようと答はでない。

セイバーは何も言わない。どうやら全てを私に任せるようである。

皆の視線が私に向けられる中、無言でただ立ち続けた。

そして

「……私は、お兄様を信じます。  
だから話して下さい。理由も無くお兄様が主を手にかけるとは思えないんです。」

アーシアが唯一声を発した。

「……聞いてどうする。それが事実ならどうするのだ。」

「どうもしません。だってお兄様はお兄様です。  
強くて、何でも出来て、不器用で、優しく、皮肉屋さんで、紳士  
で、お父様で、お兄様で、お友達で、先生で……」

胸が熱くなる。ここまで人に思われたのはどれほどぶりだろうか。

「そして私を救ってくれた正義の味方です!」

力強いアーシアの言葉が部屋に響いた。



その力強い言葉は言霊となり広がって行く。一人、また一人と表情が変わっていった。

それは私を睨んでいたミカエルも同様で、ただ睨むのではなく何故殺した？と問いかけるようなものに変わっている。

同じ様に睨んでいたアザゼルはどこか興味深そうな表情を浮かべていた。

……まったく。その様に見られては話すしかないではないか。

「わかった。全てを話そう。まずは私のことからだ。

私は

私は全てを話した。

元々異世界の住人であったこと。

世界との契約で力を得て英雄となったこと。

死んだこと。

力の代償で死後は守護者となったこと。

守護者のこと。

そして神と魔王を殺したこと。

神と魔王との契約し神器を得てこの世界に降り立ったこと。

流石に聖杯戦争などは話さなかったが、必要と思われることは全てを話した。

そして

「成る程な。俺は理解したし納得した。

あの戦争でこの星がヤバかったなら神と魔王がこいつに殺されたのも仕方ないと言えは仕方ない。

ミカエル、お前はどうか？」

アザゼルが言う。

「……理解はしました。しかし納得は出来ません。本当に神と魔王が死ぬ必要があったのですか？」

ミカエルの言うことも最もではある。

話し合いで解決するならばそれにこした事はない。

しかしそれならば始めから戦争など起こす必要が無いのだ。ミカエルもそれは理解しているのだから納得などしたくないのだろう。

「ミカエル、テメエの言い分もわからなくはねえがな、それだから始めから戦争なんか起きてねえよ。

あの時は何処かが勝つか、トップが死なねえ限り終わらなかった。」

俺は死ななかつたけどな。そう言ってアザゼルはミカエルに告げた。ミカエルは目を閉じ暫く黙って

「……そうでしたね。あの時はそれしか終わりが無かった。

そしてもうあの様な事を起こさない為に今があるのです。時間を無駄には出来ません。

私はもう結構です。」

そう結論を出した。

私を許すつもりはないのだろう。しかしミカエルは私では無く公をとった。

組織の代表としては当たり前のこと。だがとても難しいことでもある。

流石は大天使長と言った所である。

アザゼルに関してはよくわからない。

興味深そうな、子供の様に目を輝かせて私を見ている。

「なあ、お前エミヤだったか？

この会談が終わったらお前の神器を調べさせろや。」

どうやら私の神器に興味があるらしい。

「構わないがアザゼル、貴様は神器に詳しいのか？

それに最初はあれだけ私を睨んでいたのに良いのか？」

「おうよ！俺は自他共に認める神器マニアだぜ！詳しくに決まってるんだろ！」

それにお前を警戒すんのは組織の頭として当然だろーが。」

それもそうである。

「なら構わん。ただ」

「会談が成功したら、だろ？」

そんなくらいわかってんよ。

おら！さっさと始めようぜ！」

アザゼルはそう言って話を即した。

なら後は

「シロウ、私も質問して良いかな？」

「私も聞きたいわ。」

彼ら悪魔である。

言葉を発したのはサーゼクスとリアス君だ。

二人の表情に警戒の色は無いが真剣その物である。

「構わない。私に答えられる事は何でも答えよう。」

私がそう発言するとサーゼクスがまず質問してきた。

「なら私から質問させてもらおうよ。」

君は神と旧魔王を殺したみたいだがそれは君が望んだことかい？」

「否」

殺す事を望んだ事など今まで数えるくらいしか無い。  
やむ無く殺す事はあった。9を救う為に1を殺した時はあった。  
しかし望んで殺したことなど無いに等しい。

私の記憶の中では過去の自分を殺そうとしたくらいである。

「そうか……。ならば次に、殺した事に後悔はあるかい？」

「否」

後悔などしてはならない。

殺して後悔するなど万死に値する。

後悔するならば最初から殺さなければ良いのだから。

「……成る程。では次に君は私達魔王を殺すかい？」

「是」

私の答に屋内の緊張感が高まる。  
警戒が再び現れるが

「ただ」

次に発した私の言葉でそれは霧散することになった。

「貴様達が道を誤らない限り、私が貴様達を殺す事は無いだろうな」

緊張は安堵に変わり、警戒は笑顔に変わった。

彼等勢力のトップはそれだけ自信と信頼があるのだろう。  
そしてこの会談を必ず成功させるつもりなのだろう。

ふう。私の出番が無さそうで何よりである。

「わかった。私からは以上だ。」

「次は私ね。」

サーゼクスと入れ替わる様にリアス君が前に出る。

「私が聞きたいのは1つだけよ。  
シロウ。貴方は私の、私達の味方？」

ただ1つの質問。

だが私のこの子達に対する全てを現す質問だ。

リアス君の表情は真剣その物。しかし緊張の色は無く、その瞳には自信が浮かんでいる。

彼女は答えがわかっているのだろう。

だが確認の為に、部員達を完全に安心させる為に部員達の長としてこの様な質問をしてきたのだ。

「勿論」

そして、そんな事決まっている。

「君達の味方だ。」

当たり前のことだ。

何せ私は

「正義の味方だからな。」

正義の味方なら子供を守る。そうだろう？それに私は君に誓ったはずだ。」

忘れたのかな？と言う意味を込めてリアス君を見る。

すると

「忘れて無いわよ。でもそうね……もう一度誓ってちょうだい。私達の味方であることを」

笑いながら言っただけだ。

「くく、了解した。」

これに対して私も笑みを浮かべる。

私は片膝をつきリアス君に頭をたれ新たに誓う

「君達が困った時、私が力になろう！」

君達に危険が訪れた時、私が剣に、盾になろう！」

君達が望む限り、私は君達の味方でいよう！」

依然の誓いはこれまでだった。

しかし今回は違う。

これにもう一つ加えさせてもらおう。

「君達が道を誤った時、私が道を正そう！」

これは誓いであり、契約だ。



私の名にかけて私はこの誓いを、契約を守ろう。」

そう高らかに宣言した。

「……確かに貴方の誓いは受け取りました。そしてこの誓いは、契約。契約は悪魔にとっての絶対。今契約は結ばれた。」

シロウ、これからもよろしく頼むわよ。

貴方のことだからどうせ罰を受けて消えようとも思っていたのでしよう？

残念ね。もう契約したのだから逃がさないわよ。」

それに、と繋げてリアス君は彼女の後ろに並ぶ部員達を振り返った。

「嫌です！お兄様がいなくなるなんて嫌です！」

アーシアが叫ぶ。

相変わらずアーシアは甘えん坊だな。

「俺も嫌ですよ！シロウさんには教えて欲しいことが山ほどあるんですから！」

それにシロウさんの料理が食べられなくなるとか考えたくも無い。俺の楽しみを奪わないでえ〜〜〜！！」

イツセー君も叫ぶ。どうやら私は彼を餌付けしてしまったようだ。

「僕も嫌ですよ。まだシロウさんから一本もとってないんだ。勝ち逃げは許しませんよ！」

祐斗君が意気込む。

やれやれ、まだ当分はとらせるつもりは無いぞ。

「私も嫌だね。貴方といれば私はもっと強くなれる。そんな気がするんだよね。」

ゼノヴィア君が告げる。彼女は確信した様に言うがその自信がどこからくるのだろうか。

「……………私も嫌です。……………食べられなくなるとか最悪です。」  
小猫君が呟く。

……………餌付け2号発見。

「私も嫌ですわ。こんなに頼れる人を逃がす筈がありませんもの。」

朱乃君が微笑む。

……………少し背筋がぞつとしたのは気のせいだと思いたい。

そして

「ほら、誰も貴方がいなくなることを望んでいないのよ。神を殺したから何？魔王を殺したから何？貴方は貴方でしょう。だからシロウはいて良いのよ。」

リアス君が言い放った。

まったく、そう言われては

「了解した。これからもよろしく頼む。」

こう言うしかないではないか。

やれやれ、私の幸運値は低いはずなんだがな。くく、十分に幸運ではないか。

本当にこの世界はわからないものだ。なあ、セイバー

『それもこれも今までシロウがしてきたことの成果です。自信を持つて良いことだと思いますよ。』

そうか。そう言ってくれるか。

それならば自信を持たせてもらおうか。私の成果だとな。

よし。この件はこれで終わりだ。

だから

「私のことで時間をとらせてすまない。  
さあ始めてくれ、三勢力会談を。」

始めてくれ。世界平和の第一歩をな。

私が本当の意味で受け入れられた。そんな会談間際の出来事であったのだ。

二十三話（後書き）

いかがですか？

今回はシロウの過去がばれる回です！

次回はいよいよテロ！シロウはどうなるのか！それは次回で！

ではこれで失礼します！そして感想待ってます！！

二十四話（前書き）

な、なんとか更新。

## 二十四話

三勢力会談が始まる。  
会談自体は滞りなく進んでいく。

これは謂わば確認事項。各勢力の答は決まっているのだからそれも当然だ。

途中、私やリアス君が発言することもあったが後は問題無く進んでいった。

そして話し合いも殆ど終わり、イツセイ君達を含めた雑談になりかけたころ、突然部屋に魔方陣が現れ

「おかしな話しですね。三勢力会談の筈が何故か人間がいるではないですか。  
やれやれ。サーゼクス、とうとう頭がおかしくなったのですか？」

女性らしき人物の声が響いた。  
そして

「…レヴィアタンの紋章。……そうか、君が来るのか。カテレア…  
…」

「……カテレアちゃん」

サーゼクスとセラフオール君が眩き

ビキッ！！

世界が動きを停めた。

この感覚には記憶がある。

これはギヤスパ―君の神器の感覚だ。

一部の者を除き皆が動きを停めた。

幸い私にはこの聖蓋布と《全て遠き理想郷》、そしてセイバー抵抗  
力も合わさり事なきを得ているが、この力は尋常ではない！

ギヤスパ―君の行使する容量を完全に越えている。  
彼に何が起きたのだ。

内心焦る私を他所に事態は進んで行く。

魔方阵からは女性が現れ、同時にこの学園に複数の、それも10や  
20では足りないほどの気配が突然現れたのだ。

これは



「さあ、始めましょうか！この会談の失敗を！  
そして新たな秩序が生まれるのです！  
あなた方の死によって！」

テロかつ！！

ぎりっ、と歯を噛み締める音が聞こえる。

これは誰のだろうか。私のか？アザゼルか？それともサーゼクスか？  
いや、きっと皆だろう。

そして最初に動き出したのは

「私は外のテロリストを駆逐してこよう！失礼する！！」

私だった。

今動けるメンバーでたいして重要な位置にいないのは私であり、自由  
に動けるのも私である。

部屋に現れた女性も気になるが、この際仕方ない。誰かが外の対処  
をしなくてはいけないのだから。

それにこの部屋には魔王二人に墮天使の総督、白龍皇、そして大天使長がいるのだ。そうそう大事にはいたらないはずである。

故に部屋を飛び出した。

部屋のガラスを蹴り破り校庭に着地して現れた魔方陣の、更にそこから召喚された者達の前に立ち塞がる。

「来い、セイバー！掃討戦だ！！」

君の力を見せてやれ！！」

「イエス、マイマスター！！」

静かで凜とした、それでいて力強い声が響き

カツ！！！！

まばゆいほどの光が辺りを照らす。

白銀。正にその一言につきる。

そして光が晴れるとそこにはまたもや白銀があった。

しかしそれは光では無い。  
正確には光だけでは無いのだ。

龍。白銀の龍がそこにはいた。

言わずもながらセイバーである。

龍にしては小さい。しかしそれは龍にしてはの話し。

人からすれば6mを超えるその体は巨体と言わずに何と云うのだろうか。

セイバーはその白銀の体を大きく広げ私の背後ではばたいている。

その姿は神々しく味方には希望を、そして荒々しくもあり敵には絶望を与えるだろう。

私とセイバー、この2つの存在がテロリスト達の動きを完全に止めた。

「一人たりとも此処は通さん。

通りたければ私達を打ち倒して行け！

出来るのならなっ！」

闘いが始まる。

アザゼル side

あの人間、エミヤが部屋を出て行き外の掃除が始まった。

正しく掃除だ。

奴が呼び出した白銀の龍。おそらくあれが奴の神器なんだろう。

その龍と共に凄まじい勢いでテロリスト共が減っていく。

俺やヴァーリの様な魔術などを用いた殲滅攻撃では無く白兵戦でだ。

それくらいは俺達でも余裕で出来る。

出来るがそれを行なっているのが人間だというのが問題だ。

神滅具の様な特殊な神器ならば納得が出来るが、奴の話を聞く限りあの神器の龍は生まれてまだ数年。

力は未知数だが顕現された状態では神器の力は奴にはフィードバックされないとのことだ。

つまりあれがエミヤの実力。

そして奴はまだ本気を出していない。  
神と魔王を襲ったあの刀剣の雨を一度も使っていない。

……流石はかつて神と魔王を殺した男ってわけだ。

さて、こちらにも始めるとしよーかね！

赤龍帝のガキとサーゼクスの妹はハーフヴァンパイアの元に送り出した。

聖魔剣のガキと聖剣使いの小娘も外の掃除に回したしヴァーリも向かわせた。

《渦の団》の動向が気にはなるがこの場では問題ないだろう。

後は旧魔王の遺物であるこの女だ。

まあここは俺が行くか。試したいこともあるしな！

行くぜファーニブル！

お前のお披露目としゃれこもうじゃねえか！！

アザゼル side out

祐斗 side

部長とイツセイ君がギャスパーの救出に向かい、僕とゼノヴィアがシロウさんと共に外の敵に対処するために来たんだけど

「……ゼノヴィア、やること無いね。」

「ああ、そうだね。敵が一人も来ないよ。」

誰もシロウさんとセイバーを抜けて来ないのだ。

いや、むしろ始めより減っている。

次々と召喚されているのにも関わらずだ。

敵が一人も来ない、だからと言ってあそこに突っ込もうとは思えない。  
だって

「まるで嵐だね。」

ゼノヴィアが呟く。

そう、まるで嵐だ。

セイバーが中央で暴れ回り、上空から白龍皇による魔術攻撃。さらには逃げ延びた者達もシロウさんに討ち取られて行く。

……シロウさんは良くあそこで戦えるよ。

悔しいけど僕には無理だ。飛び込んだ瞬間に死なないまでもズタズタになることは容易に想像できる。

それにしてもシロウさん。セイバーのどこが手加減が苦手なのかな？

確かにパワーに関してはそうかもしれないけど技術、技量に関しては十分に上手だ。

僕との模擬戦の時はもつと直線的だった。

それでも凄まじい強さだったのにこれは何だ？

まるで人の様に避け、人の様に舞い、人の様に斬りつける。

それでいて龍の体を存分に活かした攻撃も相まって、龍と人が1つになった様な戦いがここにはあった。

そしてそこに計算されたかの様に繰り出される魔力弾の雨と、その2つの驚異をもともせず突き進むシロウさん。

この中でどれが一番異常かと問われれば当然シロウさんだ。

彼だけは人間だからだ。

あんなこと普通は出来ない。

あそこにいるのがセイバーだけならまだしも白龍皇までいてあの様に動ける筈が無い。

一歩間違えれば即、死に繋がるギリギリの綱渡りを彼は難なくこなしている。

それも何かで身を守りながらでは無く、体捌きのみでだ。

シロウさんの話しを聞いて彼の強さの一端を知ったつもりだった。でもそれは過小評価だったみたいだ。

計り知れない。

底が見えない。

彼は自分には才能が無いと言っていた。確かに彼の剣には才能は感じられない。でも彼の技量は本物。一部の者にしか到達出来ない頂きに彼はいる。

どれほど己を鍛えたのだろうか、どれほど虐めぬいたのだろうか。



どれほど愚直に続けて来たのだろうか。

イツセイ君がシロウさんを尊敬するのわかる。

僕も彼を恐れ、尊敬せずにはいられない。彼を知れば誰もが思うだろう。

故に思った。

正式に彼に師事したいと。

故に思った。

経験を彼に学びたいと。

故に思った。

彼を超えたいと。

どうやらそれは僕だけではないらしい。

隣で闘いを見るゼノヴィアも同じ様なことを考えているようだ。

その表情は真剣その物。しかし笑みを浮かべ、時折武者震いの様に震えている。

この様子から一目瞭然だ。だって多分、僕も同じだろうからね。

さて、いつまでも見てるだけって訳にはいかないね。

アザゼルとあのレヴィアタンの末裔の闘いも始まったし僕達も動くか！

「ゼノヴィア」「木場」

僕達の声が重なり視線が会う。

やはり同じ様なことを考えているみたいだ。

僕達は同時に頷き駆け出した。

目指すは敵の背後！目的は

「「召喚陣の破壊！！」」

僕達は僕達に出来る闘いをしようか！

祐斗 s i d e o u t

白龍皇 s i d e

「やはり強いな……」

純粹な感想だった。

エミヤシロウ。英雄であり英霊にまで昇華した元一般人だった人間。奴の過去に何があり英雄なったのかは興味が無いと言えは嘘になるが、それよりも俺は

「ああ、闘いたい。」

闘いたかった。

ただ闘いたかった。

余計なことは何も考えずにただただ闘いたかった。

魔術攻撃で雑魚の掃除をしながら試しにエミヤや白銀の龍を狙ってみたがことごとくを避けられた。

ふふふ、昂って仕方がない。

元々俺の目的は強者との闘争だがここまで誰かと闘いたいののは久しぶりだ。

でもまだ早い。まだ奴は完全に熟していないからだ。

今のエミヤでも俺は勝てるかわからない。勝敗がどちらに転んだとしても双方、無事では無いだろう。

それほどにエミヤ自身は完成された存在だった。

では何故俺は奴を熟していないと評したのか。それはあの龍にあった。

「アルビオン。あの龍をどう思う？」

『所詮は生まれて数年の者。龍だけではまだまだ我等の相手にはならない。』

おおよそ俺と同じ見解である。

『しかし』

とアルビオンは続けた。

『あの歳であるの戦闘能力は異常だ。奴の潜在能力は未知数すぎる。それに奴は生まれながらにして龍であり神器。もし《禁手》に至った時はどうなるかわからんな』

やはりアルビオンもそう思うか。それに

「神と魔王の最後の遺物。俺達の《覇龍》と同様にもう1段階、上があるかもしれない……」

『我等二天龍は力の開放だがな。まああり得ない話では無いだろう。ヴァーリよ。楽しむのも結構だがほどほどにしておけ。あの人間は危険だ。それは今の状態でも、だ。あり得ないとは思うが人間の身にして我等二天龍を超える可能性が無いとも言えない。奴を見ていとそう思わされてしまう。』

敵対するなら早い内にケリをつけるのが得策だぞ。』

だろうな。だがなアルビオン。だからこそ

「楽しいんじゃないか。」

『言つと思つたわ……』

アルビオンが呆れた様な声をだすが

『だが、それでこそ我が宿主だ！闘いこそ我等が本質！強者を打ち倒してこそ我等が存在意義！闘わずして何が龍だ！』

さあ！共に行こう！ヴァーリ、お前もまだまだ強くなれるのだからな！』

ふふふ、なんだかんだ言ってもアルビオンも闘いが好きなわけだ。  
流石は俺の神器である。

まあまだエミヤとは闘わない。  
楽しみはとっておかなくてはなあ。

そんなことを考えながら俺は少し離れた場所で闘うアザゼルと女、  
カテレアを見る。

やはりアザゼルも強いな。カテレアも頑張ってはいるがアザゼルに  
は及ばない。

仕方がない。思っていたより早い。元の立ち位置に戻るとしようか！

「行くぞ、アルビオン」

『了解した』

さあ、自己紹介としようか！

二十四話(後書き)

次回！バトル勃発！

の予定？

感想待ってます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1611w/>

---

ハイスクールD×D 正義の味方

2011年10月31日05時14分発行